川柳塔

昭和二六年一月九日 第三種郵便物認可
平成元年八月二十五日 印刷
平成元年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七四八号

日川協加盟

No.748

特集　百人一句

九月号

川柳塔慰霊碑
建立募金のご案内

初代川柳二百年忌と麻生路郎二十五回忌の年に当り、このたび総本山金剛峯寺高野山大霊園に川柳塔物故者の慰霊碑（五輪塔）と、「川柳は人間陶冶の詩である」の路郎語録を刻んだ石標を建立する運びとなりました。

墓域は匿名同人の寄贈により確保出来ましたので、慰霊碑と石標の建立、ならびに開眼式などの基金を左記の通り募集いたします。

「倶会一処」の聖域への意義深い趣旨に、同人諸氏のご賛同と絶大なるご支援をお願いいたします。

一、募金目標額　**二百萬円**

一、一口　**五千円**（何口でも可）

一、完成予定は**平成元年十一月**

☆送金は現金封筒、小為替、振り込み等で川柳塔社会計室（高杉鬼遊方）へ

〒581 八尾市中田二丁三〇二

振替口座　大阪8—三三三六八番

川柳塔社

柳翁二百年忌記念
川村好郎氏を偲ぶ会

本社九月句会

日時　平成元年9月4日（月）午後6時開会

会場　メンズファッションセンター3階
大阪市東区内本町1—1　電話（941）1918
地下鉄「谷町4丁目」下車（2番出口）交差点西南角

おはなし　高杉　鬼遊

兼題　「珈琲」　宮西　弥生　選
「川」　河内　天笑　選
「村」　笠原　吸江　選
「遍歴」　西尾　栞　選

席題　2題　兼・席題とも3句以内

締切　午後7時

会費　500円

投句　柳箋（4cm×19cm）に1葉1句。
各葉ごとに裏面に氏名（雅号）明記、
投句料310円（62円切手5枚）同封。

川柳塔社

倶会一処

西尾　栞

七月三十一日、薫風・柳宏子の両氏と私と三人、二年ぶりで高野山の奥の院の蟬時雨の中に佇った。

というのは、この度、奇特な人の寄贈で、霊地の一区画を戴いたので、その地を見聞に行ったのである。大変、閑かな良い環境で、あたりには、そごう百貨店の従業員の慰霊碑や（株）コクヨの供養塔のあるところで、静かな中にも、賑やかなたたずまいの処であった。

翌八月朔日の営任理事会に、その霊域の話をして、ここに麻生路郎を始祖とした路郎以下現川柳塔の同人一同の慰霊碑とするか、供養塔とするか、今後の相談として、そんな碑を建てて、川柳塔誌初代主幹中島生々庵以下の物故同人並びに今後の物故同人の柳号を記して供養したいという意見に一致した。

普通、我々の俗名並びに戒名の墓は、それぞれ、故里の墓に眠るが、ここの供養塔（慰霊碑）には、姓と柳号と没年月を記したもので、死んでも川柳塔同人の結束を図った霊の温かい倶会一処の塔（碑）となるのである。

勿論、遠近を問わず、この高野の聖域に、死して尚、川柳を語り合おうと思って、こんな企画を立てた次第である。幸い常任理事会の大賛成を得て、目下、具体化が進められている。川柳塔同人の方の御賛同を得られれば洵に幸いである。

帰途二年前の追悼川柳大会のあった普賢院さんへ寄った。あの時、皆さんが苦労して下さった高い山の会場にはエレベーターがついて奇麗な部屋が並び、すっかり面目を一新していた。当日の智子さんの活躍ぶりを思い出して、一度、智子さんを案内して慰めねばと話しながら山を降りた。

座右の句

老司祭黒にも無垢の衣あり　（薫風）

私の句

流れ星願う間もなく闇が呑む　松永すすむ

川柳塔　九月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

俱会一処……西尾栞……(1)
古くて新しい国……田中正坊……(2)
川柳塔（同人吟）……西尾栞選……(4)
自選集……(32)
■川柳太平記(136)　川柳の群像　森田茗人……東野大八……(36)
■新連載　柳籠裏三篇研究（一丁）……(38)
水煙抄……黒川紫香選……(40)
秀句鑑賞「同人吟」……大矢十郎……(35)
　　「水煙抄」……有働芳仙……(59)
89年度路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表……(60)
愛染帖……橘高薫風選……(63)

古くて新しい国

田中正坊

三冊目のパスポートによる初旅行は、予期せぬことから韓国行きとなった。昨年のオリンピック開催を契機に、すっかり様相を新たにしたことは、新聞やテレビで承知していたが、去る五月、福岡で開かれた「アジア太平洋博」で訪れた韓国館が、民族衣装をまとった清楚な案内嬢を含めて非常に印象が好く、地図やガイドブックまでプレゼントされた。そこへ格安なツアーがあるので行かないか、という誘いがかかった。

出発予定日の七月二十六日は、現地の天候不良のためにキャンセルとなり、翌朝の日航臨時便で釜山に飛んだが、空港に到着すると一行は私たち夫妻と娘一家の五人だけで、専属のガイドが付き、ワゴン車による家族旅行となった。その日は新羅王朝の古都として知られる慶州へ直行し、韓国十大寺院の一つで石造の多宝塔・釈迦塔がある仏国寺に参拝、さらに正式には大陵苑と呼ばれる古墳公園や国立慶州博物館を見学した。

そこからソウル郊外にある温陽市への六時間のドライブはハードだったが、道路は名神

■女性コーナー　茴香の花 …… 小出智子選 …(66)
〈特集〉現代川柳作家　百人一句 …… (68)
「牛」…… 宮口笛生選 …(74)
一路集「謝る」…… 松本今日子選 …(74)
「ブラシ」…… 神平狂虎選 …(75)
初歩教室「月」…… 阿萬萬的 …(76)
川柳塔第四回勉強会　小池しげお・月原宵明・吉岡きみえ …… (78)
本社八月句会…… (82)
各地柳壇（佳句地10選／中西兼治郎）…… (86)
柳界展望 …… (97)
■九月各地句会案内 …… (99)
■編集後記 …… (101)

座右の句

生きるとは汚れる事か月光よ　（狂虎）

私の句

挫折から一つの門が開かれる　田中輝子

並みのハイ・ウェーで、ホテルの温泉大浴場で疲れを休め、二十八日は午前中から目的地のソウル市内に入った。東京にひってきする人口約千万人のこの大都市を一日で観光するのは、はじめから無理な話で、市内を走りながら国宝第一号の南大門や漢江の河畔にそそりたつ六十三階建の大韓生命ビルを遠望し、朝鮮王朝の正宮であった景福宮に向かった。

この宮殿は、北京の故宮を小規模にしたようなたたずまいで、中国文化が色濃く投影しているのを感じたが、その敷地の中心部に建っているのが韓国最大の国立中央博物館。案内書のどこにも記載されていなかったが、ガイドの尹さんに聞いてみると、これはかつての朝鮮総督府の庁舎であった。彼女は私たちへの配慮か、日本統治時代のことにはほとんど触れなかったが、史跡の案内で文禄・慶長の役に言及したのにはハッとさせられた。

国土をローラーでかけたようなあの朝鮮戦争で無残に破壊された韓国だが、私の見たかぎりでは古文化財は見事に保存・復原され、古い歴史と伝統を誇っていた。また、長い間窮乏にあえいだ国民が、今は胸を張って闊歩しており、街を走る車はすべて国産車で、まだ開発途上とはいえ、高層ビルが立ち並ぶソウルは、世界のどの国の首都と比べても見劣りしない。わずか三日間の旅ではあったが、私はこの古くて新しい国を再発見した。

川柳塔

西尾栞選

守口市　結城君子

街中のストレス消えた阿波踊り
地下鉄の車両に相談かき消され
いかの孵化漫画のように生きている
風の音核家族って淋しいね
一日の長さ短さ沙羅ゆうべ
友に言われ夫の優しさに気づく

豊中市　吉田あずき

雑踏を空へ逃れて飲むビール
ミニ缶が丁度でビールの味覚え
昇格がわかる隣のお中元
又一つ星の消されるビルが建つ
神代から慈愛も崇りも持つ女
縛らせておいて女は輪から抜け

鳥取県　江原とみお

限界へ来たなと思う尺取り虫
火消し壺へけじめを一つ抛りこむ
銭勘定するには丁度いい雨だ
雨の日は大正琴を弾いている
芹薺食わせてくれるものを食う
次郎くんも裸　蛙の子もはだか

西宮市　西口いわゑ

金魚鉢の中の自由は知れたもの
得意満面小さな嘘も混ぜながら
悪いとこばかり似ている似顔絵だ
口紅を拭いても残る悔い一つ
孫の写真眼鏡を拭いて手を拭いて
麻の葉のゆかたの夢も遠くなり

松原市　谷垣史好

愛しちゃったら足の指まで可愛くて
あぶな絵の世界で男労られ
手に余る重さ女と広辞苑
人生に懐疑を持たず太りすぎ
僕よりもうまそうに食う浮浪者よ
シュプレヒコールは泡ふく蟹に似て

兵庫県　遠山可住

老いひとり余るご飯が捨てられず
戦友会だけは万障くりあわせ
山びこに会いたくなったにぎりめし
定年の男の家事が行き届き
ひとりしゃべって女得心して帰る
焼きめしの湯気に染ったまねき猫

平田市　久家代仕男

朝顔にひと足早い母の咳
せっかちで転ばぬ先の杖を折る
雑兵の冑をつけて蝗とぶ
幾何学を復習してる蜘蛛の知恵
油揚げの三角なわけ聞かれても
楢山の夏は甚平の客で混み

弘前市　波多野五楽庵

螢雪の功を忘れてしまう辞書
試されたキムチが舌で暴れ出す
捜査課に仏が一人鬼一人
補聴器をはずし債鬼と逢いに行く
白眼視覚悟で正面席にいる
個性ってなんだ男の浪花節

八尾市　高杉鬼遊

八月の影が音する風鈴屋
冷や奴いのちの先のうす明り
この怨み忘れるものか消費税
これからの散歩たけやぶごみ捨て場
ある時に燃えても欲しいかすみ草
秋風に鳴る風鈴も鈴の屋忌

豊中市　安藤寿美子

礼状にそえる一句がまとまらず
名画かも知れんが私は要りません
脛の傷あっちを向いてなでている
慌ててる男を見ないようにする
何してもどれも下手くそ梅雨ごもり
美女が来る美女だといわねばならないか

倉敷市　野田素身郎

なんで俺みたいな者にこのチラシ
孝行の真似事墓の草を取り
この一句酒が入ったときのもの
右翼ではない軍歌は僕の青春だ
客寄せの優待券で買いすぎる
検査技師美人心電図乱れ

熊本市　永田俊子

煮豆がふきこぼれてるわたしの喜び
脱線はもう許されません下り坂
九官鳥が歌ってるあなたお馬鹿さんね
回転扉虚実の区別つきません
恋うれしかなし恨めしいろはにほ
昭和逝きひばり逝き水車が回る

鳥取県　林露杖

夾竹桃寂しき花よ原爆忌
恋というのには儚き老いの思慕

どっちゃでもええがな湯豆腐冷奴
無投票町議選挙は肩透し
自民党掘った墓穴が深過ぎて
さりながら社会主義では建たぬ国

竹原市　小島蘭幸

湯豆腐の師と割勘にして貰う
浴衣浴衣まだてのひらの中にいる
エレベーターにひとり集金鞄もつ
おもしろいことしかしゃべらない髭よ
甲虫の夫婦　夜店の灯が暗い
夏休みのプランへ父は斬り込めぬ

倉敷市　小野克枝

子には子の親には親の深い森
疲れたと言える案山子に友があり
四十一円の葉書おんなじ音で落ち
孫を抱くときの笑顔よ安らぎよ
背負われる齢になったか夏の雲
明日の絵描いて進めよ車椅子

大阪市　江城修史

盾となる妻の背中にある温み
忘却と風化の中の面影よ
まだボケぬ証しに暮しの詩綴る
灰色の彼方に消えた青春譜
健康な時はよかった人が寄り
いとおしむ命たしかに日が暮れる

鳥取県　新家完司

トイレでは楽しいことを考える
気分転換となりの街のポストまで
カネモチデケチデコシャクデズルイクニ
町内の人とはすぐに妥協する
こんなわたしに麦酒が冷えている
挨拶は葬儀屋さんがしてくれる

大阪市　西出楓楽

それは見事に明日を信じている花芽
後悔の固まりでいる二日酔
ウエルテルもロッテも胸の底の底
子の齢をたまに忘れることにする
まわれ右して逆風を順風に
あわてると育ちがみんな出てしまう

和歌山市　西山幸

玉子割る今日の戦の始まりに
ポストの赤も確かな闘志だとおもう
カラヤンが逝くあの夢もこの夢も
木偶人形の目も涙壺もっている
セレモニーだから許しておく台詞
風鈴も自問自答をしているか

名古屋市　越村枯梢

割箸の素直に割れぬ深情け
留守番電話に追従笑いする不覚
旧交を温める俺とお前の認識票
年金を後生大事に抱いて生き
三パーセント足して骨壺買ってくる

つんのめり又つんのめり桐の下駄
堺市　中川滋雀

句碑しかと御陵のみどり深くなる（八木摩天郎氏句碑）
折返し点から欲が一つふえ
先の長い話に開ける玉手箱
悠々自適そうとも見える池の鯉
仁丹を口に含んだ失語症
天井がこんなに広い妻の留守
寝屋川市　岸野あやめ

年寄りに年寄りなりの金が要り
夫婦ではないなと仲居さん思い
肩パッド力を籍してくれますか
踏んばって歩きなさるなよ蛙
ほんとよりもっと本当らしい嘘
相談にだんだん歯切れ悪くなる
京都市　都倉求芽

身構える花に気づかぬ花鋏
花の蜜みな平等に翅休む
蓮閉じてこの世の旅も夕暮れる
夕映えに明日を託して木槿落つ
山の湯の夏とは言えどはや暮れる
旅人に明日を与えん雲の峰
岡山県　嘉数兆代賀

許し合うことから今日がはじまりぬ
人間臭く生きて神さま仏さま
手垢まみれの辞書へ亡母が生きている
願いごと叶わぬままに風は秋
風が哭く地が哭く人間不信の日
祈りつづけて莫迦な水車は回るなり
和歌山市　福本英子

空っぽのポストを覗く飢えている
溶きかけの絵の具が皿で風邪をひく
爪に火を点した生活訥々と
針の糸通らず遺影の夫若い
合鍵三個独り住まいとも知らず
隣からビフテキ匂う盂蘭盆会
桜井市　岩本雀踊子

年上の女房に鈴を付けられる
渦巻きの家紋を背負う蝸牛
来世があったら違う妻がよい
一本の杭に流れが変る渦
原子炉に石器時代の絵を描こう
サーカスの象の瞳が亡母に似る
米子市　林荒介

ぬかずけば熱い合掌のしじま
表礼の痩せて親父を浮き彫りに
時を跨いで語り続ける埴輪の眸
生卵子落として朝を整える
わたくしの地図に朱筆は入れさせぬ
忌を焚いて古い情けを注ぎ分ける
大阪市　津守柳伸

言い訳をしない社長のまわり椅子

天職へ自問自答をくり返す
ストレスを消す軍艦マーチ聞きながら
生活の知恵雑音の四捨五入
真夜中に願う極楽直行便
振り出しに戻る勇気のある喪服　高槻市　辻　白渓子

敗北の汗には残っていない悔い
場所替えて商談別の手を使う
陽の当るベンチへいつも居る無職
紅一点にリードされてる生ビール
飯炊ける良人で入院気にならず
森に住む鬼は平和を好まない　下関市　石川　侃流洞

仏壇の花絶やさず育ててくれる嫁
紙コップ固い話はよしましょう
まだ七十やすやすZ旗降ろせるか
ぬるま湯で脳細胞が痩せていく
髭立てて見ようマンネリ抜けるかも　松原市　玉置　重人

改札を通り元栓気にかかり
他人さんのことです軽く聞き流す
火遊びの夢をときどき見ています
アレルギーここも冷房ききすぎる
九連休がなんだ毎日休みだぞ　奈良市　宮口　笛生

十年で父に追いつく生きられるかな
大ジョッキ夏の食欲旺盛で
包丁がよう切れている台所
胃袋が無いのに酒なら入ります
命乞いなどは聞かない俎で　奈良市　天正　千梢

十人十色周波数もまちまちで
この指にとまればいい事ありそうで
安達太良の空が見たくて途中下車
金持ってしっかり臆病になっている
空回りする所へ金を使いすぎ　奈良県　長谷川　春蘭

元気でね長生きしてねと親思い
診断の軽さが嬉し窓の風
侘び住い今も仲よし扇風機
錆釘に所を得たる古風鈴
襖絵に無我のひととき蟬しぐれ　奈良県　田中　紀美代

あじさいに梅雨を乗り切る術学ぶ
優しいねと母が言うので婚約す
喜びの内緒隠さぬようにする
とり肌が立つほど素敵な人に会い
出会っては困るお方にまた出会い　柳井市　弘津　柳慶

かあちゃんよ今なら婦唱夫随なり
本心を打ち明けたのに座がしらけ
誤字脱字おかまいなしにコピーされ

旅立ちへ父も意見を添えておく
市制百年僕は生れていなかった

倉敷市　稲田豊作

生者必滅そんな約束して生まれ
サラリーを渡した良人の斛です
早起きの得三文に据え置かれ
満座の目浴びて勇気が吃りだす
あの人の釣書血統書みたい

京部市　松川杜的

金封へ書道の文字が気にいらぬ
ゼンマイが切れたよう欲しくなるコーヒ
一応は死亡欄にも目を通す
首の辺女の齢はごまかせぬ
観海流初段の免状なら持ってます

藤井寺市　吉岡美房

鳴呼軍歌一足先に散った戦友
予科練で死ねと言ったのも世論
敗戦忌もう語り部に後がない
会者定離ああボーナスよお前もか
七夕の星を団扇で教えられ

今治市　越智一水

失恋のそれからグラスに影浮かぶ
病む母を見舞えば母に見舞われる
農一筋母は嘘言うすべ知らず
草刈れば虫よお前はどこで鳴く
苦労人嘘と知っててさからわず

今治市　矢野佳雲

嫁姑組んで内緒の笑い声
裏のある暮らしを憎む青リンゴ
パンダ飼う秘訣を聞いてどうするの
ツーカーが利かず錆びてる鍵の穴
皿一枚落として猫は横に跳び

西条市　片上明水

すぐ人を信ずる父で手をつなぐ
コマーシャルの主役若さに替えて夏
転んでも起してくれぬまちに慣れ
肩の荷が軽くて罪を忘れそう
記念樹の高さに明日を励まされ

兵庫県　辻文平

孫を抱く片手で恋を詠む女
イエスともノーとも読めてくる伏目
サングラス外すと見える空の蒼
良妻を演じて腰のサロンパス
真直ぐに歩くとみんなついてくる

高知県　赤川菊野

四万十の川へ冬の絵捨てました
銭金はないが情けはたんと持ち
鯉のぼり軍服なんか着せないで
年金の枠で泣いたり笑ったり
モチーフが溜り溜ってまだ逢えぬ

出雲市　板垣夢酔

松茸がニイハオなどとしゃべり出す

受話器をガチャンと切った物別れ
膝枕させて寝首を掻く思案
黒い靴悲しみばかり聞かされる
言いたいことハッキリ言わぬ蟹の泡

倉吉市　奥谷弘朗

町内に天気男と言うがおり
折れて出るコツも身につく齢に成り
シベリヤの俺を生かした妻の文
カラオケで練ったマイクとすぐ分かり
筆無精だけが似ていて苦笑い

倉吉市　渡辺独歩

祝杯は紆余曲折の詩を持つ
ウォーターフロントに小股の切れたいい女
与作にも会ってもみたい旅を組む
モジリアニの裸婦からわいせつ感じるか
招かれて出雲の国の陽だまりに

羽咋市　三宅ろ亭

禁煙の帳尻合わす酒一合
円満の秘訣答える夫随ぶり
悪妻へたまには立てる大謀反
烏五羽雌雄判別できますか
自閉症時には人を黙らせる

豊中市　田中正坊

王様の声聞いた日の百日紅
なすトマトきゅうりピーマン夏の雲
セピア色ゴッホがえがく秋の森
言い分は私にもある鳩時計
人妻と歩く山梔子匂う径

岡山市　時末一灯

背に蟻が這うおもいする新造語
密談をするは保守派の蟻だろう
拳から君子豹変握手する
ポケットの拳出番もなくて済み
黄昏れるビルが故郷になっている

岡山市　川端柳子

着こなして一番好きな和服です
よろこびと心配二人の子に貰い
晴雨兼用傘の雫をいとおしみ
働いた汗子宝で蘇生する
台風の心変わりよアリガトウ

松原市　佐藤藤子

尼さんになっても面倒みるという
身勝手はおたがいさまねカラスの子
かみしめる涙を明日の糧とせる
遅咲きの藤ふりむかれゆれている
ああそうかそうかと彼はきき上手

笠岡市　松本忠三

蛇の道はへび人間が踏みはずし
賽銭の嵩神様は教えない
冗談はよして期待をしてるくせ
正常な頭理解に苦しんで
この道は何時か来た道忘れてる

東大阪市　森下愛論

百歳になろうがときめき感じたい
窓際になって欠伸の気兼ねなし
横文字のカルテ気になるドック入り
神木の巨大な縄のネックレス
夏の恋落葉と共に焼き捨てる

呉市　林野甦光

自惚れが貧しい影を弾ませる
一人おいて次がわたしの息子です
こだわればみんなおかしな国に住み
看護婦の名前覚えてまだ癒えず
取敢えず明日の仕事を下見する

西宮市　林はつ絵

遙かなる時間をここに置く琥珀
入れ墨のように昭和が染みている
スマイルを解放されて今日終る
諸々と悲劇を背負うことはない
贅肉を少し落して自慢する

尼崎市　春城武庫坊

くぬぎ林の味を知らないかぶと虫
聞き役にまわると弥陀の顔に似る
はっきりと断るために歯を磨く
胃カメラで無事妻にしゃぶしゃぶおごられる
マンションに明かりの消えぬ部屋がある

尼崎市　春城年代

理不尽な思いを残し梅雨明ける
ある図式もはやがんこになり申し
こんな筈ないところころ健忘症
身の内の夜叉をこっそり飼い馴らす
結ばれた日のはるけくも天の川

尼崎市　奥山美智子

しゃちほこは昔話が好きである（松山城）
子規堂で文才授かる筆なでる（子規堂）
坊ちゃんと付ければ売れる土産物（道後温泉）
石段の一つ一つにある祈り（琴平さん）
祝い酒こころおきなく酌み交わす

堺市　高橋千万子

偶然か物の弾みか必然か
裁かれるよな気ボーナス封を切る
多数決タバコくの字に曲げて起つ
黙殺は弱い私の口答え
レシートも使い道あり駐車場

伊丹市　樫谷寿馬

大脳の渇きを癒やす古書の店
均等法お酌するひとされる人
危機感を抱いて夫婦の仲が良い
七十の血はさらさらと採血管
中元へ澄んだ心が濁り出し

松山市　谷信夫

人形の名は美香ちゃんとつけました
旅だちの日はお天気がよいように
出張で来たとひょっこり息子来る

合掌をすれば嬉しい今日になる
南無阿弥陀梅雨の晴れ間の合歓の花

仙台市　川村映輝

悪口ならお任せ雌鳥せせりでる
世が乱れ雌鳥一斉歌いだし
国家予算に影響するほど寿命のび
長生きしそうなので洋服新調す
人間は平和だけではあきたらず

八尾市　宮西弥生

争いになる財産だから絵を買おう
おだてにも乗ってみよう酔ってから
ぽっくり寺の歴史を知ってから止める
雷がほしいところで雨が止む
軽井沢の夏に招ばれて夏燃える

八尾市　宮崎シマ子

雑踏で頭を冷すこともある
父おくる挽歌野の風山の風
真からの和解互いに泣きながら
朝市で税のかからぬ野菜買う
他人の罪被っていますお月様

八尾市　鷲見章

ヒロシマの絵に少年が立ち尽す
レントゲンこの腰骨が軋むのか
通夜に出す娘に挨拶をひと通り
キャンペーン過疎創生の昼花火
胎動の喪服の帯を締め直す

宇部市　平田実男

お隣が増築妻の不整脈
この杭が隣との溝深くする
たかがネクタイへ農夫の首がだるい
孫三人男障子は張り替えず
スプーンで食べて西瓜の味がせず

米子市　小西雄々

婦警から見ればピエロが多すぎる
ロザリオの涙へ傷が一つ減り
モナリザの笑みを婦警からもらう
ドングリの立場で背丈くらべ合う
思い出へ胸の蛍が眠らない

米子市　石垣花子

砂かんで貝がら小さな謀叛する
孫のこと子のことはもう口にせぬ
聞き分けの良い日の病床希望持ち
食う時は天使のような顔になる
たった一つ手がかりになる歯のカルテ

米子市　林瑞枝

行きずりの街で愉しい耳掃除
生き生きと夜明けの顔のある街に
ここ掘れワン　マルサの直感また当る
フルムーン遙か駱駝の背に乗って
向日葵の影に会釈をしてしまう

米子市　青戸田鶴

トップ変る別に暮しは変らない

つつましい幸でたる茄子の花

アメリカ・カナダの旅

摩天楼高さにさほど驚かぬ
行けども行けどもロッキーの峰果てしない
どこに行っても日本人がいる不思議

米子市　野坂なみ

菊の杯いただくご縁ありがとう
殿りでペダルを踏んでいる安堵
ときどきは井戸に隠れてみる蛙
パスポート幸せ過ぎて語らない
野の花でどんな風にも慌てない

米子市　菅井とも子

法被着てみんなで祭盛りあげる
本番で浴衣が映えるアンコール
三度目に跳んだところで諦める
退院をしてカロリーに悩まされ
南洋の話　夫の終戦日

米子市　田中亜弥

売れぬ絵に夏の陽ざしはきつすぎる
似かよった絆の中で経をよむ
日本一の夕陽ですよと旅人へ
リクルートも知っておりますうちの猫
向う岸の花が見たくて遠まわり

米子市　政岡日枝子

女集って鳥になる風になる
母が集うと校舎ゆるがす声になる
期待を浴びて椅子が自滅したそうな
鮮やかに運命線は裏切った
動かない雲だ病気がすすんでいる

米子市　寺沢みど里

白髪になっても花の絵は描ける
鬼あざみ何時かわたしも土になる
流れ星また思い出を遠ざける
ふる里に愚痴を通わす窓がある
原色をぼかし自分を塗り変える

米子市　澤田千春

旅仲間笑い袋をひらき合う
嫁の挨拶ステキな和音かなでます
遠い日になくした毬が戸をたたく
追いこした風がふり向く曲り角
父の顔まあるく耐えたしわがある

米子市　川上より子

ふるさとに根をはり四季の絵になろう
あこがれの絵の中にある鯉のぼり
慌てるな彼岸の母の叱る声
初恋と偏差値太郎の樹が揺れる
良い顔になってる友に会うのだな

島根県　堀江正朗

瞳を閉じて心流した風の味
真っ白だそうな我が家の夕顔も
寝て起きて三度のごはんありがたい
つまずいた痛み笑ってすむ高さ

言いはって勘のズレかと気付くとき
島根県　西村早苗

遠慮した音で付き添い氷割る
表情が可愛い歯がないからかしら
片道は歩こう蟬しぐれが誘う
男のようで女のようでボロシャツ
咳払いして玄関を開けさせる
島根県　堀江芳子

来世は戦などせぬ夫と添う
手入れする庭木に石に話しかけ
文明の世にも女手欠かせない
コスモスの道から続く秋の天
言訳がきれいすぎてて腑に落ちぬ
島根県　榊原秀子

五月病だろうかひしと孤独感
ふるさとの風耳底にきいている
雑草に負けそうになる口惜しさ
買いかぶりですと抗議がしたいこと
長生きの人神さまが胸に棲む
島根県　錦織文子

私だけのひととき独りの草を引く
人が人を慰めることのむずかしき
すれちがう和服へ好きな初夏の彩
庭下駄の朝へやさしい百合の彩
孫を待ち子を待つ夕べにある平和
島根県　小砂白汀

働けどプラスマイナスゼロでした
借金も財産ですと動じない
老いぼれは死んで下され消費税
ぼたもちを素手で抓んだまでの夢
砂糖壺の中でミイラになった蟻
松江市　恒松叮紅

男失格旅のみやげをつい忘れ
方向音痴の夫と余生の周遊券
聞く方に我慢をしろという音痴
篤農の家紋がなげく嫁不足
先輩が男やもめでいて困る
松江市　舟木与根一

胃を切ってからは清濁あわせ飲む
不平みな一円玉がひき受ける
戦略の小道具に白旗も入れ
一泊で宴会を研修して帰り
黙とうをすれば広がる夏の雲
和歌山市　若宮武雄

地獄絵をケラケラ笑う鬼がいて
おにぎりと次元が違う握り飯
親弟妻を弔う生き残り
老い独り開きなおって生きるだけ
一坪農園の一人に余る茄子胡瓜
和歌山市　堀端三男

伏線に妻の言うこと聞いておく
酒肴の出る席へ代理を頼まれる

低姿勢に徹した母が強かった
何に不足かだまって飯を食っている
吉日を選んで子猫捨てにゆく
和歌山市　松原寿子

愛しきり胸に天使の笛が鳴る
距離あるひとたしかに側にいる鼓動
日記帳きのうがすでに消えている
誘い水へ炎が揺れる夏の章
指切りに落ちた言葉が胸を越す
和歌山市　桜井千秀

故あって温めている無精卵
全身のよろこび涙又涙
杯の話に落ちがまだつかぬ
のた打った弾みの傷が深すぎた
子離れを済ませて犬とたわむれる
和歌山市　福井桂香

つむじ風愛を償う旅に出る
旅先の美女とカメラに納まれり
降りるまでロングヘヤーはよく喋り
ビールにも主義主張ありドライ生
ハイハイハイよろしおますと日本人
和歌山市　木本朱夏

もう帰りなはれとお茶がいれかわる
満足にカレーひとつが煮えてこず
どうにでもしてよと絡むジンフィーズ
火種もつ女と指きりしてしまう
自分から約束したことお忘れか
岸和田市　福浦勝晴

うたた寝の素足に秋が忍び寄る
そっくりに撮れた自分が気に召さず
パチンコ屋繁盛戦争風化する
ワープロで一文乱打仕る
久闊を叙す一パイで絡みかけ
岸和田市　島崎冨志子

何言われても心がなごむ孫の口
久しぶりミシンがはずむ孫の服
老いて行く瞳へ手芸の手がいそぐ
電話一つで心のウサが飛ぶ六十路
晩酌の相手の妻が腕をあげ
岸和田市　原さよ子

おもらしへママは泣きたい梅雨になる
立ち読みのお客が増えた俄雨
高くてもやっぱり信用出来る店
嫁ぐ娘の荷物へ入れる母の趣味
ママごとのママも支払う消費税
大阪市　河井庸佑

流行と不易しっかり見極める
肩の荷を下ろして体重増えてくる
考えた一手にしては粗末過ぎ
入力のミスコンピューターの知らぬこと
週休二日暮しのリズム整える
大阪市　本間満津子

私の中にいろんな虫が居て困る
喜ばすこともあるのに怖い金
この嵐乗りきれ愛する日本丸
空青く花紅くあれ太郎の絵
会いたかった風と風鈴よくしゃべり

大阪市　神夏磯典子

雑巾と問答してる梅雨晴れ間
テレビ番組詳しくなって友も老け
砂浜で昔の夢を拾ってる
気がつけば引き返せない位置にいる
神経を逆撫でしてる賞め言葉

大阪市　北勝美

付き添いが病人さんと間違われ
飽食の世に生きお粥を食べている
鋳物場を思えば何んでもない暑さ
月下美人短い命を夜に咲き
ものとして顎でかぞえるバスツアー

大阪市　藤田頂留子

夢二宅それから御座船レトロ旅
灘らしく酒の名つづくバスの窓
おしゃべりも農協さんが群を抜き
神輿かく一人に亡兄をだぶらせる
もの言えば反対代策案もなく

竹原市　森井菁居

天平の言葉は知らぬ鳥居の朱
大阪で広島弁が狭く住み
シナリオの誤植少年Aとなる
セールスにジャンプしかない棒グラフ
共稼ぎ電子レンジの味に慣れ

竹原市　岩本笑子

僕と歩くと少女に還りたい妻で
みんな幸福で靴が一つ無い
朝一匹夕方一匹金魚の死
砂時計のように夏休み終る
何でも屋ですわと妻の反抗期

竹原市　石原淑子

丸木橋ばかり歩いた僕の靴
憂さばらしているだけの詩吟です
子の巣立ちかごめの鬼は独りぼち
太陽の好きな女でらしくない
ひまわりの正論少し重すぎる

鳥取市　両川洋々

墓穴まで掘る株券と知らなんだ
旗色は読めた欠席いたします
ヒロシマの怨みも知らずハトが翔ぶ
俺の首締める踏み絵が待っている
淡白な方だが子供だけは産み

鳥取県　松下たつみ

ふる里の道で拾った種あかし
ちびた靴にいい話など聞かれない
出る杭の方へ曲った豆のつる
鏡から貰う助言がきつすぎる

くやしさを忘れたわけでない握手　鳥取県　土橋　螢

昨日より元気になるというくすり
たたかいすんで目薬とサロンパス
母という夏帯固くしめている
水着きて少女おんなへ脱皮する
すこうし痩せたいという恋煩い　鳥取県　羽津川　公乃

定年の悩みは知らぬ土の汗
良薬が口に甘くて頼りない
ティーパック振れば妥協の色に澄み
ほのぼのと妊婦幸せ色を着て
ライバルに年の差ほどは負けておく　唐津市　久保　正敏

緊急動議都庁に殖やす女子トイレ
会者定離きみ知るまではただの文字
ママの客ママの操を守り抜く
倖せな余生と思い上を見ず
ほくそ笑む蟻など居ない炎天下　唐津市　浜本　義美

選ばれてからは聞こえぬ庶民の声
陶工の厳し眼が壺を割る
手をつなぐことを覚えた園児たち
天気屋の父で右向き左向く
盆有情無縁仏に灯が点る　唐津市　浜本　ちよ

一生の不作夫婦でそう思い
愛憎の絆の哀し母子草
母として妻として常時ねじを巻く
鉄線の紫に叱咤されて朝
卑祢呼言う墓などあばいて欲しくない　寝屋川市　柴田　英壬子

政界の猛者うろたえている舌禍
ブラウスの汗巴里祭がふとよぎる
プラタナスお前は夢を知っている
ひとつひとつ恋の仕草は美術です
桔梗すすきコスモスぼんやりと出来ぬ　寝屋川市　江口　度

句会から帰る明日の靴みがく
この指とまれ残業のパン配る
妻から電話やさしい方の声で受け
炒り子干す浜に下見の安全靴
リハーサル高速沿いに飛ぶ燕　寝屋川市　稲葉　冬葉

嫁姑休戦にする旅プラン
九宮鳥に入歯と知られないように
想い出がある紫陽花寺の細い道
肩書きの手前死角でものを言う
兵長の話はしない亡父の墓　寝屋川市　平松　かすみ

親指の疲れを知っている軍手
マイカーで四国の地図を二つ割り

目を回しながら下りて行く与島
かずら橋岩はみごとなポーズなり
桂浜竜馬の視野にふたり連れ
高石市　浅野房子

ステンドグラスお伽話のまま終る
男にはどこかけだるい夢二の絵
我武者羅に進んだ道は行き止り
あちこちに不義理重ねて丈夫です
初恋とプラネタリウム消えました
姫路市　人見翠記

花菖蒲神采奕々の艶姿
雨もよし心洗われ詩情湧く
悲しい酒呑んで命縮めたり
ワイン風呂クレオパトラの夢を見る
初恋の味そのままのレモン風呂
箕面市　坪田紅葉

遠い日のモンペ姿の母の顔
ころころと変る心の毬をつく
思い出のつまった箱を開けようか
青い鳥つかまらぬまま古稀の秋
通院に明け暮れ今日の日本橋
大和高田市　岸本豊平次

紫陽花も石仏も濡れ岩船寺
他愛ない話で茶の間円く更け
旅行にも確かめて持つ保険証
気の付くこと多くなったも歳の所為
金髪の下から日本の色で伸び
宝塚市　丸山よし津

ポイ捨ての掃除を終えた朝の空
盆休み父子の酒がよく話す
長男はケチンボでよし三代目
喪の家の裏履物の乱れよう
使い捨て納得出来ぬ老母の部屋
高槻市　川島諷云児

階段でつくづく老いたなと思う
生き方の甘さ鏡に笑われる
倖せすぎて少し冒険したくなる
肩書を捨てると丸い字が書ける
逆境に耐えた自信が邪魔をする
高槻市　河瀬芳子

「笑顔良し」と言われて面が外せない
自画像の帽子がすこしずり落ちる
消して書いて生きると言うはそんなこと
とても高く仏飯を盛る淋しいから
いつも私の前に置かれている踏み絵
羽曳野市　佐野白水

急ぎ去る昭和ひばりと松緑と
昭和天皇へ柔弁慶見せに逝き
信心は老いに重荷の男坂
墓地を買う相談兄弟共に老い
東北訛と大阪弁の長話
羽曳野市　田中隆二

町内も虚礼廃止へ動き出し
祝杯を上げて二次会三次会
地上げ屋にうろちょろされて落着かず
旅に出て殊更思う亡父のこと
うれしさは妻と味わう蕗の薹（小出智子句集発刊）

羽曳野市　吉川寿美

手のうちを見せてはならぬヤジロベエー
アルミ貨の多弁に馴れてゆく恐さ
開き直りという切り札を持っている
つれもて行こら自分の彩が消えている
曲り角まがり切れないシャボン玉

岡山県　矢内寿恵子

百罪を背負うて配る納め札
その先は言わずたたんでおく情
来世で待たせる人の増えて梅雨
祈らばやこの幸せが怖くなる
許されて許して父母の道たどる

岡山県　山本玉恵

青春の夢を咲かせる土ならし
背伸びした悔いがくい込む背もたれに
B面はひとり芝居のシナリオよ
間違えた仮面の裏の薄笑い
覗かれて居るとも知らず深い井戸

土佐市　中内朱坊

生きざまが父に似てきた赤頭巾
年齢の差まざまざと歩道橋
毎日となる休肝日医者通い
シャットアウトされて燕に軒がない
欲捨てぬ欲が長寿の秘訣とか

神戸市　山口美穂

もう少しゆとりがほしいと織女星
宮仕え心の窓は半開き
ウインドウに写った顔が疲れてる
九官鳥にわたしの癖を知らされる
おいしいものありすぎ苦労のダイエット

富山市　舟渡杏花

ワンテンポ遅れた実りいとおしむ
目の黒いうちにと思うことばかり
一列に並ぶと光ってくる個性
きき逃して下さいわたしの世迷いごと
ぶらさがるへちまに抱負ききたいね

西宮市　奥田みつ子

ハイレグの水着人目も陽も弾く
庶民的になったとメロンひとり言
政治家のポーカーフェイス埒もなし
回覧板ついでに株の話など
姉の恋無口な父の慌てよう

河内長野市　井上喜酔

考えず嘘が出てくる常習犯
熟年の恋はあの世へ取って置く

パチンコも勝つと付いてる消費税
高なりを押え魚信の糸たぐる
溺れると目先が狂う血のめぐり

松原市　小池　しげお

好きですと喉まできてるのどぼとけ
独身へ捨て猫ついてきて困り
その日にはお寺も美空ひばり聞き
嘘ついたテレホンカード持ち続け
兄ちゃんが助平らしいさくらんぼ

出雲市　吉岡　きみえ

おしゃべりのおたまじゃくしに足が出た
バス停に泣いておんなが急いでる
三年目区切りをつける青い空
天狗にはなれても大物にはなれず
ぬり絵してあなたの愛に溺れよう

静岡市　薗田　獏　沓

ぼろ切れのように轢かれた迷い猫
欠点を庇いきれない男です
かたつむりの銀路は尾行されやすい
三そくの揃った嫁で肩が凝る
スピーカーのご当地ソングで土産買う

有田市　松井　かなめ

腹が大きくなるから土用に式あげる
新ニュースたんまり美容院で仕入れて来
体調を教えてくれるコンパクト
制服を脱げば中二はもう女
見舞客挨拶ぬきの手を握り

松江市　柳楽　鶴丸

煙草を喫って肉体改造しています
地球が亡んでも俺は生きてやる
リゾートリフレッシュ日本語を使いなはれ
ドライフラワー三面鏡をのぞき込む

大田市　藤田　軒太楼

メモとってど忘れしてる呆けの徴
気にそわぬ指示は仮病でうまく逃げ
義理のあるお方じゃここは負けておこ
実年の酔えば酒量に幅が出来

七尾市　松高　秀峰

本当に顔まで似て来る老夫婦
ライバルに抜きつ抜かれつ棒グラフ
柔らかい婦警に犯人語り出す
競い合う明暗分けた社の人事

岸和田市　植山　武助

母の日に思う病弱だった僕
医者の一言病状が好転す
ストレスを飛ばすにがーいコーヒ飲む
孫が居て子が居て妻がいてピンク

岸和田市　清野　こう

年毎に心のふるさと失われ
初恋の今は亡き人さくらんぼ

お薬は忘れず飲んでいる余生
顔色をほめてはげます見舞客

町田市　竹内紫錆

髭の投手は勝ったら笑う
香車の注射じわじわと利く
戦記見ぬ人がとどめを刺すと言う
忘れ得ぬ騎馬戦スロービデオめく

玉野市　小谷仙山

万歩計緑の風に歩がはずみ
まわり道しようか明日がこわいから
理屈ではどうあれ浜昼顔の花が好き
貌一つ二つ三つ四つ蛙の子

守口市　羽原静歩

宰相も男お色気ダントツに
新聞の隅から隅まで下剋上
神様の三面鏡もバラ色に
生かされて真実一路の旅をする

島根県　松本文子

嘘混ぜて美味しい団子出来あがり
これしきに負けては居れぬ墓洗う
自己嫌悪だけが残って陽が暮れる
疑問符を辿れば悔いに突き当り

出雲市　園山多賀子

枇杷熟れて曽孫授かる岩田帯
伸び切った輪ゴム自分をはめて見る
甘い水欲しがる蛍と女たち
沙羅双樹咲いて身近な事故死の訃

出雲市　河原恵美子

どの花も想うことありくるい咲き
今ならばラスト・シーンにまに合うよ
青々ととなりの垣根肩を張る
子犬です息子のような名前つけ

唐津市　田口虹汀

未練とは酷い言葉よ鏡拭く
我を折れば視野は広がる日本海
怖い程似てる吾が子の爪までも
瓜の蔓に茄子が生れた日の悪夢

唐津市　仁部四郎

ジキル氏もハイド氏もいる通夜の席
日本に生まれてあまい四季の雨
家系図が気になる父の三回忌
校長が六法全書に朱を入れる

唐津市　山口高明

甘言に釣られて高い痩せ薬
会長の厄日この席無礼講
人情の下町十歩あるかせず
雷鳴の所為にしている仲のよさ

唐津市　筒井朴竜

輸入牛へ勝負和牛で村起し
後継ぎの仔牛がはずむ草千里

露含む朝草の荷駄山を下り
牛の綱片手に拝む辻地蔵

和歌山市　牛尾緑良

真夜中の電話淋しい人がいる
良心が捨てたと思いたい大金
ひばり逝く今戦後史を掘りおこす
子の汗も足して家計簿ゼロにする

和歌山市　内芝登志代

父さんのような夫を探してる
「おはよう」と弾んだ声が今日のバネ
逆転打くしゃくしゃ顔でホームイン
大根もトマトも強い自己主張

和歌山市　神平狂虎

運命論鱗の落ちる音がする
星が迎えに来るまで笛を吹いている
星に掌を合わせてしまうはぐれ鳩
話し残したことが夜露になっていた

和歌山市　後藤正子

花莫座の遠い身の上ばなしかな
模様ガラスを信じて痛みなどないか
夏帽子を海に届けてから眠る
ときどきは本を開いて恥じている

和歌山市　山川克子

どの道が正解なんてことはない
一日に一つ良い事悪い事

わたくしの中の私は八時間
足音に耳を澄ましている隣

和歌山県　寺田裕美

向日葵のどれもわたしに笑いかけ
わけあって背中合せに酒を注ぐ
鍵かけてそれから女ワッと泣き
ちょっかいを出したい爪を研いでいる

和歌山市　青枝鉄治

問診へ嫁のグチまで並べたて
子に託す夢だんだんと先細る
ロボットがそのうち顎で使うだろ
御詠歌の音痴へ額の父苦笑

和歌山市　山田高夫

痩せた土美田に還す回り道
共にする苦楽絆にして夫婦
旅に来てまでも揉めてる愚夫愚妻
価値観の誤差が友情遠くする

倉吉市　渡辺菩句

万病に効きもせぬのに薬指
猫の手も借りたいそこへ猫帰る
蟻なら石にのぼる人なら石を踏む
横顔に惚れたといえばおかしいか

倉吉市　野中御前

思うことばかりが積もる木の芽和え
挿木して梅雨よしばらくいておくれ

幕切れが近づく予感焦りだす
ワープロに指の焦りを笑われる
大阪市　黒田真砂

自分史を塗り変えている余命表
楢山へ続くはるかな道がこみ
腕枕素直にとけて行く心
形見の結城が似合う年になり
大阪市　吐田公一

化粧落して今日一日の顔を顧る
父の汗流すビールを注いでくれ
美しい足跡残す靴を選る
雑巾を仰山干して母達者
大阪市　町田達子

昼の客レモンの香り置いて去に
おつまみの干物に海鳴り聞えそう
ダリの絵にヒットラーの謎と永遠の謎
易の灯に手を貸している晩年運
大阪市　板東倫子

いじめといて何を今更栄誉賞
社会党アンチ自民ほ票が寄る
かけそばの話素直に聞かぬ耳
稀少価値ガキ大将の次男坊
大阪市　井上白峰

どん底のくらし支える妻の笑み
それなりの倖せ毎日飯を炊く
女偏追えば嫌につき当る
自叙伝にクレーム付ける影法師
大阪市　寺井東雲

旅行よりやさしい言葉母は好き
座る時ミニスカートを伸ばしてる
半分のビールで天地入れ替り
有名になって名刺はもってない
大阪市　西森花村

生きてないダイヤ人よりよく光り
気が強くなけりゃ神様寝付かれず
金と空気　金も空気のように無し
神様も嘘の涙でないと知る
岡山県　小林妻子

停年だ時計よゆっくり回ろうよ
留守番は老母と仏がしてくれる
落ちぶれているから今日も清々し
文衛句碑訪う
白百合の香に誘われて来てしまう
岡山県　荻野鮫虎狼

雨宿りしたい所に縄のれん
長男の嫁父の日を忘れない
六十五保険屋からも見放され
嫁さんが信用される隣組
岡山県　二宗吟平

針の穴やっと見つけた空の青

針箱の中にあるある糸通し
独り居の友病院で酸素吸う
温泉の町の句会へ友を連れ

姫路市　大原葉香

頬杖をつけば思案が間のびする
小刀で削った鉛筆字がぬくい
里の川もう桃などは流れ来ぬ
まるい地球に東西南北ある不思議

姫路市　丁坪サワ子

ウーマンリブの兆しがみえた選挙戦
兄危篤集えば誰も半病人
嫉妬かな吉永小百合を好きと彼
女の歴史変り未婚の男達

姫路市　中塚遊峰

慌てない楢山の灯が見えかくれ
流れ星願い中途のまま消える
繕えぬ傷口胸の奥にあり
新嫁を褒める言葉を撰って居る

米子市　光井玲子

葛藤を逃げようとして鍋みがく
砂時計わたしの愚痴を聞き飽きる
酔い覚めの水で話がうら返る
久しぶりの孫少年の顔となる

米子市　茂理高代

日曜になると逢いたい道祖神
故郷の土は跣で歩かれる
影一つ落して海と語り合う
いい友が居て良い話聞きにゆく

鳥取県　土橋はるお

妻に百点つけて貰った事がない
定年を楽しむ柄でありません
ライバルの掘った墓穴より深い
パトカーを洗うバイトの口もある

鳥取県　谷口次男

近づくと蹴り落そうとする上司
近道をしたばっかりに躓いた
見栄という異物を一つ剝いでみる
大臣もしれたもんだねポチ公よ

鳥取県　乾喜与志

わずか二十日の兵でソ連の収容所
八十歳すぎて捕虜だったと言える
遍路笠梅雨の菅がさ夏日がさ
バラ色の老後の花に棘はない

鳥取県　田村きみ子

卒論に少うしけじめ書き添える
もぎたての無花果白い皿が好き
休日はともかく蒲団干して置く
やりくりをしてる姑です達者です

岸和田市　古野ひで

美しい人情を背に島を発つ（隠岐の島）

嫁姑離れて住んで案じあい
他人様は苦労したねと言うけれど
梅雨晴間大洗濯に気も晴れる
岸和田市　芳地狸村

好きなだけ食べてよく寝る粗大ゴミ
通夜の席意外と思う人が来る
のびのびと子供が描く父の顔
母の背でおぼえた唄は忘れない
富田林市　松本今日子

一呼吸置くと丸うなる返事
町内の噂の種はみな美人
偽りの虹を見ていた汚職劇
挨拶をするので料理手につかず
富田林市　片岡智恵子

心には痛い明るさ千羽鶴
草の露みどりの深さ増して落ち
気に入りの花で蝶々の昼休み
いいことが有りそう星の露もらう
和泉市　西岡洛酔

実行力期待外れの雨続き
一筋の涙宝石よりいとし
小指の話甘い男の顔が寄り
漢薬に頼る若さを大事がる
静岡市　渥美弧秀

初なりの胡瓜竹馬の友と酌む
サンマ焼く夫を残してクラス会
心電図正常らしい医師の顔
腕相撲孫もいつしか侮れず
羽曳野市　榎本吐来

煽てとはわかっているが茶がうまい
再職の指そろばんが生きてくる
自慢ばなし巧い男と飲んでいる
お隣の銀婚を知る旅土産
呉市　槇田英詩

太陽も夕暮れ時はやさしいね
紫色はどんな匂いがするのかな
完全犯罪がとっても涼しい顔してる
ライバルの胸毛に彼女惹かれたか
岡山県　直原七面山

一応は男の顔を立ててくれ
盾となる妻に心で手を合わせ
襟足を見詰めて美人の後を追い
素っ裸になって過去を語り合い
十和田市　斉藤劦

叱られてありがとう言う子の育ち
正直に話してごらんかたつむり
父さんが居ない田んぼに誰がした
窮屈な話はよそう鉄線花
弘前市　眞喜内實

深呼吸始めと野良の路の風

椎茸の仔のわがままを育ててる
あわてないママ　スマートになれませぬ
新緑のおいしい水にまた太り

黒石市　相馬一花

母子家庭夜半に脱いだ網タイツ
オッパイが無くてもわたし女です
鯉のぼり忘れられても泳ぐ空
茶華道を極めて家で胡座かき

八尾市　山下美津留

ハワイの旅

砂糖キビ運んだ汽車で旅をする
農協の招待旅行カメラさげ
買え買えと買物ツアー続く日々
買物へスーパーマンになった妻

藤井寺市　福元みのる

教室の椅子空いている好きな人
暇潰しするにもお金要るばかり
忙しい人程暇をよく見付け
改革もけじめも泡の如く消え

神戸市　仲どんたく

不器用な男を定年おびやかし
連休が世界の天気図をさぐる
生活の音が変って梅雨明ける
幽冥の幕六方を踏んで入り（松緑逝く）

茨木市　井上森生

歌声は今天国に揚ひばり
宵々も宵々も古都の夏
切り口で種子無し西瓜の身の証し
足のウラ価千金ツボの地図

和泉市　岡井やすお

憲法も顔を出せない泣きどころ
勝てば出る負ければ逃げる仕掛人
交渉は一、二度蹴って出方見る
砂の山崩し築いてゆく文化

東大阪市　崎山美子

末席のひとりがじっと反旗持つ
老母ひとり残せず故郷も捨てられず
久々の和服女の顔となる
土壇場で母の涙にすくわれる

吹田市　茂見よ志子

言い聞かす自分に謀反したくなり
意地張って得することは無いと知る
デパートで夫の速足気に入らぬ
がん検診誘い合わせてお尻あげ

高知市　北川竹萌

鈴蘭のガイド目をやるドドの島
父の日に涼風を吸うシャツ届く
村おこしあちこち流行るフェスティバル
旬の味漬け方聞いてくる電話

箕面市　椎江清芳

冷房を知らぬ五尺の藁布団（召集入隊時）
傾いたままで沈まぬ夫婦船
気取ってる紳士花屋で花を買う
魚屋の篭に馴染んだはだか銭

奈良市　米田恭昌

終電の椅子に無言の戦士たち
義理堅いほどにおいしい鬼おこぜ
五時からの余暇の利用が差をつける
天才も人の子悲しい酒を酌む

寝屋川市　堀江光子

気がかりのこと片付いた日の枕
清貧の誰憚からぬ籐枕
三日月の眉も涼しく陶枕
杯に三味は遠音の旅の宿

静岡市　安本晃授

臍繰りはせめて老後の妻の武器
面影を追えば悲しい風に遇う
標札の亡夫が護る寡婦の家
良心に恥じて渡れぬ橋ひとつ

広島県　藤解静風

眼鏡の総理金魚に似てるなと思う
猫嫌いの猫に見られていた野心
いくじなしマダムの背の果し状
ひとり酌む酒は演歌がよく似合う

高槻市　竹内花代子

ケーブルは雨仏舎利かすむ円教寺
一乗寺百六十段の良い眺め
沢庵にこだわる友の旅土産
ワンテンポ置いた返事の物想い

堺市　柿花紀美女

人生のけじめまだまだ付けられず
難民を思えば平成有難し
二十一世紀見たくて励む万歩計
梅雨時雨今日のリズムで米を研ぐ

寝屋川市　宮尾あいき

試歩の空からすの声もなつかしい
待ち呆けからすが三度も来て笑う
この顔で初恋なんててれくさい

加賀市　細呂木魯木

妻の留守思いきり煙草吸ってみる
お墓があるから故郷を意識する
古い傷不倫ちらちら話題にし

諫早市　原田メイシュン

正論を吐けば右翼かと人は言う
消費税今に見ておれ投票日
山頂で税のかからぬ空気吸う

岡山市　井上柳五郎

脳裏へのふるさと昔まんま在り
磨くには勲八等はもう風化
晴れ舞台あれだけだった老いは抱き

出勤簿に判綺麗に捺して今日も生き　岡山県　岩道博友

林道の立派な舗装に迷わされ
消費税付いてる土を捨てて来る　岡山県　千原理瑛

明日葉に命乞いするトンボの目
此の度は相手不足にて候
友達を自慢するのは聞きやすい　大阪府　坂口公子

結局は夏は冬はの嫌談義
百までは三十年もといきまいて
山淑の葉たべてお洒落な蝶の虫　大阪市　渡部さと美

心配のたねは子を持つ宝かも
風すずし月も見上げる人を待つ
商魂に主婦も免疫出来ました　大阪市　塩田新一郎

日記帳自分を許す重い夜
中佐でした老僧静かに語りだす
新首相株が女に入れ替り　大阪市　中西兼治郎

戦場を駈けた我が足じっと見る
円をかきトンビは生きる食探し
今の子は蛇の目のお迎えなど知らず　大阪市　北山悟郎

民主化の旗が日の丸踏み超える
責める妻僕の盾では防げない
大正は息抜くとこを知らず生き　大阪市　横山為子

初恋は私一人のためにある
朝顔の挨拶垣根をこえている
無理なこと一歩手前でひく勇気　大阪市　山田妙子

免許証オバタリアンで取って来る
免許証通行手形でないそうな
健康を見直しながら喪服着る　鳥取県　清水一保

しっかりと踏んで歩こう俺の道
人間のいじめに蛍の小さな灯
指切りを太陽として明日を待つ　倉吉市　淡路ゆり子

脱皮する子に手助けもしてやれず
幸せならば過去のことなど話すまい
朝寝坊今日も一日自己嫌悪　鳥取県　さえきやえ

子の本音おふろの中で聞いてやる
あご竹輪の穴から遠い故郷をみる
老いてまだ楽しくはずむペンがある　鳥取県　津村八重子

あだ花は咲かせませんと茄子の意地

陰ひなたない娘良縁ふってくる
デートする髪はなでたりさすったり　鳥取県　小谷　美っ千

生かされている倖せの窓を開け
髪すこし切って薄暑の身づくろい
家族みな元気うれしい朝がくる　出雲市　久谷　まこと

大輪の花それなりの吐息つく
毒舌は自分の心語ってる
愚痴だからいつか本心話すだろ　出雲市　小玉　満江

あつくるし向いのやんちゃが泣き止まぬ
定退で家に居るから来いと言う
賞品のガラスの皿に夏を盛る　出雲市　小白金　房子

そわそわと三時のあなた待つコーヒ
ここまでの話花咲く雨の午後
手ばなした仔牛の温み手に残る　島根県　石田　清泉

一杯を制御するのも妻の愛
連れ添うて歩く勇気も老境か
たまに見る牛の子にまで嫌われる　島根県　藤原　鈴江

出合いとは別れるための序曲かも
幸せに条件がある夏の海

女かな水の重さと炎の重さ　島根県　松本　はるみ

東洋の片隅に在り秋ざくら
反省を促すような硬い椅子
聞かせたい聞かせたくない独り言　島根県　北川　民子

もめごとは猫にとられた金魚鉢
雨となり暑中休暇の母の位置
夏帽へVサインを見せる母　島根県　小田川　智重子

土井さんの顔が女に戻ったね
せっかちな電話の向うのあなたさま
体調が良いので検診受けに行く　米子市　金山　夕子

音楽がとぎれた部屋がなまぬるい
縁から素通りできぬ寺の門
適量の酒は薬と飲んでいる　米子市　小村　てい子

菜の花やこざっぱりした旅支度
愛の位置白髪一本ずつふえる
もうすでに絆は解けている呪文　米子市　木村　富美子

海までの旅をメダカが試みる
初恋は少年のまま星になる
顔幾つ今日は笑った顔にする

消費税ちりも積もれば山となる　大東市　土岐トク子
コスモスの苗くれ親しくなった老人（ひと）
隣組台湾旅行に花が咲き　貝塚市　行天千代

茄子きゅうり思い思いのなりかたち
梅雨冷えに大きい座布団出して来る
水のように時は流れる戻れない　福岡県　横地正好

焦らつけば別の私に叱られる
汗売った身が労りの汗を買い
海に来て海に背を向け酒の席　豊中市　上田登志実

自らの愚かさ知ってから気楽
君子蘭名にふさわしい鉢にする
お品がき見て結局はそばにする　境港市　細木歳栄

どのあたり君行き給うや雲の峰
不快指数80内職の手がにぶる
台風が何だと蓑虫ぶらさがり　竹原市　信本博子

冒険を求めて蟻が木に登る
すれ違ういきな女のパナマ帽
陽に風にとっても素直な瀬戸の海　倉敷市　田辺灸六

世の中の不満に尖るバラの棘
温度差を部屋に持ち込む見舞客
仲裁に入る隙間のない持論　東京都　吉川一郎

切り札にホットな秘密隠しとく
市場籠ノーネクタイのぬれ落葉
終電に滑り込んでる帰巣性　和歌山市　田中輝子

少女から抜けだせないでいるリボン
追い追いに判ると恐い事を言う
穴掘ったのも僕落ちるのもたぶん僕　守口市　森川まさお

盛り場の好きな老人にも困り
旧線路玉葱いやなほど穫れる
時の日に長い昼寝をしてしまい　富田林市　新開千代女

長い髪みどりの風がたわむれる
虹の橋渡りたいけどつれがない
デパートの中元売場二周する　広島県　田村新造

応援に行ってシャモジを叩かされ
朱の袴はき馴れ巫女の顔となり
億ションのモデルルームで出る吐息　西宮市　瀬尾六郎太

あれも駄目これも駄目よと駄目育ち
孔孟子三国志悲嘆天安門
笑顔もて人にも幸せふりまこう

旅なれぬ女支度へ三が日
赴任地へ土曜夫人の足軽く
挨拶も拝み拝まれ僧と僧

奈良県　宮川古都路

らっきょうの好きな自分がうとましい
渡されたバトン見事に落とす朝
美容院変えても同じシルエット

吹田市　栗谷春子

川一つ越えたら欲がとまらない
弱いからお金にたよる独り者
幸せの過ぎないように娘を育て

河内長野市　植村喜代

奔放に生きたし時計まず捨てる
途中から補聴器外す父の拒否
ライバルに素足を見せている妥協

海南市　三宅保州

見学はビール会社にすぐ決まり
大阪弁の小説声出して読み
ロボットになりたし迷い多い日に

茨木市　堀良江

浅知恵で渡りつついる丸木橋
唐きびをふる里という孫といる
私の欠点孫はよく真似る

米子市　白根ふみ

僻地とも知らず赴任の握手攻め

豊中市　一瀬福一

着ぶくれて気がねのいらぬ我が余生
初でんわ兄出て父出てやっと母

出雲市　石倉芙佐子

風ひそと身の上話がしたくなる
その日から化粧の好きな私にし
秋風よ心変りをするでない

豊中市　辻川慶子

紫陽花の私語を聞いてるかたつむり
筋書きになかったはずの離婚劇
昨日今日そして明日へとある喜劇

静岡市　永倉僕川

入院の噂おんなは姦しい
偶然がまためぐり逢う京の旅

大阪市　宮下とし

朝顔は隣が好きで困ります
昼酒がこんなにうまい二日制

大阪市　冨岡温子

談合が可も不可もない梅雨模様
付和雷同囲みの中の不用品

大阪市　松永すすむ

花粒が寄り集って葱坊主
すがすがし備後表の足ざわり

岡山県　松本元江

いつからか私を変えていた空気
絵にならぬ空の暗さとひまわりと

自選集

内閣が変わり漫画もまた変わり
税金を払うぶつぶつ言いながら
老春という七十も八十も
生きていてくれたらなァとまだ思い
久々に顎が外れるほど笑い

工藤甲吉

土壇場の折り神様留守だった
モナリザの横顔まではのぞけない
茶柱が立った自信の靴を履く
桃色のうわさは風に乗りたがり
自分では下手と思ってない音痴

小林由多香

お見それをしました名刺戴いて
突っ立ったままでは話通じない
目が合って何時か何処かで合うたひと
倉だけ昔のままの母の里
勿体ないこっちゃ裸で飲むビール

山内静水

腰骨が老化の先陣相つとめ
クラス会またの名放談会とぞ申す
心にもない世辞を言う自己嫌悪
風化した思想を押しつけようとする
回り道夢一つ捨て二つ捨て

本田恵二朗

父の挽歌はめでたい汗に濡れている
旅にいても朝の祈りを忘れない
戎橋もまれるだけのふところ手
ここで逢いここで別れた海の駅
男の子辛抱を眉の中に置く

藤村〆女

澄みきってしまうと水の淋しすぎ
試着室安い背広の方が合い
お見合を相手は幾度もしてるそな
奥様が出て来て話題切りかえる
ボーナスは花火のように消えるもの

有働芳仙

祝栞主幹叙勲記念川柳大会

川柳塔万歳主幹熟し切る
棚ぼたのそのものズバリ社会党
一円と百円時どき間違える
スタイルに自信裸になりたがる
トンネルで相槌ばかり打たされる

月原宵明

栞主幹の叙勲を祝う

菊の紋木杯目出たし輝いて
挨拶も知らぬ平和な子のしつけ
単身赴任あわてる事の多い日々
写楽の絵現世になって見直され
ゆっくりと歩けぬ都会のせわしすぎ

藤井明朗

君偲ぶ淡海節で浜昏れる
黙契を守る大小拘らず
ボケ防止五ヶ条を説く寂しさよ
手足より先に自分が出て困る
金を惜しむか時間惜しいか籐寝椅子

野村太茂津

坂でしぐれて神と相合傘になる
呪文となえて枕やさしくうらがえす
あっさりと枕に寝首預けている
竹林にいつかわたしを捨てにゆく

八木千代

生きのびて襟のよごれを拭いている
幸せな人だと思う豆を煮る
今日の疲れは今日のうちにと犬連れる
こんなとき買物にゆく余裕もつ
他人ばかりの街で大きな月が出る
新聞がはいってない朝落ち着けず

正本水客

手枕の語り尽くせぬ雲に乗り
すれ違い道の遠さのはじまりぬ
トンネルの長さに命あたためる
突き当たるとき奔流を見せてやり
おもしろく行方不明に生きている

水粉千翁

悪人が語れば言い訳めく話
本棚に私の友も積み重ね
駈け抜けて十指の友の無表情
その人のドラマが夢で走り抜け
酒煙草やめて好日かも知れず

児島与呂志

物忘れの一つにチャック締めてない
バランスさえとれたらうまい字に見える
バスを待つ根気敬老乗車証
白になりきれぬ未練が髪にある
もうひ孫でっかと不思議そうに言う

金井文秋

八月はヒロシマのもの原爆忌　大矢十郎

仏にも神にも同じ掌を合わせ

金少し貯まり秘密が増えてくる

七人の敵から学んだ事が生き

親戚の死へ六法を繰らされる

台風の眼玉は小さい曽孫だな　黒川紫香

欠伸するとこを撮られていた不覚

間違えたラジオ体操して終り

四国へ

ユラユラと揺れを感じる船の風呂　小出智子

眼覚むれば塩飽諸島霧の中

わが街を見捨てず蟬が鳴きにくる

とぼけ上手な人と当分旅つづく

肩の凝る本と添寝をしてしまう

富士山はテレビで見せてくれている

夏は暑いものだと臍に言い聞かす　橘高薫風

モナリザも拈華微笑に違いなし

嗚呼藤沢桓夫先生

さわやかやこんなに小さい仏さま

佐渡小木にて

夏空に映りそうなるたらい舟

NHK学園全国川柳大会

日時　平成元年**10月29日**（日）午後1時

会場　銀座ガスホール6階
東京都中央区銀座7－9－15
電話（03）573－1871

宿題（事前投句）と選者
「碑」　礒野いさむ選
「交際」　萩原夏絵選
「信じる」　大森風来子選
「火」　篠崎堅太郎選
「とんとん」　野村圭佑選

席題（当日投句）の選者
堀口北斗選・野谷竹路選

講演　「川柳二百年」　尾藤三柳氏

事前投句締切　**9月30日**（土）

〈参加要領〉

投句先
186－01　東京都国立市富士見台1－36
NHK学園「全国川柳大会事務局」

投句料　2000円（入選作品集代含む）

◇大会へ参加希望の方はご自分の住所氏名の宛先を書いた返信用ハガキを同封して下さい

◇事前投句は、普通の便箋、またはこれと同じ大きさの用紙二枚を、いずれも真中にタテの線を引き、一枚目の右半分に郵便番号、住所氏名（ふりがな）電話番号、NHK学園川柳講座受講者の方は受講番号、大会への出欠を書き、一枚目の左半分に宿題①の作品、二枚目の右半分に宿題②の作品、左半分に宿題③の作品を、それぞれ二句記入して下さい。

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

大矢十郎

消費税慣らされてゆく怖さ

川崎秋女

リクルート問題が泰山鳴動して鼠二匹に終った事への国民の怒りが、一挙に消費税に集中して来た。「そのうち慣れてくるよ」と言った宰相の言葉が思い出される。中七が字足らずだが、下五の〝ゆく怖さ〟が、よく効いている。

大臣をいじめる記事が面白い

高杉鬼遊

マスコミは、スキャンダルを掘り起こすのがうまい。視聴者も、これを楽しみにしている。汚職、人事、資産の公開から桃色話までそんな記事がドラマになって面白い。

二枚目の舌がぼちぼちもつれだし

玉置重人

計画した嘘、その場仕込みの嘘は、一枚目の舌だが、その嘘を肯定する嘘が、二枚目の舌である。剝げかかった嘘への弁明にうろたえている状況を如実に捉えている。

癌が怖くて健康診断には行かぬ

石川侃流洞

一見筋が通ったような、憶病なような句である。誰もが思う事ながら、病人にとって癌への恐怖ほど悪いものはない。まして、癌を通告することは、明らかに死の宣告であり、人道を冒瀆する。しかし、健康時での早期発見がより大切です。一度行ってみませんか。

気晴しにたくさん納めた消費税

本間満津子

主婦の気晴しとは、食べることと、買物のどちらかのようだが。気晴しに思い切り買物をした事には触れず、〝たくさん納めた消費税〟とした所が成功している。

本心を伏せて流れに身をまかす

奥谷弘朗

流れに身をまかすのは、順応性に富む日本人の渡世術であろう。自己主張を伏せて政局に身を委ねている姿が伺える。

嫁不足街はギンギラギャルの群

越村枯梢

農村の過疎化も一段と進み、嫁不足はいよいよ深刻になって来た。女性の地位向上とともに、男を撰る目も厳しくなって来たが、誰か一人ぐらい嫁に来てくれないかなあという切実な思いが哀れである。〝ギンギラギャルの群〟とはユニークな表現であり、心に残るものがある。

好い噂ばかりが走る好い仲間

津守柳伸

趣味を同じくする仲間同士は、一つの宗教を信仰する者同士のような堅いつながりを持つものである。仲間同士は、尊敬こそすれ、非難される事などありえない善人の集いであろう。微笑ましく心温まる句だ。

一人では淋しすぎます遠花火

赤川菊野

歓声と拍手を間近に聞く花火見物は、やはり楽しいものだった。まして、家族総出で夜店のかき氷など食べながらの見物は、また格別であった。しかし、時の流れは無情である。気がつけば、たった一人で見ている遠花火への境遇の淋しさが思いやられる。来年は、気の合うた方と是非ご一緒に…。

あきらめた出世有休フル使用

浜本ちよ

会社人間を自負する男にも、四十過ぎれば将来がはっきり見えてくるものである。たとえ出世コースから見放されても、あきらめず腐らず前進すれば、またそこには新しい道がある。本来、有給休暇は、有意義に利用することが望ましい。

水飲んでひろしまの日に水を知る

越智一水

ドブ水を貪るように飲んで息絶えていった人たち。今ここに冷たい水を飲んで、あの日の広島を思う時、感無量のものがあろう。

川柳太平記（136）

川柳の群像

森田茗人

東野大八

「わたしは大正三年六月二十四日にこの倉吉のこの寺（誓願寺）の山門のすぐ前のわら屋根の家に生れました。兄を三ヵ月ぐらいで失い、その翌年に女の子が生れましたが、百ヵ日ぐらいで亡くなり、そのあとわたしが生れました。

そこで産婆さんが、ここの昔のならわしにしたがい、この子を末長く成長するようにとその母が産褥にあり知らないうちに、ひよひよのわたしを抱っこしまして赤い紐のついた菅笠の上に乗せ、ここの山門前に捨てたそうです。お寺とは相談なしの捨て子なのですが、晩方の六時半頃のことで

『おっさま、寺の門前に赤子が捨て子してあるけ、早よ出てきなんせ』

と声をかけたそうです。そこで今の和尚さんのおじいさんが、早速にわたしを拾って寺へ入れ、お経を唱えて拝んでくれました。この子は阿弥陀様の子で末長く成長するようにと祈念して貰いました。和尚さんは加賀常源といわれる方で、そのお名前の源を頂き、わたしの本名の源之助、つまり森田源之助が誕生したわけであります」

この挨拶は昭和43年11月23日、鳥取県倉吉市誓願寺境内に建立された森田茗人句碑建立記念大会の会場のこの寺における、当の茗人のあいさつの一コマである。句碑の句は

凧のいとのばしてかぜにさからわず　茗人

というのである。この建立記念大会には、遠く九州から茗人が満鮮時代からの川柳の恩師大嶋濤明が馳せつけて祝辞を述べ、在鮮時代の同志橋本言也、寺田五柳子らが関西から参加している。

茗人と濤明との出会いは、昭和4年、茗人が中学3年の秋、修学旅行で大連へ行った折、朝鮮新聞柳壇選者であった濤明の名を記憶していたことから自宅に赴き、それが縁で川柳をはじめることになった。

茗人は大正13年、父の兄の家の養子となり、朝鮮京城（今のソウル）で育ち、京城公立商業を卒業、サラリーマン生活に入り、昭和12年、華子夫人を得て長男尅輔が誕生する。

昭和16年在鮮柳人橋本言也、奥津啓一朗らと朝鮮川柳協会を結成。『川柳朝鮮』発刊。しかし敗戦、引揚者として帰郷。

「築き来し在外資産は瓦礫にて贖罪の形に祖国奪わる—という歌を作りましたのは、私が日本歌人クラブに所属していたからで、この一首はその会報に乗り、かなりの反響を呼びました。錦を着て帰らねばならぬ故郷で、わたしは三年ニコヨンをやりました。句碑になった句は、御批判もありましょうが、人生五十年の坂を越えたわたしという人間の身と心が行きついた心境の句であります」（句碑建立あいさつ）

昭和21年、次男能彦（熊生）誕生。同25年、鳥取県警察本部へ就職。鳥取市へ居住。同29年、河村日満、小林由多香らと「鳥取川柳会」結成。『川柳鳥取』発刊。同30年4月には、「鳥取市火災復興山陰川柳大会」を催し、麻生路郎夫妻も参加している。

この頃、茗人の提唱で大正三年五黄の寅年生れのメンバーを糾合して「寅会」を作っていて、その中に柳友であり同志である河村日満も加わっている。茗人は川柳と別に短歌雑誌『情脈』の同人で、編集にも携っているが、川柳・短歌の文芸ジャンルにどちらにも偏することなく、積極的なその文化振興グループへの貢献ぶりに、鳥取市文化団体協議会の副会長にも推されている。

しかし、なんといっても茗人の本領は、鳥取川柳会結成以来の不屈な川柳作家としての仕事ぶりである。

まず日本海新聞川柳欄の開設を働きかけて選者となったが、昭和33年6月26日の同紙初めての川柳欄への投句者は18人であった。それが五年後には投句者も二百数十人にふえ、「日本海川柳友の会」が生れ、茗人を中心に句会や研究講座がもたれ、昭和50年この会を「うみなり川柳会」と改称し、鳥取県川柳作家協議会の結成にまでこぎつけた。

「川柳の鬼とは、私が茗人君に捧げた尊称である。それほど茗人君の熱意にはすさまじいものがあった。それが日本海新聞の柳壇開設を実現させ、爆発的な動きとなった。世話好きと誰をも魅きつけずにはおかぬ明るい性格が、つぎつぎといいお弟子さんたちを生みつづけた。頼られれば百里の道を遠しとせず出掛けるその指導力に、鳥取県下のあちこちに川柳会を誕生させた。そして、その峰の頂上に立って間もなく急逝である。心残りの多かったであろうことは、その辞世句

まだせねばならぬことあり死をおそれ　茗人

に如実にあらわれている。それほどに川柳を愛し、川柳を追求し、川柳を信仰し続けていた茗人君の句にすぐれたものが多いのは当然であろう」（森田茗人遺句集『凧のいと』序文　河村日満）

茗人は昭和51年8月27日、咽喉ガンのため死去した。享年62。法名浄源院能誉茗人居士。

没後三回忌に森田茗人遺句集『凧のいと』が、うみなり川柳会（小林由多香）や鳥取川柳作家協会（河村日満）など故人を識る多くの人々の手によって刊行された。また、故人の手になるものには『川柳手帖〝うみなり〟』句碑建立記念作品集『いしぶみ』がある。毎年、地元では茗人忌が盛大に今もつづけられている。

昭和47年、第八回大陸川柳人同窓会が鳥取県三朝温泉で開かれた折、その前夜祭で筆者ははじめて茗人と顔を合わせた。話し合っているうち、筆者と彼とははからずも大正3年6月生れと生年が全く同じであったことから大いに意気投合した。

こうしたせいか、茗人は二日間にわたり二百人近い参加者を観光バス二台に乗せ、この人の句碑のある誓願寺から、折から梨の出盛りとあって、二十世紀梨のある梨畑へ、一同を案内して貰った。鳥取は梨の名産地で知られている。木からもぎとったみずみずしい立派な梨を口にして一同、大満足ぶりに世話人の茗人のさもうれしそうな顔は今も忘れられない。そうしてこう語っていたことも、

「私のふるさとは京城です。アカシアの花の咲くポプラの並木道。あの寒い、暑い朝鮮の京城の姿が、いつも私の脳裡から離れません。川柳誌『川柳朝鮮』をみんなで苦労して出した頃が私の青春の花ざかりでした」

声をあげて砂丘にこだまなくさびし　茗人

★次回は「福井天弓」

柳籠裏三篇研究（一丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

柳籠裏（やなぎごり）について

清　博美氏

『柳籠裏』は、天明六年（一七八六）に発行された、江戸麹町高砂連の句集であるが、初篇及び二篇は未だに発見されておらず、三篇が現存しているのみである。また、本書は初代川柳が選句した句集としては、一風変わっていると言わなければならない。この種の組連句集には、通常「川柳評」の文字が示されているのだが、この「柳籠裏」三篇にはそれがなく、初篇及び二篇がどうなっているかも不明である。そういう意味からすると初代川柳が選した句集というには、いささかの疑問も残るが、序文や句会に参加した作家の顔触れなどから類推すると、少なくとも選者川柳の息の掛かった句集であることは、先ず間違いのないところであろう。ということを、掲載させて頂く前に一言申し添えておきたい。

清　博美述

1　江戸おしぞ思ひ三河へ帰る也

佐藤＝松がとれて三河へ帰る万歳。業平の「唐衣きつつ馴れにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」の文句を借用した句案である。業平の歌は、伊勢物語にあり、また、謡曲「八橋」にも出ていて、三河国八橋に来たときの歌であるから、三河万歳の句に借用したものであろう。句意は、「をしぞ」を「惜しぞ」にかけて、名残を惜しんで江戸を発つと、三河万歳の心中を忖度して詠んだものと思われる。

三河からきつつ馴れにし門へ来る　二四11乙

七久保＝賛。礎稿のとおり、かきつばたの文句取り。

万歳や才蔵業平を感じ　一五14

鈴木＝賛。原稿の「旅をしぞ思ふ」は旅をつらく思う意味で、本句は名残惜しく思うと意を転じている。原歌に近い意味の句に、

旅をしぞおもわずくれに立て来る　天五亀1

岡田＝賛。

2　馬鹿な慈悲金を借りては人にかし

佐藤＝慈悲にも程がある。まったく馬鹿げた慈悲だというのであろう。

こっちからかりたいと金出来ぬなり　萩7

貸さぬ奴種々物入りをいひ立てる　一五27

と、いったところが普通であり、あっても貸さぬのが一般であるから、これはたしかに常識では判断できぬ程のお人よしということができようか。

八木＝賛。蛇足ながら困った人に借金を頼まれて、自分も金がないので第三者から金を借りて、その困った人に貸してやった情景。

岩田＝この句、「人から金を借りているのに」といったような意味に解しています。あるいは逆に、人に貸し過ぎて、こちらが反って借金。またはその両者の悪循環状態という事でしょう。慈悲や仁もここまで行くと行き過ぎという句。

紀内＝小生は立替借金と解していましたが。

西原＝小生も前説に賛。「借りては」で、何度もわざわざとの意と受け取れる。

青木＝他人のための身代り借金で、返して貰えなくても、自分の名で借りたものは返さねばならぬ義務がある。それを馬鹿な慈悲だと言ったのでしょう。

鈴木＝小生も八木・青木両説に解していました。要するに礎稿にいうお人よしの人物。

岡田＝この句は深く考えず、礎稿のようにアッサリと考えた方がよからん。

3　めづらしい苗字再三聞き返し

佐藤＝世の中には随分と珍しい苗字があり、一、二度聞いただけでは飲み込めぬものもあるというのであろうか。猿之助の苗字は確か「喜熨斗」といったと思うが、世の中にはもっともっと珍しい苗字や名前があるであろう。

岩田＝賛。聞き取りにくいような耳珍しい苗字ということで、訓み方の珍しさではあるまい。

西原＝賛。岩田説のように耳目ずらしかったのであろう。

鈴木＝礎稿に賛。

岡田＝テレビなどで、選手などの姓になんと読むのか分からぬもの時々あり。

4　孝行に鍬の出たのは一両度

佐藤＝二十四孝の「孟宗の雪中の筍」と「郭巨の黄金の釜」を指していうのであろう。孟宗は雪中に筍を掘り、郭巨は吾が子を埋めようとして土を掘った。何れも掘るのに鍬が要ったわけ。それを詠んだ句と思う。

子を掘ると子を埋めるのを孝へ入れ　二八28

岩田＝賛。「御伽草子」の「二十四孝」の挿絵では鍬を持つものは、孟宗、郭巨、大舜の三人。本句は、孝行のために特に鍬を持ち出したという感が強いので、孟宗と郭巨を思い浮かべればよいのであろう。

西原＝賛。

掘れば竹埋めようとすりゃ釜が出る　二七25

鈴木＝礎稿に賛。両者を詠んだ柳句も多い。大舜の句は後に出ます。

岡田＝礎稿、賛。

川柳塔常任理事会（8月1日）

▽栞主幹から、篤志家の好意により高野山霊園に墓地を得て川柳塔関係物故者の供養塔を建立することが提案され、了承。

▽薫風氏が編集部長を辞任、萬的氏が十月から就任することを決定。

▽「初歩教室」担当を白渓子氏に交代。

▽本社句会の出句を兼・席題ともに各2句、「一路集(課題吟)」は各3句以内に、「初歩教室」も3句以内とすることに決定。

▽事務所にクーラーを設置する。

黒川紫香選

喝采がほしくてピエロまた踊る　名古屋市　藤井高子

持ち駒を読み平成へ長らえる

聞いてやるだけで絆が切れず居る

うかうかと小耳を貸したつけが来る

重装備して祝宴の客で居る　広島市　流奈美子

逆さまに見れば笑えるかも知れぬ

日々多忙ますます肥満しています

逆風の中で鍛えた太い腕

たわむれへ律義すぎるよ茄子の花

美しい台詞は風の置土産　八尾市　高杉千歩

おめでたを指折ってまつ菊日和

半分は心配だからふたり旅

ない袖をふったジパング役にたつ

騙されて道化になった赤とんぼ

泣くだけのおんな返上素手素足　米子市　足立由美子

ねぎらいの言葉を添えて酒をつぐ

少しだけお酒に勇気借りておく

友達のいない小犬の友になり

来年の旅の話も進んでる

思い出は少年少女の顔のまま　藤井寺市　高田美代子

天女ではないが毎日衣干す

押し花にする朝顔を選っている

腹の立つことも忘れた大花火

たぬき囃子はこんな夜かな月冴える

日替りランチで闘って来る戦士たち　出雲市　金村青湖

千羽目の鶴は緑の色で折る

あどけない寝顔だ許す気になろう

無人駅いつか私の席が出来

ハイヒール赤ジュータンの夢を見る
決心がついたら凧の糸を切る

富田林市　池森子

初恋の疼きガラスの箱で妊りぬ
冬景色いくつ重ねてもおんな
怨んだら私の罪が深くなる
男と女のパズルに終りなどはない
日々好日だったと父の太い指

西宮市　秋元てる

小柄だが和服の似合う父だった
家中で一番小さい祖母の靴
どう嘘をつき通すかを打ち合せ
都落ちひとり夜行の固い椅子
詩人という触込み無人駅へ降り

今治市　野村京子

切られても棘持つバラの自尊心
グラビアの裸婦つんとした乳房もつ
半熟の玉子おんなが自惚れる
雨続く交換日記白いまま
ポケットで雑魚寝が軽い小銭入れ

熊本市　大川幸子

ゆうべ寝ず考えたのに今朝忘れ
また穴が一つ増えているベルト
塗る描くでいつか素顔を見失い
時々は充電する気の手をつなぐ
拗ねている浴衣の帯がいじらしい

熊本市　宇野昭代

朝寝坊叱り娘の靴みがく
ブランコに揺られ聞いてる風の私語
無理矢理に隠退させて惚けさせる
いい方の傘から先に忘れて来
娘のお古ナウいファッションしています

兵庫県　森脇和子

旅帰り笑い袋に囲まれる
玉手箱あけろあけろと春の風
いいことがありそう胸で蝶が舞う
からませた指を妬いてる影法師
東西に友ありポストも嬉しそう

大阪市　上田柳影

フルムーン財布は妻が放さない
泡一つへドロの愚痴が浮きあがる
捨てに行く小猫捨てかねる眠り
句三昧日々おおらかな顔がある
根っからの阪神ファンで不機嫌で

長岡京市　木本如洲

降り出した雨にあわてる花むしろ
花ぐもり塔は世評に耐えている
濡れているふたりも塔も春の虹
春惜しむ言葉のこして別れけり
八十を生きて時効の恋を追う

静岡市　沢田きん

殉職の弔辞へ妻のむせび泣き

からみ合う紐が空気を重くする
古時計勝手気ままに動いてる
傷心の女に触れる若葉風
威張らせた天狗の鼻が伸び放題
久留米市　鶴久百万両

蛇いちごの情けと堕ちる赤ワイン
火と水のこころで鬼を飼い慣らす
赤い実を食べると風の子を妊む
境界線めぐって紳士にもなれぬ
名水百選阿蘇の旅情を持ち帰る
尼崎市　森安夢之助

みず虫も失業すると寄りつかぬ
言い訳をすると財布が嗤い出す
背に受けた刀の傷が深すぎる
午後三時目薬が欲しい事務机
仲間顔してついて来る影法師
尼崎市　的場十四郎

ライバルが対角線のなかに居る
父の日も母の日もない独り旅
下手な嘘まことになってきたピンチ
世の中を見に出てもぐら叩かれる
健やかな暮しのなかにあるリズム
伊丹市　山崎君子

路地裏の花屋のばらも赤が冴え
花の顔ゆるむ小雨のありがたし
祖母の手にまだ艶がある盆おどり
主婦ばかりホテルの昼のクラス会
ロビーには同じ顔した待ち呆け
京都市　松川芳子

旅帰り土産の数がまだ足りず
傷口をだんだん深くする他人
金貯めてからの思案が多くなる
アンテナが雑音ばかりキャッチする
言い過ぎた朝は無口な三面鏡
米子市　新正子

車間距離おいて伺う話です
人の輪の中で教わる聞き上手
ワープロよ遺言状は無効だよ
堂々と出会えば誰も気付かない
堺市　神原文

つきつめてみれば夫婦は鍋と蓋
アイラインしても変らぬ心の目
葉がりしてこんなとこにも陽の光
汐騒の音で旅籠と気付く朝
島根県　高野律子

凪いだ日も荒れた日もあり子を思う
千金の夢より父の汗を見る
父の貨車家族を乗せた幾山河
逆風にふんばる靴を買いに行く
鳥取県　西浦小鹿

僕の席花壇の方に向けておく
大漁にいつまでも旗振りつづけ

笹舟が向う岸からやって来る
財テクを黙ったままで聞いている

寝屋川市　宮崎菜月

花博へお誘いしたい人がいる
通学の自転車まきこむ髢草
青春の貧しき一筆胸に秘め
逝きし者一星ずつの贈り物

西宮市　松本一郎

青春を過ごした町が夕焼ける
葉書一枚来ぬ日が続く外は雨
クラス会戦前戦後を生きた顔
お祭りの主役は老母の祭りずし

京都市　木村たけし

別れ話のふたりに吊橋ゆれつづけ
情けある言葉は坂を降りている
犯人が走ると森は笛を吹く
枝川を大根積んで舟下る

岡山県　土居ひでの

塔あげて叙勲に捧げる日章旗
絵日記の亡父さんたたえる唄がある
山降りてひとつ覚えの花ことば
オイと呼ぶ視角に倖せ溜めている

吹田市　井上照子

聞き耳を立てて恐怖と向かい合う
茶を愛でて老いた二人にある静寂
皺増えて美顔術とは遅すぎる
フィクションと思えど涙また溢れ

尼崎市　鈴木良征

端的に言うと課長とうま合わぬ
用件もはなしもないがお茶飲みに
褒め言葉いつになっても口ごもる
内股膏薬保革連合考える

出雲市　金森知恵子

少しだけ誤算があった設計図
親ばなれ子ばなれ美事に鳳仙花
野の花の風情だけです佗住居
速達を前に父母黙り込む

和歌山市　森茜

森林浴風も光も友だちに
ウインドに猫が居眠る店じまい
叱らずによかった川風ここちよい
よく笑うお人でとても救われる

出雲市　伊藤寿美

天秤棒荷が軽すぎて揺れはじめ
窓際に座りみどりの風を知る
一番星見つけかごめの輪がくずれ
若いっていいね活気が風を切る

岐阜市　渡辺杏村

黒ん坊土産話も得意顔
秋風にカードのツケが厳しすぎ
ええかっこうし過ぎた罰の請求書
松茸にこだわりすぎる戦前派

短冊に一句ひねった星まつり　熊本市　北川一進
お帰りと孫が一番先に来る
口止めも三日ともたぬ袖の下
急ぎ足ドアの自動に突き当り　熊本県　高野宵草
憂さはらす排気音から憂さもらう
忙しい明日になりそうパジャマ着る
大病院の検査ぐるぐる歩かされ
マイカーで見落していた街の景　砂川市　大橋政良
いい飯が炊け単身に少し馴れ
腹立てたらしい入歯が鳴っている
曲線のスリルに少し酔わされる
父のメニューもまんざら捨てたものでない　寝屋川市　太田藍子
玄関に明るい風があるお家
キャッチホンつけて子供の長電話
相談に乗って思わぬくじを引く
乾杯の音頭長くて気が抜ける　尼崎市　野瀬昌子
定年になって夫が肥満する
さりげなく立聞きしてる影法師
列車待ち隣の人がよくしゃべる
残り物食べてる私が肥満する　尼崎市　山田保蔵

傘持てばゴルフのマネがしたくなる
村の辻首落ちそうな地蔵さま
英字紙を電車内だけ読んでいる
線路ぎわ南無阿弥陀仏の祠ある　尼崎市　尾宮弘治
ビル工事もう農道が守れない
ママごとにバイトもとむと書いてある
階段がきついと言えぬ子と同居
点々と光る漁り火父が居る　尼崎市　木下義嗣
口喧嘩妻に勝たせて飯にする
花時計四季おりおりの花匂う
氏神の祭もせまり梅雨もあけ
廃線の線路に咲いた夏小菊　兵庫県　奥野テル
あんな夢こんな夢ある朝鏡
塩壺は何時もきれいで母達者
まあまあの暮しに足りて手を合わす
人情の厚さ言葉は飾らない　摂津市　木下道子
ファインダーに心変りを覗かれて
引き伸しすぎて美貌の間が抜ける
ワープロを打つ夫の背の頑さ
叱られているのは夫と夫です　徳島市　宮武まつ女
とりあえず秒針止めて待っている

夏やせの鳩で森から出たがらぬ
ささやかな喜びでいい紙のツル
自我捨てた心で春の地図を描く

寝屋川市　井上すみれ

珍客に肩肘張って飾り壺
蟬しぐれ村の祭の縄つくり
消費税あれから家計簿嫌になり
ダイエット利かず言い訳旨くなり

和歌山市　田中みね

酒が言わせたものの弾みと思えない
その一言に素顔を垣間見たような
ふらっと旅に出たい日もある長い道
引きつける何かがあって思慕の湧く

十和田市　阿部進

聞き上手相槌うまく打っている
満腹のもぐらがいびきかいて居る
労りの言葉忘れぬ夫婦愛
定年がのんびり花と語り合い

兵庫県　東浦砥代

過ぎし日の皆美しい古日記
土曜日の夜の甘えが板につき
中流の幸せ夫と酌むお酒
撒き餌して味方の数を整える

和歌山県　岩崎瑞穂

古簞笥母の内緒もつまってる
理想には遠いが今日の幸に満つ
開発へ不服顔する鬼瓦
昭和史の終焉淋し涙雨

和歌山市　堀畑清子

家庭持つ資格あるのか自問する
虫のいい望みを捨てる橋の上
我ままに今日は一日なってみる
評価まだ定まらぬ子へ持つ希望

尼崎市　明壁敏之

門口が賑やかになる下校どき
野良猫も長く伸びする昼下り
梅雨の間にでんでん虫が移動する
輪の中に入れてもらえず拗ねている

京都市　渡辺圭坊

桔梗は変らぬ愛を咲き続け
萩の花想いのたけを述べて咲き
かすみ草清い心で他人たて
かきつばた幸運きっとやって来る

岡山県　平田たけよ

味噌汁のお代りもして嫁をほめ
古里の自慢は川にほたる飛ぶ
品のよい人だと思うレストラン
終点は尺取虫に聞いてみる

兵庫県　酒井靖子

かすみ草今日の私を引き立てる
寡婦天国すきな所へ顔を出し
輪の中で悪女になって指揮をする

生涯を女という字に縛られる
鳥取県　太田幸枝

雨予報はずれて傘が杖となり
絵の好きな娘やさしい顔になる
挨拶は止めてビールの栓を抜く
初恋の実らぬままの火種抱く
尼崎市　新井泰子

３ＤＫ煎じ薬にむせている
なにくそのファイト一夜で萎えている
早口についていけない電話口
白い腹見せて金魚のたどる夢
尼崎市　吉永伊三郎

川汚れ泥を食べてる蜆貝
まだ来ない相手待ってる指定席
脅かしの核を作って地球病む
地球儀を回す力は指でよい
高槻市　芦田静江

花好きが花を咲かせる花だんぎ
亀の子たわし墓を洗った七回忌
不死鳥に歌いつづけて黄泉の客
メルヘンに虹が出て来た娘の新居
旭川市　朝倉大柏

階段の踊り場そこで思案変え
井の中にこもる老後の四季平和
人を切る舌を一枚別に持ち
意地を張る横顔きれいだと思い
貝塚市　池田寿美子

アンテナを張りめぐらせて夢を追う
脇役の山葵が効かすシビアな眼
近江八幡にて
葭切に葉ずれは静か櫂進む
湖の風や船頭の歌明治人
尼崎市　長浜澄子

結論をじらして見せる年の功
懐かしき祖母ねぎらいの袋菓子
日だまりの猫のあくびについつられ
さからわず流されもせぬ妻に成り
岸和田市　岩佐ダン吉

それでも鵜悲しいまでに生きている
倒された象の淋しい目を見たか
地球にはスペアはないと核署名
月見草に見送られてる無人駅
堺市　船越重子

鬼ごっこしているような金と暇
タテマエと本音を椅子が使い分け
年金に波打ち寄せる消費税
ウインドが町と対話をしています
茨木市　藤井正雄

合い鍵が鞄の底にある安堵
少しだが株の儲けの内緒事
肩で風切って口笛風に乗る
部厚くてシステム手帳多忙のよう

兵庫県　倉垣恵美

家族連れ山の緑を吸いにくる
伸びなやむ苗にも派閥があるらしい
しがみつく石は自分でさがさねば
ほんとうのわたしにさせたさくらんぼ

藤井寺市　菊地繁男

失敗を面白そうに見る他人
せんべいを一袋空けさすメロドラマ
手玉取る恐い女将の酌を受け
湯殿から浪曲流れて父健在

寝屋川市　河合時弘

立ちくらむ妻へなんにもしてやれず
胃カメラの無事へ明るさ戻る妻
集金に来て縁談をおいてゆく
コスチューム変えて女を見せに行く

伊丹市　小熊江美

涙腺が弱く男をあわてさせ
午後からと約束したら雨になる
景色より話夢中のバスツアー
ライバルに影響されてダイエット

熊本県　増田一乗

出張でパリについたと子のたより
奉仕の場あって暮らしに張りがあり
声援にビリで力走する二年

尼崎市　中澤向西

氏神に参り氏子の貌をする
あじさいの花が濡れてる亡母の墓
二枚舌使ってピンチを切り抜ける

相生市　中塚礎石

縄電車夕日へ一人二人降り
空っぽのドックに魚を飼う話
歩道橋車椅子から空を見る

岡山県　福原悦子

廃校の銀杏あれから十五年
紫陽花の本心を見る通り雨
旅先の思い出沁みる箸袋

松江市　原長三

矢印でトイレを示す山の宿
天高くひばり散らした俄雨（ひばり逝く）
松緑を冥途でまって菊五郎（松緑逝く）

熊本県　岩切康子

夜勤癖ごきぶりに似てごそごそし
横座りそれなりのたこ出来はじめ
転勤の度に荷物は縮こまり

東予市　小山悠泉

ハスの葉のしずく真珠にする朝日
球根の花芽優しい絹の雨
手の内を読まれ切り札出しそびれ

羽曳野市　芦田絢子

スーパーの鮎川の話はしてくれぬ
コンパスが画いた丸みに添う人生
亡夫の手の上で遊んでいる余裕

佐賀市　江口万亀子

わが余生笑い袋を補修する
ワンテンポ遅れて笑う妻でよい
ほおずきが熟れると恋の使者が来る

藤井寺市　楠昭子

忙しい人だと判る字の流れ
淋しくて朝の挨拶しに出かけ
夏やせもせずに控えています秋

松江市　豊田巡歩

年金で蟻は働く事忘れ
閣僚へ氷枕を用意する
僕んちの金の成る木はとうに枯れ

羽曳野市　麻野幽玄

茄子胡瓜美味しく漬かり朝のお茶
さんぜんと輝く釣果の中の鯛
街からの客来る頃に西瓜冷え

鳥取県　西川和子

温泉の混浴をアピールしてる
ビール一本が二人に少し余る
衛星に地球の裏を見せられる

酒田市　永沢裕子

絶景を崩してゴルフの球が飛び
力餅食べて神社の坂登り
マンションの玄関あたりが里の家

大阪市　亀井円女

にせものもコピーと言えば聞こえよし
消費税のかからぬ夢を貯めている
うつの日はあせらず沈むことにする

鳥取県　西原艶子

うち寄せるさざ波海の鼓動かも
亡父の癖私のなかへ生きている
道まよいお地蔵様へ道をきく

青森県　波だお

身構えて色紙に向かう墨の香
大空は己のウサを吸ってくれ
教え子の病気見舞に涙する

佐賀市　古川一徳

徹子の部屋客それぞれに自負を持つ
説明を省くと波紋広くなる
平手打ちくわせた方が許してる

豊中市　三宅つえ子

子と同じ目線の高さ車椅子
地上げ屋に崩されてゆく砂の塔
高い樹のてっぺんで鳴くカラス

羽曳野市　福田満洲子

かしわより手々噛むいわし高うつき
傘寿なお金剛登山の夫婦仲
クーラーを嫌いになった肘と膝

鳥取県　中瀬さつき

忍の字で待とう噂が消えるまで
心の隅に金婚式の夢を編む
朝の陽に霞む故郷の山がある

鳥取県　幸家単車

笹の露大河の夢は抱いている
水滴の一つ一つに詩がある
まだ明日もあるさとゆとりある返事

大阪市　川原章久

子を水に盗られた母の火の供養
入歯鳴るみそぎの水の冷たさに
囀りを終えたひばりのひとり旅

米子市　小西五十鈴

ひと彩を胡瓜で添えた朝の膳
入れ歯まではずれるほどの大欠伸
お隣を親戚よりも頼りにし

大阪市　今西静子

ほがらかに笑い崩れる舞妓たち
ひとすじに歌を愛した女王逝く
切札は柩に入れてゆく妻で

和歌山市　山口三千子

非常口子供のために開けておく
老えがあって昼寝をして居ます
くたびれて来たので口が重くなる

島根県　加本義良

初恋の小箱を開く夏帽子
プライドを一つ落して深呼吸
欲の無い真白に咲いた花が好き

枚方市　中山おさむ

ウインドショップへ赤い血が騒ぐ
すれ違うままでよかったそれも愛
海外へウーマンパワー闊歩する

守口市　森川春子

貸傘が早く戻ったことがない
ポケットベルおちおち出来ぬ碁のとり手
浴衣着てサンダル闊歩もよく似合い

枚方市　山崎彩子

韓国古寺巡礼

韓国の寺も仏も厚化粧
仰ぎ見る鼻の偉大な磨崖仏
韓国のアリも同じく忙しい

静岡市　三浦つね

今度来た隣の子供よくなつき
性質の変る橋なら渡りたい
穏やかな話まとめるお人柄

鳥取県　山根八重

風鈴も恋をしているいい音色
温泉に女の苦労おいてくる
幸せになる一日の鏡ふく

鳥取県　石谷美恵子

流れにも乗らぬ小石が意地を見せ
おもちゃ箱外科医呼びたいものが増え
撒き餌には寄るが味方と限らない

愛媛県　八塚三五島

やんわりと輝いてくるいぶし銀
盲点をチクリチクリといやな奴

満天の星をあおいで大ジョッキ　岡山県　杉本伊久栄

古日記読んで昔をなつかしみ
嫁として母である日の米を研ぐ
バラの花花に似合ぬトゲを持ち　豊中市　滝北博史

空振りに終ったけれど燃えた夏
夫婦ともスイッチすでにこわれてる
立ち並ぶビルの谷間に父母の墓　静岡市　久保きぬ

待ちわびて気構えゆるむ生あくび
美人ではないが飾らぬ暖かみ
みせかけの情に弱い老いの耳　島根県　福間博利

太陽の匂いがすきで布団干す
長命を漢方薬へすがりつき
七十の坂すらすらとは越せず　鳥取県　伊吹富恵

つまずいた石に明日の道をきく
マイペース大器晩成とも思い
誤字脱字中から母の顔が浮く　出雲市　森山健歩

割ぽう着の似合う女将へ店流行る
無責任な相談無責任な回答
昇り坂の時だけ訪ねて来る男　広島県　森川抜智

中元も歳暮もなく気が楽だ
旅先でキャッシュカードが役に立ち
似てるわよする事なす事親ゆずり　岡山県　後安ふさえ

胃カメラを呑みつつ癌のこと思う
明日は明日力一ぱい今日を生き
手袋の白さがほしい立候補　鳥取県　山内芳江

南極の氷地表の汗となる
腕時計はずし本音で夜を明かす
実弾を打つ音聞いて慌て出す　島根県　梅木梅園

楽しみは畠で一句認める
病床の友へ笑顔のうそもいう
惜しまれるひばりの歌は胸をつく　川西市　野村静雄

一円を許さぬ買物籠を提げ
ビールにて命を洗う暑さだな
自惚れた日から始まる不仕合わせ　鳥取県　鈴木芙美

ひとまわり大きくなって孫が来る
カスミ草主役生かして無口なり
今日生きる野良着が似合う私です　豊中市　小林一夫

流されて流れていつか海に出る
ともかくも海の広さに納得す
もう捨てることはできない重い石

吹田市　山本希久子

十年の知己を得たよと縄のれん
家系には美人はいない写真帖
擬似餌にかかった鮎も悔いている

鳥取県　石尾かつ乃

虹はまだ遙か向うに居てほしい
温室の中で自分を見失い
幸せの風が我が家のベルを押し

静岡市　柳沢たま

立ち上がる勇気雑草から貰う
太陽の光をもらい風邪癒える
梅雨晴れ間フル回転の洗濯機

泉南市　坂根流水

全議員みんな女にしてみたら
運不運神のこころを計りかね
年金の小さい福をにぎりしめ

藤井寺市　武部敦子

一億円数えてみたい指の私語
美食してサウナへ汗をかきに行く
泥舟を出して悪女になってみる

今治市　渡邊伊津志

高い塀母と娘とだけで棲み
一眼レフ指向選択忘れられ
黄水仙海の青さを引き寄せる

京都市　小林英子

幸せに染める絵の具が見つからぬ
それぞれの位置あるらしい窓の鳩
寝不足に白じら船の夜が明ける（四国勉強会）

静岡市　大村正雄

蛍火を消さないように手で囲み
川の字に並べサンマの特売日
七滝の踊子像の若い眉（伊豆天城）

和歌山市　前田美子

禁煙を決めた夫の背がさみし
捨てる人拾う人あり粗大ゴミ
竹藪の民話聞いてる涼み台

尼崎市　新井朋子

女子校の前でカップル手をつなぐ
先生とケンカはしないイイ子です
言いすぎたゴメンナサイは夢の中

堺市　井上たかし

パート馴れ夫見る目の違う嫁
草笛を知らぬピアノの上手な子
ツバメから見れば阿呆らしパスポート

静岡市　大石たき

誘惑に負けて蒸発考える
留守番は寂しいものよ老い一人

盆踊り娘の浴衣借りて着る　鳥取県　乾　隆風

前ボタン一つはずれたほど惚ける
コンバイン買って赤字を繰り返す
頭から水をかぶっている狸　寝屋川市　北岡　波留吉

大切な妻を残して死ねますか
何もかも嫁に打ち明け身を守る
姑の愚痴また寝言かと聞き流す　岡山県　後安　江山

鮎解禁川面は夏の風物詩
追伸を先に読ませる娘の手紙
労りの言葉に堰を切る涙　岡山県　福原　辰江

湯につかり明日の策などないくらし
石橋を叩いて父が出す答
極楽は自動ドアーでない不安　鳥取市　森山　豊子

現金が見えぬカードに踊らされ
反対と言えぬ小心隅に居る
浄土にもきっと綺麗な花が咲く　岡山県　富坂　志重

大器ではないがやさしい夫だった
幸せが落ちていないか散歩道
指先で余生楽しむ芸を持ち　米子市　服部　朗子

ひたむきな心が滲む老女の絵
夏風に慌てて弾く莱の豆
さわやかな涼しい顔に逢ってきた　大阪市　清水　絹子

俎板の癖には勝てぬへこみよう
夜の留守光を一つおいて出る
披露宴一番あとに父の声　静岡市　小木　久子

二次会へ二つ返事でついて行き
風邪に寝て久々の日が眩しすぎ
ささやかに季節の花を咲かす幸　鳥取県　武田　帆雀

一粒も零さず老母糠を分け
雑学の中に残りし菊の鉢
蜘蛛の糸揺するいたずら好きな風　伊丹市　猪原　石荘

夕刊が来たのに妻が帰らない
阪神は線路の先に次の駅
襟立てて雨へ出て行くフィナーレ　出雲市　高橋　きよし

橋が出来島の根性消えてゆく
粋な彩顔に映えてる娘の日傘
瞑想に入ってやたらに飛ぶ蛍　和歌山県　森　三枝子

父と子の会話コンピューターのこと
納得をすると女はもう泣かぬ
一票はきめているのにスピーカー
唐津市　山口　ふさ子

老人の過保護は呆けを招き入れ
よそ行きのあれこれ迷うアクセサリー
日記にも美空ひばりの悲報書く
岡山県　牧野　秀香

十七忌墓石の朱字消えかかる
孫達が派手柄着よと買うてくれ
お揃いの浴衣が並んで旅の宿
鳥取市　岩原　喬水

一円の誤算銀行灯を消せず
あじさいは男の涙知っている
酒癖も悪いが払いまだ悪い
河内長野市　大西　文次

頑固さも親そっくりで暖簾継ぐ
父の齢越しても父の七光り
気晴しの積りの酒が愚痴を言う
泉佐野市　真崎　浪速子

送金に母を泣かせる嘘が増え
仲直りしてから女よくしゃべり
他人の癖ばかり目につく席にいる
島根県　岩田　三和

真っ黒になるまで泳ぐ浜辺の子

手の砂を落としてイチゴつまみ食い
約束が三つ重なる朝デンワ
鳥取県　美浦　美代子

前向きに生きて行こうよ平成も
会えなくなって初めて愛の深さ知る
野仏の笑う目元が亡母に似る
新潟県　高野　不二

盃が聞いてる二人のはかり事
宅急便が先に届いた里帰り
薄謝ですと受取りまで取られ
寝屋川市　豊福　路子

自治会のかしら選びがよく揉める
不満のみつのる日もある二十日床
日めくりに手をふれぬまま十日病み
大阪市　吐田　純子

この齢になって強がり言うて生き
子と交わす酒へ未来の設計図
一願へ北向地蔵の灯が揺れる
鳴門市　八木　芳水

雨が降る訣れ言葉が出せぬまま
本音はく男をおんな値ぶみする
敵のない世間にしたいこじんまり
熊本県　立道　善太郎

一円の重み教えた消費税
寝たきりで生きる幸せ書きつづけ

連休に一年中のお茶を摘み　鳥取県　久野野草

酒さげた客下心読んでいる
嫁がふとライバル意識持ち出した
晴れた日の旅は急がぬかたつむり　岡山市　河野青銅

空の旅宝くじ買ってからの夢
失敗ばかりして陽気なギャルである
神様にもらった笑顔のまま老いる　米子市　小塩智加恵

泥舟に乗った時から意地を飼う
暇な舟一人乗せたら日が暮れた　堺市　近藤豊子

手もとまで線香花火責めてくる
歓声を合図に花火いさぎよし　鳥取県　黒田くに子

雲行きが悪そう補聴器を外す
言い訳は止そうブランコつよくこぐ　岡山県　清水悠貴女

陽やけした七十の掌に化粧水
きゅうりさくさく倖せの音刻む　岡山県　大石あすなろ

海の青空の青にも映える橋
颯爽と生きた足跡のこしたい　倉吉市　田中八太朗

思案して決断したか蛙飛び
大掃除古い日記に捗らず　鳥取県　前田嘉津江

三世代暮らす心のゆとり持つ
真実味欠けた噂が水っぽい　岡山県　江口有一朗

父の日に父は父の日忘れてる
まずくとも自作自演の人生譜　岡山県　伏見すみれ

末席で芸のないのが手を叩き
他所の子を叱る度胸を持ち合わせ　奈良市　米田芳子

娘と歩く母もやっぱり肩パット
山の辺をだまって歩く共白髪　岡山市　中嶋千恵子

梅雨空をあおいで嘆く子沢山
昔話つきぬ話題の数え唄　富田林市　山原昭水

父の日に息子がくれた登山帽
秋祭り駄菓子を買った少年期　島根県　菅田かつ子

喧嘩したあの日ひとしお懐しむ
真剣な話の中へ出た欠伸　大阪市　家村高雄

名司会マイクの距離も弁えて

ヤーヤーで今更名前聞けもせず　八尾市　向井しづ子

名優の芸がぞくぞくするテレビ
都市砂漠鉄のわれ目に根づく草　枚方市　森本節子

デザートのメロンは密度こい甘さ
赤い紐鈴つけられた猫鷹揚　吹田市　西岡豊

モシモシと地球の裏の孫を呼ぶ
非常勤気まま身ままに翔んでいる　大阪市　清水利武

お天気も体もシャンとしない梅雨
傘の花そろそろゆれて矢田の寺　十和田市　阿部喜久江

温室をでてきた花が風邪をひき
振り過ぎたしっぽが誤解されている　八戸市　島田昭治

残り火の闘志何かにぶっつけよう
貧しさも美談の主は苦にならず　唐津市　野田旭恒

父と子の視線が違うショールーム
母を背に軽さ思わず涙ぐみ　川西市　田中喜俊

御近所の犬が帰宅を待ってくれ
ひまわりは背丈のばして隣みる　米子市　大田みさと

どこまでも持っていきます童女の絵
慌てても慌てなくてもゆく浄土　静岡市　宇佐美寿美

手作りの袋に孫の笑顔縫う
姉妹で申し合わせるのし袋　静岡市　西村千代

愛の熱体温計で計れない
握手する軽い未練を淡く抱く　藤井寺市　中島志洋

あるだけの色塗りたくる孫の虹
本心は秘めて女のきれい事　大阪市　桝本蕗児

美術館心の錆を落したく
遠野には遠野に似合う羅漢様　唐津市　入江喜久夫

リクルート雑魚が四、五匹獲れただけ
精霊を流す川辺で出来た恋　八尾市　片上英一

流れ星お願いごとが多すぎて
賑やかな君にも少しくたびれた　富田林市　浦田トシヱ

チクタクと時計の音に励まされ
ハーモニカ小学唱歌吹いてみる　島根県　兒玉幸子

草笛を吹いて日暮れの子ら通る
雨宿り向うの山から虹の橋　島根県　松本聖子

意気ごんで出かけ手ぶらで帰りつき
鉢植のトマトが熟れて梅雨が明け　大阪狭山市　桜井荘次

強情を売りものにしている老舗
目の前にある節穴がそそのかす　唐津市　福島紀一

飽食の時こそしっかり米談義
百円で買えるかぼちゃが二個実り　出雲市　岸桂子

葉の裏で動きを止めて生きのびる
また夏が来たよと告げる波頭　鳥取県　今本早苗

わたくしも貴方について歩きます
青春のめだつバッジをつけておく　静岡市　中西雅

ふんだんに墨ふくませて筆走る
帯きりり後婆を細くみせ　静岡市　浅子まつゑ

再会に握る手の指力込め
消費税請求されて苦笑い　唐津市　浜本治幸

北へ行く列車冬物乗せて行く

厨房に妻のハミング聞く平和　静岡市　増田扶美

さりげなく着た絽の着物振り向かせ
ちゃっきりの踊り明治の腰が伸び　宇部市　中村三良

馬鹿にしながら女の票をあてにする
曲っても自我は曲げないへぼ胡瓜　鳥取市　美田旋風

針の穴通さぬ糸が増えて来た
夢でいい枯木に花を咲かせたい　鳥取県　木下芙葉

あの娘からペン字綺麗な返事きた
アルバイト貯めたお金を母にくれ　東大阪市　岡田寿美礼

おいしいと食べる息子に励まされ
曽孫の無邪気な笑いに歳忘れ　鳥取市　松本伊都子

名曲がワイングラスを揺れさせる
露天風呂裸へ月がまるく笑み　静岡市　青柳金吾

月末の献立大分品が落ち
威張らない素直な夫が気にかかる　倉吉市　青砥菊枝

国会の土井さん男の顔になる
独り居に風鈴の音のやさしさよ

鳥取市　前田一枝

街の灯が揺れる誰かが呼んで居る
特売日欲をつめ込む市場篭

静岡市　山中竹野

遠花火消えてむなしさだけ残り
ゴソゴソと袋集まる台所

河内長野市　岡崎実

妻の座が安泰心晴れ渡る
貧乏が性に合い路地裏に住み

高知市　山崎一求

振出しに戻して欲しい老いの坂
ホルモンがさせているのかプロポーズ

大阪市　堀口欣一

日本の縮図自動車教習所
忙しいから生きられるこの世なり

姫路市　谷清柳

ボタンひとつ落してからの物語
どん底に落ちて思わず笑いだす

東大阪市　大平太一郎

八十路越え老い美しく菊に生き
迷うのも生きる証と明日目指す

岸和田市　三輪通彦

逝った子は今どのあたり秋彼岸
馬鹿になることも覚えて丸く住み

鳥取県　萩原美雪

通帳を唯一味方とする不幸
年金でせっせと孫のものを買う

神戸市　岩田信義

櫛欠けて決心ついた別れの日
夢詰めたカバンは大き夏休み

青森県　木村喜峰

雨の朝早起鳥も寝坊する
雑巾で拭けない過去のある暮し

鳥取県　市村京子

迷い道母の足跡目印に
雨ふればすぐに雨もりする夫婦

芦屋市　根来敬

誤解のまま帰ってしもた悔い残る
あの虹の橋のたもとにはよ行こう

大阪市　山北三三三

マンションは帰った順に灯がともる
風邪引きに医者も風邪引く休診日

橿原市　西本保夫

見損なった人です話切り替える
見えすいたお世辞喜ぶ事にする

広島市　中村要

変化球投げて女房に打ち込まれ
この寝顔少しどうにかならないか

吹田市　山田里子

八十のダンスまわりに灯をともす

育ちよい板ばっさりと植木職　富田林市　加藤ミツエ

雨晴れ間大中小と傘を干す
退院を信じてたのに夫逝く　島根県　今川三津江

せせらぎの水濁流となる梅雨末期
夏祭り孫に花火へ呼び出され　鳥取県　武田照女

明日からを背負う形身の腕時計
やわらかい雑巾子らの小言ふく　倉吉市　橋本さつき

雨の夜に殿様蛙逢いに来る
部屋与えクーラー与え断絶し　豊中市　額田明吉

高槻西国街道を尋ねて

安威川の堰も苔むす石畳
一里塚大樹に地蔵の顔化粧　大阪市　平井露芳

勝敗は風にまかせた選挙戦
観客の美女もついでにテレビ撮り　弘前市　肥後和香子

花束の重さに今宵女優です
モノクロの月光仮面はあなたです　岡山県　森下正子

唇を離れた言葉戻らない

仏壇に供える花が庭に咲く　和歌山県　西口忠雄

かば焼きに団扇あるから客が寄る
ひとりでも五人産んでも母は母　広島市　名和喜一郎

もう涙終りましたと髪を切る
髪切って女心を変えてみる　大阪市　尾崎黄紅

苦節十年実る胃腸が弱くなり
虹ばかり描き赭くなり蒼くなり　島根県　山根峰雪

無所属に寝返り自民去る候補
思い出してくれぬ老母のもどかしさ　静岡市　丹羽定次

みんな寝て夜更けに帰るお父さん
主義主張こだわる頑固分らずや　島根県　川津幸夫

貝料理じゃまでも殻があってよし
かっぽう着はずせば妻は眠い顔　奈良市　井上大

敗戦の延滞利息まだ残り
十億を同じ思想で縛れない　富田林市　西野直美

青春談無邪気にはしゃぐ山の風
山鳥に笑われそうな酒の酔い

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

有働芳仙

行間にわたしを埋めて封をする

中尾　まゆみ

秘めやかな恋を抱きながら、空々しい時候の挨拶と用件！　行間の余白に本心が疼いている女心を衝いた心にくい表現が唸らせる。申したきことは歌留多に書いてあるかも！

さりげない余白に好きの二字が見え

宇野　昭代

前句と同工異曲の句で、表現のニュアンスを拾いたい。手紙の余白に女性のこぼれそうな恋の溜息を聞く。

煩悩を女がたたむ蛇の目傘

野村　京子

〝蛇の目傘と女〟一幅の絵になりそうな句で、これも恋の煩悩かも？古風な蛇の目傘をたたむという仕草で女性の諦念の姿を言い得て妙。

ただいまへカレーが匂うママがいる

高杉　千歩

「ただいまァ！」と玄関に入るや、カレーの匂いがプーンと鼻をつく。「あっ！今日はカレーライスや！」「やったァ！」とカレー好きの坊やの弾んだ声がひびく。健康で明るい母と子の笑顔が楽しい。ほんのりした温かいカレーの包いのするママのエプロン！

この世とは右往左往をするところ

藤井　高子

この句は中七の「を」を抜くと、平凡な句になる。リクルート事件後、自民党の右往左往ぶりの動揺が頭を掠める。それを比喩した時事吟ではない。しかし、かも知れぬとも言える。「この世とは！」と悟り切った名僧の吐きそうな切り出しの言葉に一瞬、身構えるが、右往左往で参ったと思う。みんな迷路を右往左往しては活路を発見して、また、壁に突き当る。小生も作句する時、右往左往して袋小路で頓死する。

ルンペンにも主義主張のある暮らし

池森　子

「ルンペン」—懐しく古い言葉。まだ巷間の片隅に生きている人生があることも事実で、主義主張を崩さない眼が、陽の当らない所でギラギラ光っている。

お供えへ自分の好物ばかり選り

流奈美子

仏壇へのお供え物も、いずれは誰かのお口へリターンするもの。「仏様は生前は甘い物は嫌いだったのに、おばあちゃんはいつも自分でたべたいものばかり上げる。ずるいや！」と陰口が聞えてくる。微笑ましい佳句！選りが効いている。

社交辞令そんな笑顔につき当る

大川　幸子

選挙カーからニコニコと手を振ってゆく候補の笑顔が目に浮かぶ。この句は職場吟であろうか？　巧言令色という言葉より軽い意味で、本当は笑っていない笑顔！御挨拶用の笑顔でつき当るがちょっと気になる。

電話ロペコペコ下げて嘘も言い

松川　芳子

前の句と相通ずる含みがあるが、この句は相手に見えない挨拶の逃げ口上とも取れる。この句では突き当らないので楽であり、受話器を置くと舌を出すかも？

泣いた目を隠してくれるサングラス

堀畑　靖子

日常、よくサングラスをかける人と思われる。泣き顔を見せたくない時にかけたものではなく、サングラスのレンズの下である日、光っているのかも？

勇気などいらぬ流れに乗って生き

上田　柳影

どう嘘をつき通すかを打ち合せ

秋元　てる

みごもって来ているらしい膝の猫

尾宮　弘治

三句とも見逃せない秀吟である。

1989年度

路郎賞 川柳塔賞 候補作品中間発表

自 89年5月号
至 89年8月号

路郎賞候補作品

黒川紫香

義理チョコの軽いゲームで終るのか　西口いわゑ
残り火でかるい火傷をしてしまう　西山　幸
果てしなく海に降る雪　独りだな　奥田みつ子
肩書を捨てた五月の陽の長さ　岸野あやめ
簡単に金もうからぬ父の靴　宮口　笛生
さくらさくら今年も皆に逢えました　宮崎シマ子
句読点打ちそこなった春の風邪　永田　俊子
似た者の夫婦がすするお粥さん　平松かすみ
ぼくの金魚は小さいままでいて欲しい　小島　蘭幸
ストレスをファイトに替えて朝の靴　浅野　房子
待つことにくたびれ石を蹴りはじめ　片上　明水
兄ちゃんの女友達皆嫌い　川端　柳子
地図書いてくれたが手ぶらでも行けず　矢野　佳雲
只今とふるさとに言う山に言う　松本　文子
お役には立たぬが数の中にいる　清野　こう

正本水客

ジャンケンポン勝っても負けても何もなし　奥山美智子
鬼よ蛇よみんな出といで春ですよ　都倉　求芽
悠々自適明日は雨の方がよい　宮口　笛生
一杯の酒へ貧しく寄る味方　遠山　可住
輪の中で母がいつでもしゃがんでる　石垣　花子
逃げるより楽だ白旗ふりかざす　若宮　武雄
赦すものかと大根の首切り落す　河瀬　芳子
恋敵商売敵にも死なれ　西森　花村
解りたくないこともある子の話　西出　楓楽
免許証の写真がいつも気に入らぬ　佐藤　藤子
雨しきり緑に染まる音だろう　堀江　正朗
ひっつき草思い出させる消費税　古川美津枝
大柄の美女佇っている肥後菖蒲　田中　正坊
群衆となるしか弱者すべがない　森井　菁居
蛍飛んで一息いれる磨崖仏　江口　度

野村太茂津

死ぬ覚悟した経験がものをいう　奥谷　弘朗
あなた撃つ銃はわたしの指で足る　松原　寿子
幸福を下さるまでは無理をする　土橋　螢
幸せが逃げそうだから窓しめる　奥田みつ子
花言葉あげてもあなた振り向かぬ　吉岡きみえ
ちぎれ雲君は夢追う旅人か　江城　修史
秘密一つ守り続けていて悪女　西口いわゑ
温い掌がほしくて散れぬ玉椿　福本　英子

見えた日のままの緑か盃よ　堀江　正朗
扁平足を敵に知られてなるものか　西山　幸
泳がねば雑魚の群れにも遅れそう　牛尾　緑良
うつらうつらと夫の海に漂うて　春城　年代
春の雪絵になりたくてなりたくて　小池しげお
身の内に青い鱗を光らせる　河瀬　芳子
階段の踊り場踏絵が置いてある　石川侃流洞

西田柳宏子

あくせくと働く街の鳩ポッポ　岩本雀踊子
何もない私に蒼い空がある　嘉数兆代賀
筆不精だから手紙が長くなる　本間満津子
友情をときどき妻が妬いてくれ　遠山　可住
肩の荷がおりて真昼の月になる　平田　実男
忘れない文字てのひらへ妻と書く　堀江　正朗
百点の妻から逃げたい時もある　内芝登志代
折れるとも知らず天狗鼻で受け　江口　度
良妻になろうなろうと豆を煮る　西出　楓楽
言いたいことあるらし曲ってる胡瓜　天満三千代
花菖蒲母の匂いとむらさきと　藤原　鈴江
すかんぽや飢えし暮しの話など　長谷川春蘭
夏の窓ぴっしゃり閉めて人が住む　高橋千万子
人間が好きで教師をしています　斉藤　劦

ふる里の土は裸足がよくなじみ　田村　新造

橘高薫風

瞬きをせぬ孫が居り侮れず　松本　忠三
戒厳令の夜は抱き合うほかはなし　谷垣　史好
膝に置く手が哀しみを抑えてる　堀江　光子
影法師私の席で待っている　河原恵美子
卑屈にはなれぬ白髪を抜いている　津守　柳伸
ストローが何本もあるリクルート　藤田頂留子
株下がり僧侶読経がつまりがち　福元みのる
赤紙が来たので戦友会へ行く　田村　新造
白旗を上げられ負けたなと思う　西口いわを
座禅草のお嫁さんには水芭蕉　工藤　甲吉
嫁不足街はギンギラギャルの群　越村　枯梢
散髪は三パーセントのびてから　宮崎シマ子
あたたかい息をしている藁の家　野中　御前
トムソーヤ竹やぶまでは気がつかず　山田　妙子
お遊びのゲートボールでもめてます　神保　拓生

川柳塔賞候補作品

小出智子

折返し過ぎて景色が見えはじめ　山本希久子
軒先を貸すのは燕だけにする　新　正子
ホワイトデーいくつお返しくるだろう　福西　範子
転居した事をツバメにどう知らそ　大川　幸子
だいこんの花と身の上ばなしなど　乾　隆風
ほころびが知らないうちに縫ってある　大村　正雄
ほほえみをキャッシュカードで引き出そう　今本　早苗
不動産屋が歩いた土地の値が騰る　尾宮　弘治
もう一度逢いたい傘を借りてくる　伊吹　富恵
残された余生へブランコが揺れる　宮武まつ女
結婚をさせて田んぼが一つ減り　伏見すみれ
姑さんと嫁とでなしに出会いたい　山根　八重
もたれ合う人と喧嘩をしています　池　森子
憎い子は一人もいない洗濯機　的場十四郎
身綺麗にして老醜と相対す　上田　柳影

谷垣史好

舞扇　艶の一字のありったけ　山崎　君子
旅がえりごめんごめんと水をやり　上田　柳影
あいまいな人に紹介された仲　鈴木　良征

にこにこと医者はカルテと見くらべる　西脇　冨美
年寄りを看る年寄りになりにけり　野村　静雄
もどり寒昼餉は餅を焼いている　木村たけし
楽しくておちょこ二杯で酔っちゃった　新　正子
ストレスは河馬の欠伸にくれてやろ　藤井　高子
新線のまぶしさ愛のまぶしさよ　中尾まゆみ
もたれ合う人と喧嘩をしています　池　森子
午後三時女が手帳繰っている　吉永伊三郎
御仏が目を開いたら困っちゃう　大川　幸子
おにぎりをしたらきれいに手を洗う　乾　隆風
物忘れ茗荷のせいにしておこう　今川三津枝
母の日に贈ると父が礼を言う　滝北　博史

高杉鬼遊

飽食の街でカラスは山を捨て　美浦美代子
おとなしい人おとなしい犬を伴れ　井上すみれ
ハンカチを握りしめてる主義主張　島路　太郎
青春の部屋にビビアン・リーもいた　近藤　豊子
ざんげするつもりはないが花の寺　野村　京子
せかせかと動く歩道も歩かされ　木下　道子
閃光の中に冷たい神がいた　小林　一夫
本棚の古書から蒼い海へ出る　渡邊伊津志
市町村一億円であしらわれ　福島　紀一
あの世へは順不同ですかきつばた　山本希久子
海綿に水ふくませるボーナス日　岸　桂子
もたれ合う人と喧嘩をしています　池　森子
恋をしていなさるとかで美しい　藤井　高子
夫婦して同じ咳する花の冷え　麻野　幽玄
おにぎりをしたらきれいに手を洗う　乾　隆風

板尾岳人

励ましがとても上手な古時計　的場十四郎
自画像の横向く鼻をもて余す　流　奈美子
王様のつまずく石が置いてある　木本　如洲
いだずらな指を許さぬバラの棘　宇野　昭代
義理欠いた仮面を責める水鏡　森脇　和子
恋をしていなさるとかで美しい　藤井　高子
吹き抜けた風が残した安堵感　酒井　靖子
とろとろと煮つめて女策を練る　松川　芳子
千羽鶴北の序曲を思いだし　森　茜
人許しひとが恋しいカスミ草　野村　京子
子供の頃の話が好きなよもぎ餅　上田　柳影
蝶に逢う約束がある花の種　岸　桂子
虹が出る渡ってみたいかたつむり　根来　敬
ずる休みしたい日もある石地蔵　高野　律子
問う闇にやがて答える母の鈴　新　正子

河内天笑

ちょっとだけ惚けて家族の和を保ち　坂根　流水
年寄りを看る年寄りになりにけり　野村　静雄
パチンコの好きな男のでかい夢　井上たかし
逃げ道を一つ残して叱る父　中川　楓
御馳走のように煮えてる注射針　江口万亀子
肩パット強い男を待っている　上田　柳影
おとなしい人おとなしい犬を伴れ　井上すみれ
嫁はんの留守に雨漏り直しとく　乾　隆風
青年よ国語辞典を持ってるか　山原　昭水
笛吹けば踊ってくれる妻がいる　石谷美恵子
もたれ合う人と喧嘩をしています　池　森子
証文はないけど親に借りがある　高田美代子
この世とは右往左往をするところ　藤井　高子
懸命に生きる素顔が美しい　西浦　小鹿
淋しさは三百六十五連休　河野　青銅

藤村亜成氏から
亡父供養として金一封頂きました
川柳塔社

愛染帖

橘高薫風選

弘前市　波多野　五楽庵
折鶴の小さな海の津波かな
癌細胞年功序列をかき乱し
和歌山市　森　茜
精霊が竹に宿った風の音
雨の日が好きな男はエッセイスト
鳥取県　江原　とみお
神様の視界の外にいるらしい
丸裸で海の相手をしてやろう
和歌山市　西山　幸
嫌なわたしと遠い花火を聞いている
蛍籠明日を考えないことに
奈良市　井上　大
バーコードいつか私の背中にも
百万も集まる広場のない安堵
青森市　工藤　甲吉
静から動へ動から静へ津軽三味
太棹一挺じょんがらを先ず聞かせ
米子市　川上　より子
秀峰を慕い澄んでゆく庭の井戸
あわてまいきっとわたしの角の影
すててこの膝を正して終戦忌
堺市　井上　たかし
黙祷にあわててはずすサングラス
米子市　新　正子
姥ざかりゲートボールはまだしない
使い捨てカメラに写っているわたし
伊丹市　樫谷　寿馬
阿吽の呼吸で愛染さん参り
知らぬ間に国境線をひく独居
大阪市　桝本　露児
ガード下腕の片方ない人形
働いて働いて蟻ある日ふと
和歌山市　後藤　正子
傷むから行ったり来たりしてしまう
真っ白な時間を越えて来たなみだ
今治市　渡邊　伊津志
海よりも低い処に海女の墓
拗ねている型で水仙背を合せ
枚方市　山崎　彩子
謎めいてもじずり一本芝の中
梅雨さなか今美しくレンガ塀
吹田市　栗谷　春子
平成元年殉死の如く計のつづく
米子市　八木　千代
語りかけてやらねば石になる枕
寝屋川市　岸野　あやめ
職退いて人間ダービー観て居ます
富田林市　林　澄子
月光に酔ってはずした鬼の面
吹田市　山本　希久子
初めての街で似た景色に出会う
性善説性悪説の妻と僕
西宮市　松本　一郎
挨拶のつもりで帽子先に脱ぐ
米子市　政岡　日枝子
父の日の花が花屋で売れ残る
箕面市　椎江　清芳
山彦も返事をしないダム工事
茨木市　藤井　正雄
しのび寄る老いは眼鏡がずるように
伊丹市　猪原　石荘
同じ色いつか女になるルージュ
豊中市　三宅　つえ子
竹切りの竹お香匂う鞍馬山
大阪市　川原　章久
裏切らぬ花に裏切る雨と風
岡山市　塩見　みよ子
帰省の子男の顔でビール注ぐ
米子市　服部　朗子
丁寧な挨拶のあと寄付集め
有田市　松井　かなめ
デカンショの町の役場の扇風機
八尾市　片上　英一
争いは知らぬ顔する流れ雲
竹原市　信本　博子
強そうな意志が煙草を喫っている
広島市　中村　要
外柔内剛奥様のことらしい
出雲市　森山　健歩
月へ行くビザも出そうな宇宙基地
橋本市　岸本　木魚
八尾市　高橋　夕花

古手紙髪切るように捨てられぬ　砂川市　大橋政良

波風の立つのが嫌で輪を抜ける　島根県　榊原秀子

月山でイニシャル彫った樹の高さ　川西市　野村静雄

笑わせておいては次へ立ち上がり　弘前市　肥後和香子

この際は愛もパセリもみじん切り　唐津市　田口虹汀

欠伸からパッと生れたスケジュール　羽咋市　三宅ろ亭

夏草や五分の魂置き忘れ　今治市　月原宵明

ポケットで手が練っている妥協案　広島市　名和喜一郎

女よな男ごときで髪を切り　熊本県　高野宵草

母さんのぬりえを埋める塾通い　和歌山市　田中輝子

逢う度に大きく成っているように　西宮市　瀬尾六郎太

女性ってちょっとすまして肩が凝り　十和田市　阿部進

現世も先の世も皆金の音　藤井寺市　福元稔

写真より似顔絵マンガよく似てる　東大阪市　今岡貞人

週休二日禁煙デーも組み入れて　米子市　林荒介

わたくしを語るに余る古本屋　尼崎市　春城年代

レモン厚切り深い思いを不器用に　島根県　小砂白汀

血の色で夾竹桃が咲いて見せ　唐津市　久保正敏

課長代理将校でなし下士でなし　鳥取県　市村京子

さりげなくおいでよなんて言うアイツ　藤井寺市　武部敦子

ジーパンが卒業できず嫁にゆき　岸和田市　古野ひで

忘れたい忘れたくない人ひとり　堺市　近藤豊子

引出しをあけるとどっと忙しい　唐津市　浜本義美

年金のくらし鰯の値を覚え　唐津市　浜本治幸

妻の丹精実ったトマト旨い朝　唐津市　仁部四郎

青空の値段を燕ふれ廻り　堺市　高橋千万子

女少し乱れて酒座が盛りあがる　神戸市　岩田信義

負うた子の重さに奥歯かみしめる　十和田市　斉藤劦

田草取るF16機の音の下　米子市　小西雄々

約束へ熟柿が一つ落ちてきた　鳥取県　新家完司

神さまの長い午睡がまだ覚めず　守口市　結城君子

京の奥の奥の山女が二尾釣れ　高槻市　河瀬芳子

文化とは遠いところで聴くひばり　倉吉市　渡辺菩句

天道虫胸のバッジになり給え　和泉市　西岡洛酔

天職四十五年牛歩に甘んじる　海南市　三宅保州

ライバルに繋がっている命綱　岡山県　清水悠貴女

七十の声聞く耳に蟬の声　和歌山市　山田高夫

目眩めくドームを今に原爆忌　藤井寺市　高田美代子

そうめん流しの軽いジョークを掬うなり　倉吉市　青砥菊枝

おんなでも妻でもないが忙しい　モジリアニの絵　和泉市　中川楓

裸婦像になにわ文化をまかせとく　流山市　神田治

おいオレを愛してるかと酒の精　米子市　寺沢みどり

盃の丸さよ明日もこのように　和歌山市　神平狂虎

朝霧夜霧死んでしまえと言うように　島根県　松本文子

折り返し地点であの世考える　河内長野市　植村喜代

いい空気いっぱい吸って考える　姫路市　大原葉香

香煙が煙くて弥陀に近寄れぬ

大阪市　塩田新一郎
如是報仏静かに笑ってる

和歌山市　山川克子
そんな時私とケンカするわたし

和歌山市　福本英子
梅雨の髪ずしりと古漬けをきざむ

和歌山市　桜井千秀
ひとつしてひとつ忘れて風は秋

松原市　小池しげお
女房の鼻が英語でものをいい

守口市　森川まさお
赤い車で生命保険すすめに来

大阪市　神夏磯典子
風鈴に吊した一句風をくれ

和歌山市　木本朱夏
運の強い女に握手してもらう

廿日市市　森川抜智
慌てることはない終電車はもう出たよ

大阪市　山北三三三
外国のどこの女もよく喋る

大阪市　今西静子
年金の膳にサンマがよく似合う

芦屋市　根来敬
首振って歩いてハトのおつき合い

八尾市　向井しづ子
倒れてもまだ戦うという華麗

岡山県　江口有一朗
くらやみにくっきり父の肖像画

弘前市　真喜内實
法善寺の雨に濡れてる句碑拝む

豊中市　辻川慶子
野の花にゆき交う風の裏おもて

大阪市　山田妙子
通せんぼふとしたくなる子の成長

米子市　小村てい子
一対の金杯を受け野にくだる

唐津市　山口高明
騙されて見たいおんながいる喫茶

宇部市　中村三良
立て板に水でまともなこと言えず

静岡市　渥美弧秀
メロディに乗る句に出会う嬉しい日

守口市　羽原静歩
八月の雲しみじみと遍路笠

奈良市　米田恭昌
街並みが昔のままで人恋し

姫路市　中塚遊峰
三十の声も慌てぬ隣の娘

熊本県　立道善太郎
仏の間真中にして家建てる

唐津市　中村順子
憂愁をうかべ桔梗の花が咲く

鳥取市　西尾呼風
梅雨冷えに期末テストも楽に済み

東京都　吉川一郎
正論の鋳型解かして妥協する

西宮市　門谷たず子
すこし惚けて母の旅路は古里へ

岡山県　土居ひでの
環境汚染地球サイズの落し穴

宝塚市　丸山よし津
八十年かかって出来たいいお顔

米子市　小塩智加恵
老後の絵出来ないままに合日も暮れ

米子市　青戸田鶴
無理をしてつないだ糸が切れてくる

岡山市　川端柳子
花かげのベンチ真面目な答待つ

岡山県　福原辰江
月下美人あなたの情に乱れます

米子市　沢田千春
ふり向けば私の長い谷の橋

米子市　金山夕子
片方をなくして惑うイヤリング

鳥取市　武田帆雀
御親切様で用心しています

兵庫県　東浦砥代
ひょっとことおかめで捌くもつれ糸

＊

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題「**隣**」　選者　**森中恵美子**
締切　**9月10日**
（ハガキに三句以内）
投句先　大阪市中央区馬場町3—43
NHK大阪放送局
〃ラジオセンター〃川柳係
発表　9月24日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

女性コーナー

黄香の花

小出智子選

よく売れて淋しくなった風鈴屋　大阪市　本間満津子

魂へ着せるドレスは赤を選る　竹原市　信本　博子

螢火の吐息を好きな手にうつす　和歌山市　寺田　裕美

用のない漬物石が捨てられぬ　西宮市　林　はつ絵

ひと彩がまた消えてゆく誕生日　八尾市　高橋　夕花

アルバムのうしろに母はいつも立ち　和歌山市　森　茜

はらはらと見て下さっているあなた　松原市　佐藤　藤子

冷凍をしてます昨日した喧嘩　富田林市　池　森子

三泊四日うちの座布団うちのお茶　寝屋川市　井上すみれ

胸底に落として軽くなる絆　寝屋川市　稲葉　冬葉

人並に生きる踏絵をふところに　岡山県　山本　玉恵

わがうしろ姿に心置いてみる　尼崎市　春城　年代

子安地蔵にいつも挨拶して通る　西宮市　門谷たず子

破るつもりの約束をまたしてしまう　和歌山市　西山　幸

両方の気持が判るから困る　西宮市　奥田みつ子

本当の春待つあさって　しあさって　羽曳野市　吉川　寿美

横を向く椿にきっとある不満　富田林市　片岡智恵子

あわてるにしても一人じゃつまらない　米子市　政岡日枝子

根をおろすまでの時間を惜しまない　和歌山市　後藤　正子

美容院へ行けば宣伝してくれる　和歌山市　山口三千子

トンネルを出て相談の続きする　守口市　結城　君子

遊ぶのが原動力になっている　富田林市　藤田　泰子

昨日から明日へ私変えてゆく　米子市　青戸　田鶴

仏縁で広島に咲く蓮の花　米子市　新　正子

エプロンの白よろこびも悲しみも　兵庫県　倉垣　恵美

よく笑う妻で自分の口座持つ　大阪市　西出　楓楽

相槌を打ちたし風のささやきに　和歌山市　山川　克子

とても愚かに漬物石を捨てにゆく　高槻市　河瀬　芳子

止しましょう糸のもつれをほどくのは　島根県　松本　文子

月光に妻の衣を脱ぎ捨てる　倉吉市　市村　京子

坂の道息子の家も遠くなる　大阪市　鈴木　節子

長電話だから立聞きしたくなる　堺　市　高橋千万子

満腹感やさしい気持でいられそう　大阪市　島村美津子

いつかわたしの足で歩いてみたい月　和歌山市　田中　輝子

日の丸を見るとお辞儀したくなる　和歌山市　木本　朱夏

命日のお布施ははずみ粗衣粗食　羽曳野市　福田満洲子

夏の陽に焼かれて母と歩を合わす　和歌山市　桜井　千秀

ここだけの話一巡した早さ　和歌山市　福本　英子

お互いの過去は問わない蝶の群れ　米子市　林　瑞枝

花屋はバイオでおとぎ話はもう売らぬ　名古屋市　藤井　高子

かあちゃんを描けば漫画になってくる　和歌山市　内芝登志代

彦星と年を重ねてゆく安堵　西宮市　西口いわゑ

事なかれ主義で晴れ間がまだこない　八尾市　高杉　千歩

友達と戦う明日かも知れぬ　八尾市　宮西　弥生

ストレスがとれてつるつるする素肌　熊本市　岩切　康子
弁当に昨日の詫びも詰めました　岡山県　富坂　志重
ほどほどの願いですのでお星様　枚方市　森本　節子
町内の溝掃除する日曜日　姫路市　中塚　遊峰
小銭入ればかり膨らむ街の風　吹田市　茂見よ志子
離婚せよと言えばころっと仲直り　大阪市　山田　妙子
そう言えば飲みっぷりまで継ぐ息子　大阪市　上江洌勝子
排気ガス吹っ掛けられてペダル踏む　和歌山市　湯浅　由梨
無理したら知りませんよと脅かされ　堺市　神原　文
褒め言葉いつも上手に使われる　和歌山市　古久保和子
成りゆきを知る神様も酔うてはる　大阪市　津守　柳伸
それなりの顔を作ってハイヒール　弘前市　肥後和香子
国訛問うて世間の狭さ知る　大阪市　堀　いくの
遠来の鮎でクールにご挨拶　岡山県　土居ひでの
降ればふる降らねばふらぬ愚痴を言い　和歌山市　砂山千枝子
嘘のない指にビーズがよく似合う　鳥取県　羽津川公乃
芸のない女で媚を売り歩く　兵庫県　東浦　砥代
ひとり旅はこれから船を乗り換える　宝塚市　丸山よし津
風になって小さな花粉つけに行く　貝塚市　池田寿美子
墓遠く亡父母に許しを乞うている　米子市　光井　玲子
昼顔が流人の墓を囲んでる　静岡市　増田　ふみ
事なげに話して傷を庇ってる　大阪市　日阪　秋子
紫陽花も雨に飽きたか愚痴を言う　有田市　松井かなめ
若い芽の邪魔せぬように散っておく　米子市　石垣　花子
首の鈴猫も気ままになりました　大阪市　町田　達子

立ち直れそうなようやく梅雨明ける　和歌山市　堀畑　靖子
抜け目ない人でこけても唯起きず　和歌山市　田中　みね
熟年のお洒落にお金かかります　寝屋川市　岸野あやめ
花屋から和むこころを抱いてでる　米子市　金山　夕子
螢火よ千の想いが弧を描く　出雲市　石倉芙佐子
私の女ごころを釣りにくる　鳥取市　小谷美っ千
精霊舟いつか私も送られる　大阪市　神夏磯典子
気にかかる人から届く招待状　米子市　小村てい子
秋風が吹くと欠点見えてくる　倉吉市　青砥　菊枝
夏休み気分になってすだれ越し　吹田市　栗谷　春子
坂道を滝にしたよな今朝の雨　河内長野市　植村　喜代

ゴシックの一句目。夏祭りなどでよく見掛ける風鈴屋さんの、あの美しい音色で夏を敏感に感じ取っておられるのです。この人が詠った句であるだけになお心打たれます。二句目。赤いドレスは魂に着せると言う。女性であるだけに頷いてしまいます。三句目。螢のあかりを吐息と見た作者、なんと抒情的な一句でしょうか。四句目。古くて役に立たなくなった漬物石に、女は絆のようなものを感じるのです。捨てられぬと言い切ったところが、この作者の生き方だと思います。五句目。心の中のひと彩が失せてゆくとは、女性でないとできない句だと思いました。六句目。そう言われてみれば、お母さんというのはそんな存在なのですね。何時もみんなを見守るかたちで立っているのです。

◇

投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1―18―10
小出　智子（ハガキに3句）

初代川柳二百年忌記念

現代川柳作家

百人一句

〈全国の部〉

焼き捨てた手紙がとどく猛吹雪　斎藤大雄

考えている間に風邪の妻が起き　鈴木青柳

言葉のいらぬあたたかい握手する　越郷黙朗

子の家を廻り不遇を口にせず　宮本紗光

くちびるにゆきのあたたかさをのせる　高田寄生木

人間に疲れて犬と散歩する　藤沢岳豊

二世紀を柳悠々と太い幹　今野空白

風花の中のひとつがついて来る　大野風柳

極楽は酔って帰ってうちの風呂　野村圭佑

鶴を折る心に今は遠き修羅　佐藤正敏

人を恋う人があつまる冬の酒　渡邊蓮夫
モノクロのくろかみ黒くありしかな　尾藤三柳
夕映えて阿呆は今日も木にのぼる　岸本吟一
一〇〇〇冊の本一〇〇〇枚の皿恥多し　関水華
反米に今日は傾く輸出記事　志水剣人
いつ死ぬかだれも知らないから楽し　山田良行
くちづけのさんねんさきをみているか　渡辺和尾
耳に栓しても聞こえて来る挽歌　野口初枝
夜明けの水のこんなにうまいのちかな　北川絢一朗
旅がえりさてお茶漬を貰おうか　田中秀果
意地張ったのが生涯の別れ道　伊藤入仙
のたりのたりにくらげふんわり乗ってみる　西沢青二
ひとり旅きのうも今日も句碑に逢う　磯野いさむ
日本に頑張りますといい言葉　久保田以兆
まあそんなに言うなよ僕も日教組　亀山恭太
太陽が味方大手を振って生き　梶川雄次郎
風鐸にかぜがある日の法隆寺　片岡つとむ
八月の父の日記は白いまま　広瀬反省
おちこちに友あり心美しき　永田帆船
母にあいたくて風船売りになる　定金冬二

辞書の字に息を吹き込む詩人達　岩井三窓
ふり返ることをうながす夏の雲　森中恵美子
弟の下駄枕木を百越える　墨作二郎
母が死ぬまで母が死ぬとは思わない　中尾藻介
名を捨ててひとりの机一つの書　去来川巨城
一切を拒絶みどりのただ中で　小松原爽介
いつか欠けるわが掌ひたすら食べている　平山繁夫
姫りんご愛は数えるものでなし　卜部晴美
不意に愛男のような眉になる　時実新子
吉田山さまよう古い資本論　柴田午朗
砂ぼこり慈雨に叩かれ地に還る　大森風来子
茸山で茸を引かないのがおやじ　丸山弓削平
おもい出もちりぢり花もちりぢりに　寺尾俊平
よそ者の衿を白しと蓼の咲く　田中好啓
まぼろしをつかむおろかをつみかさね　石原伯峯
母よりもさびしい人に鶴を折る　海地大破
黒田節こがねの水のあるかぎり　安武九馬
めぐり来ては花咲いてみせ散ってみせ　池田可宵
戦後史にバナナ一房重すぎて　田口麦彦
少年に還る日はなし楠若葉　吉岡龍城

〈同人の部〉

清貧をつらぬく師父の詩心　西尾栞
人間嫌いな石仏にも逢う冬の道　阿萬萬的
想い出のひと多くみな月のなか　石曽根民郎
どの部屋も時計があって世智辛い　石川侃流洞
義理で逢う約束だった無人駅　板尾岳人
雨しとど身上ばなしきいてやる　岩本雀踊子
願以此功徳で居眠のけりがつき　上田翠光
ブランコへしばらく過去と揺れてみる　有働芳仙
玉露にも番茶にもなり苦労人　本田恵二朗
一家団欒の後新聞紙など　大坂形水
七夫婦揃うて美味し里の味　大矢十郎
拾いものしたと娘のムコを褒め　奥谷弘朗
振り返る刻一椀の水なりき　嘉数兆代賀
けちでよし気がよくてよし皆わが子　金井文秋
仲間からはずれたようにいる仲間　河井庸佑
あんたかてうちかて阿呆で仲直り　河内天笑
ふるさとの山河は母の膝に似る　川竹松風
人を見る眼鏡いくつも持っている　久家代仕男

炎天をテクテクと自嘲する　工藤甲吉
校門を出ると一年生走る　黒川紫香
許されて亡母とおんなじ眉をもつ　小出智子
海鳴りはシバの女王のむつ言か　小砂白汀
野仏に飢えた鴉が話しかけ　小西雄々
申請書明るい顔の方へ出し　小林由多香
フルムーン笑い袋を一つ持ち　児島与呂志
死火山と言われ炎を抱いて生き　清水一保
サンキスト再起不能の顔に塗る　菅井智水庵
これこそはロマン人体解剖図　谷垣史好
母の日の花は外国生まれなり　田口虹汀
裏切りの話はしない手話仲間　辻白渓子
庭石にすえると見える裏表　恒松叮紅
河は流れて昨日のことは語らない　月原宵明
還らない戦友へ岬の風が哭く　遠山可住
しあわせを母のいびきの横で知り　東野大八
ヒスイのごと澄める心を探しあぐむ　中島小石
ちょぼちょぼの見栄張り合うて仲がよい　西田柳宏子
合掌のなかに千尋の海がある　西山幸
次の世紀も人間であれ同胞よ　野村太茂津

どこの子がいじめた蟹の片鋏み　波多野五楽庵
歯車の自分の位置を疑わず　濱野奇童
悲しみを抱けば海も悲しんで　弘津柳慶
春ひらく老いの泉も少し湧く　藤井明朗
沢庵石に母の歴史と愛が染む　藤村〆女
足袋少しきつく女は旅に出る　正本水客
この夫に草書のかすれがちと欲しい　松川杜的
生々流転一片の命知る　水粉千翁
前略で悪友たちがやってくる　宮口笛生
今嘘を書けばきのうも嘘になる　八木千代
よく人が来る日と思う妻の留守　山内静水
芽を出せばこころよい風荒い風　米澤暁明

あなたの作句の伴侶に！

作句・入選記録帳

一九八九年（平成元年）七月（第一版）発行
A5判・九十六ページ・頒価三百五十円
送料二百十円・三冊まで二百六十円・六冊まで
三百十円（一括注文は送料が割安。下記へご連絡下さい）

作製・発行　まいにち川柳友の会
（事務局）
〒537　大阪市東成区中本三―七―一
郵便振替　大阪　四―九二三〇五
電話　（〇六）九七一―一〇三〇

牛

宮口笛生選

保母さんも園児も牛が珍しい　はるお
草を食む長閑な牛が絵にもなる　多賀子
こって牛横綱らしく脇見せず　古都路
送り出す牛に家族が歩を合わせ　和子
姿など気にせず雌牛よく食べる　艶子
見送れば牛が一声泣いてゆき　博友
牛の糞重宝にする近代農　康子
風格の出た住吉の田植牛　やすお
耕耘機昔は牛が啼いた小屋　重人
忍従の牛の涎が途切れない　正敏
農政の無策に牛の胃がちぢみ　四郎
過疎守る牛が静かに草を食む　文平
高原の牛にストレスなどは無い　倫子
行く先は屠殺と知らず牛の群れ　文
ベコ誕生家族の弾む今朝の声　テル
人間の勝手で牛の乳しぼる　不二
難産の牛に力を貸す夜なべ　劔
牛車往く祭が残る京の街　圭坊
人間のエゴへ闘牛哀しい瞳　鉄治
放牧の牛は自由化関知せず　蕗児
牛を売る話をそばで牛も聞き　大柏
ハイカラなホルスタインの縞模様　豊
受けついだ美田に牛の足の跡　裕美
還暦も近し牛歩に切り替える　高子
ご無沙汰の便り生れた牛にふれ　白渓子
新しい生命へ弾む牛舎の灯　浪速子
拗ねている牛は岩よりまだ重い　伊津志
牛曳いて苫屋へ帰る過疎の暮れ　枯梢
霜降りの和牛に挑む輸入肉　白峰
牛の声欲求不満聞いてやる　秋人
牽牛と織女の恋に少し妬く　洛酔
自由化に追い詰められている和牛　正坊
袖の下牛と別れる値が決まる　宵明
放牧の牛も一役子の写生　喜一郎
牛と言うニックネームで信じられ　木魚
走らない牛に愚かな鞭を打つ　保州
牛追って家計助けた半世紀　哲静
佳
牧場の牛はいつでも食べている　笑風
牛も家族土に生きてる父の朝　雀踊子
牛売りに行かねばならぬ鬼の面　美代子
放牧の悠々自適牛の群れ　正子
牛の背に夕陽が落ちる童べ唄　可住
人
銅像で天神さんに牛仕え　兼治郎
地
眼裏に牛追う父の絵が消えぬ　元江
天
売られゆく牛は一度も振り向かぬ　雄々
軸
牛の糞あの頃畑も肥えていた

謝る

松本今日子選

謝って晴れ晴れとした朝にする　緑良
謝りに行くのに化粧をする女　白渓子
弟の謝罪美人の姉が来る　清芳
失言を謝る妻を信じきる　博友
関白を謝らせたは妻の髭　高子
謝って開き直ってくる女　宵明
謝って済みそうもない女文字　一進
結婚以来まだ謝ったことがない　あやめ
謝っているのはいつも男だろう　可住
心ではいつも家内に詫びている　白光子
謝った涙に綺麗な虹がある　青銅
謝れば鬼が仏に変るのに　章久
ゴメンネが素直に言える子に育ち　悠泉
雑草に謝りながら畑打ち　三和
叱責へ殊勝に揃えた膝小僧　寿美
謝ってぼちぼち溶けるわだかまり　重人
職かけて書く新聞の謝罪記事　史風
友達の謝罪について行ってやる　はるお
心では謝っている天の邪鬼　美代子
謝る気あるのに殻を閉じたまま　高夫
両方が謝っていて恙なし　佳雲
本心を吐いて謝る羽目にあい　秀峰

謝りに行く子に止んだ通り雨　劦
謝りの証頭を丸く剃り　素身郎
謝ると他人の善意がよくわかり　笑風
捕えたバッタ謝る素振りする　朴竜
謝りの会釈上座の席につき　吟平
謝って来た少年の足音だ　雀踊子
謝りに行った帰りの千鳥足　鉄治
謝って殿様蛙はひれ伏せる　枯梢
謝りの電話に頭深く下げ　ふさ子
金一封包めば謝り易くする　繁男
謝りを知らない蟻が列乱す　秋人
謝る背残し汽笛の遠ざかる　洛酔
謝って済むものでなし国が病む　元江
土下座して謝っているあぶら汗　豊
土下座して謝っている猿芝居　遊峰
佳

謝ってしまうとお茶が旨くなる　文平
指切りのほかに謝る指がある　保州
友情の助言謝罪すると決め　軒太楼
謝った顔が羅漢の中にいる　雄々
謝って来るだろそわそわ待っている　どんたく
人

価値観の違い謝るとこがない　三五島
地

お互いに謝る時期を待っている　輝子
天

謝っておけと背中をつつかれる　新造
軸

謝りが上手な人で憎めない

ブラシ

神平狂虎選

女坂こころのブラシ離さない　笑風
ブラッシング昨日の縺れまだ解けず　喜一郎
靴ブラシ目出たい日だと知っている　白渓子
夢作るブラシは白の方が良い　洛酔
死ぬるまで世話になります歯を磨く　ふさ子
靴ブラシ何かよい事あるテンポ　浪速子
へアブラシ女の業がからみつく　元江
明日逢える嬉しい髪を梳くブラシ　辰江
毎朝のブラシがこわくなってきた　小鹿
裸から男育てた靴ブラシ　虹汀
男の部屋で海の話をするブラシ　輝子
払ってもブラシについてくる噂　保州
嘘ひとつこころにブラシかけ忘れ　砥代
歯ブラシが馴染んですこし気を許す　美代子
夏色にブラシをかけておさげ髪　青銅
千々に乱れた心にブラシかけてやる　枯梢
歯ブラシに朝の心を覗かれる　静歩
父用のブラシに父の名前書く　可住
それぞれのブラシ女の顔にする　宵明
歯ブラシの水切り愚痴を噛みしめる　悦子
くつブラシ今日も契約ゼロだった　史風
ブラシかけ落ちないほこり持つ男　一枝
良い嫁に恵まれました靴ブラシ　あやめ
対決の恋はゆずれぬ眉ブラシ　さと美
くたびれた背広ブラシが佗しがる　寿美
女の戦ブラシで武装整える　玉恵
捨てられた歯ブラシ今日も彼を待ち　旋風
母の手の愛はブラシにこめてあり　軒太楼
裏切りの背広にブラシする無念　みね
歯ブラシに今朝の機嫌を見ぬかれる　不二
靴ブラシ妻のリズムに唄い出す　保夫
そんな時ボディブラシで今日を消す　高子
定年の真近い靴にブラシする　遊峰
デートする弾みがわかる靴ブラシ　大柏
ブラッシングすれば甘える長い髪　信義
手ごたえも空しく秋のへアブラシ　正敏
真すぐに生きてく父の靴ブラシ　雀踊子
佳

軟弱な若さブラシが手離せぬ　緑良
歯ブラシへ朝から謀り事がある　雄々
ブラシでは消せぬ女の悔いがある　文平
忘れたい話へブラシ届かない　博友
歯ブラシがせわしく動く戦だな　重人
人

過去は過去洋服ブラシをかける　螢
地

骨董屋ブラシを抱いて病んでいる　和子
天

一本のブラシでおとこ赤になる　三五島
軸

街は灰色ブラシも遠い旅に出る

初歩教室

題 ― 月

阿萬 萬的

九月号掲載ということで「月」を課題としましたが、本当の月ではなく、こんな句がありました。これは邪道ですね。

へそくりに少し残して月の末　君江
（月の末へそくり位は残ってい）

月決めでタライ回しに親の世話　サワ子
月並な手紙が届き母元気　和子
（月並みだけれどかあさんから便り）

歳月はいつしか欠点子にうつし　三千子
（歳月とともに息子が僕に似て）

月下美人一夜の夢に燃えつくし　一枝
会わぬ人つい気にかかる月参り　太一郎
（会わなくなったひと気にかかる月詣り）

月給を運んだ蟻の走馬灯　昭治
では、本当のお月さまの句を。お月さまはとかく私たちを感傷的にさせ、こんな句が…。

私をハイと言わせた月の夜　菊枝
二度とないチャンスをくれた朧月　みね

朧月誘惑を待つ橋に来る　つえ子
月に雲不倫の女揺れつづく　美代子
ぬけぬけと嘘言ってると月笑う　好笑
月明りあなたの嘘におびえてる　芳水
（あなたの嘘にあっさり負けた月明り）

何事もなかったデート月は知る　一枝
朧月くぐり戸開けたを知っている　由梨
思い出し笑いをしてる昼の月　富恵
だが、老夫婦の月の夜道はほほえましく

タクシーやめ妻と満月見て帰る　保夫
手をつなぐ白髪を月も笑ってる　艶子
老夫婦夜道で唱う朧月　喜代子
（老夫婦を若い気にさす朧月）

ともあれ、月は故郷や遠い昔を思い出させます。

花一輪月の窓辺に故郷想う　トキ
（月明り窓辺に遠い故郷想う）

ふるさとの深山は月に兎棲む　すみれ
（ふる里の月には今も棲む兎）

月見れば古里恋しい涙出る　幟
わけもなく月にひかれたのも昔　つえ子
お月見を遠い思い出にしてしまう　光子
（ふる里を思い出します十三夜）

山中鹿之助じゃないが、
月に祈る武将の名言口ずさむ　保夫
松が枝に三日月さまが引っかかり　信一
（松に月古城どこかで詩を吟じ）

また、月の出は踊りの輪を盛り立てて
月が出てあるくなった踊りの輪　喜与志
月明り腰の団扇が踊る輪に　光子
（腰に団扇月の浜辺に踊りの輪）

月光にキャンプファイア盛り上る　太一郎
お月さまが暈をかぶると
月の暈今夜も眠れそうにない　円女
大安の明日を占う月の暈　照子
テルテル坊主願い届かぬ月の暈　三千子
（月の暈テルテル坊主も淋しそう）

だが、人間様のエゴか、科学者達のエゴか
人踏んでロマンの消えた月世界　圭坊
人踏んだ月に祈りの気が起きず　呼風
（月面着陸月のロマンをぶち毀す）

今はもう月では餅は搗いとらず　露芳
でも人々の希望は、なお
ロケットが飛んでもロマン消えぬ月　時弘
かぐや姫迎えに来そうな月の冴え　サワ子
月にまで届いてならないフロンガス　三津江
フロンガスお月さままでいじめずに　ひさ子
お月様と旅し、そして京の句もありました。
満月を山の間に見た旅憶う　登代
ひさびさの湯の旅や山の月　遊峰
（山の湯の旅できれいな月を見る）

送り火が月押し戻す京の夜　章久

加茂の床月と水とが興を添え　しんじ
（加茂の床月まんまるい東山）
過去の人たちを想い出させるものにも月が　かつみ
母逝きて月の丸さもまたさみし　とく子
名月に話しかけます亡母偲び　ミツエ
月に語り亡夫偲べば目がうるむ　志華子
盆の月夫の墓石も丸く映え　静子
月に出て遠い娘の幸祈る　信義
単身赴任地や病窓で見る月はひとしおに　宏安
膝小僧抱いて見上げた街の月　しづ子
月影かネオンの影か単赴任　美代子
（単身赴任わびしいものに窓の月）
妹を見舞って帰る宵月夜　清柳
病窓にまるい月見る幸がある　ちず子
（病窓の孤独へ月がまんまるい）
帰り道の月影はいろいろの事を思わせて　美子
言い勝って自惚れ月に諭される　富恵
満月に貧しき心見透かされ　みね
傲慢な態度を諭す丸い月　一乗
モヤモヤを隠し切れない星月夜　呼風
千鳥足月を相手に愚痴を言い　治
和解して月皓々と冴え渡り　喜与志
（和解して月の明るい道帰る）
帰り道にも、こんなのがありました。
ようやったと月が賞めてる塾帰り　明吉
（塾帰りへ今夜も月が美しい）

棚卸し遅い帰りに冬の月　治
いい一日だったと月へ語る帰路　敬
代田掻き戻りは月の道帰る）
そして月は、私たちに何かを教えてくれたり、また、黙って愚痴や悩みを聞いてくれるようです。
損得を捨てて生きよと円い月　芙美子
月明り無にかえってる独り居る　艶子
（明鏡止水無に還れとか月が照る）
傷心へ満月味方してくれる　好笑
いさかいし話聞いてとお月さま　義
（淋しいのお話聞いてよお月さま）
母の愚痴聞きあきたのか朧月　小鹿
うっかりと愚痴出てしまう月の夜　三津江
月に話してストレスが軽くなり
（月と話してストレスちょっぴり軽くなり）
では最後は、もろもろの月の句を　美子
月影で鈴虫の音をじっと聞く　隆雄
（月の出へ鈴虫すだく庭となる）
ボソボソと犬と月影踏んでいる　雅子
（月影の散歩仔犬がついて来る）
月天心閉山の煙突照らしてる　勝美
（閉山の煙突へ月皓々と）
閑人が今日も見つけた昼の月
（閑人が見つけた白い昼の月）

月明り見て寝転べば骨の音　治
上五〝月明り〟を〝窓の月〟としてみては。でも年をとるということは、ちょっぴり淋しいですね。
立哨の影法師長く夢はさめ　明吉
（立哨の影長くして月の夢）
お月様が歓声見下すホームラン　勝美
月を見て金色夜叉とは齢が知れ　金吾
薄月夜影法師もなく一人行く　信一
月あかり思う事あり指を折る　和子
お月さんやっぱり辞表を書きました　ダン吉
嬰児は月へにぎにぎして見せる　繁男
月明りに誰かが忘れた縫いぐるみ　由梨
これで終りますが、川柳とは生活の詩ですから、ありのままを言っただけでは句にいのちがあるとは言えません。こういうことを考えながら、よい句を作ってください。

◇

昭和六十年四月から四年余にわたり、「初歩教室」を担当してまいりましたが、次回から辻白渓子氏へバトンタッチすることとなりました。長年のご厚情にお礼申し上げます。

阿萬　萬的

題「**地　味**」　**9月10日締切**（11月号発表）
宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3—19
ハガキに**3句**以内　辻　白渓子

第4回 川柳塔勉強会

●7月9日―11日

●松山―道後温泉―琴平

小池しげお

七月九日、西尾栞主幹の叙勲記念川柳大会を盛会裡に終って、会場なにわ会館のロビーに集合した一行は、勉強会に出発しました。

近鉄上六からJR大阪駅を経由、芦屋駅からバスで東神戸青木港に到着、ここから船で松山に行くことになります。船は船主ご自慢の豪華船、庭付きの風呂もあって、一同、至極ご満悦。笛生さんはじめお酒好きの面々の四方山話が十日に時計の針が回る頃まで続き、紫香さんの川柳談義を聞いたような気もするが、祝宴でのお酒と船の売店の生ビールが効いたのか、すっかり忘れてしまいました。

船は今治港を経て松山観光港に十日午前八時半着、観光バスの愛想のよいガイドさんに出迎えられて一行は、車中の人となりました。松山市内観光は、伊予かすりの創始者、鍵谷カナさんの胸像がある民芸伊予かすり会館、「おたた」三人娘が迎えてくれた子規堂を見学しました。正岡子規の生家を縁者の記憶にもとづいて復原、菩提寺の境内に建てたということです。

隣の墓地には、高浜虚子の筆塚、正岡子規のお墓と並んで内藤鳴雪の顔を刻んだ墓碑がしっかり勉強しなさいと、こちらを向いて建っていました。三人は俳句のご三家として有名です。虚子の筆塚には筆の毛、子規の碑には頭の毛、鳴雪の碑にはあごひげの毛を埋めてあり、ご三家（毛）をより有名にしているとは、ガイドさんの話でした。ここで坊ちゃん電車の本物に我々大正・明治の坊ちゃんやマドンナが乗ってうれしそうな童顔でカメラに納まりました。そして次に焼物の里砥部で窯元を見学、「ホホー、ホオー」と言いながら何も買わずに見て回りました。

昼食を松山城の下で済ませ、お城へ登りました。ロープウエーとリフトがあって、どれに乗っても運賃は同じ。そこから城まではすぐで、十五万石の松山城は少し暑かったが、松山はさすが俳句の町で、至る所に俳句ポストと側に投句用紙があり、優秀句を掲示してあって、さすがだなあと感心しながら、殿様気分で櫓上から松山市内を見下しました。

城から降りて四国八十八ヵ所の内、五十一番札所の石手寺へ参りました。境内の前田伍健の句碑を読み、衛門三郎玉の石の話や石手寺の由緒を見聞し、線香の煙で悪い所を治せると聞き、我々は頭、ご婦人方は特に顔をなで回していましたが、他は効いてもそこだけは駄目とのお告げに、お賽銭はどうしたか忘れました。

午後三時半前、道後温泉は古湧園に着きました。今治から月原宵明さんと矢野佳雲さん西条から片上明水さんの出迎えをうけ、旅の疲れもどこへやら、温い握手がとてもなごやかでした。

勉強会の出句は四時半締切り、ひと風呂浴びた人もいて総勢二十五人、今治の野村京子さんも来られました。各題秀句と参加者の一人一句を文末に掲げましたが、紫香さんのあいさつにあった地方の方々との交流とコミュニケーションを計る目的は十分に果たせたのではないかと思います。

懇親会は大広間で六時から始まり、出席者の紹介やらPR、宵明さんの歓迎の言葉やご馳走の酒肴、カラオケ、ダンスと時間の経つのも忘れて盛り上りました。風呂好きは三回も四回も道後の湯に浸り、坊ちゃんの湯（神之湯）へ出かけた人もありました。四回入れば死ぬまで長生きできるそうです。

いよいよ最終日の十一日は、九日からずっとご一緒の赤川菊野さんと別れ、宵明さんに見送られて最終コースに出かけました。西条の明水さんから車中、西条祭りのだんじり、新居浜祭の太鼓台、この祭りは盆正月に帰郷せずとも、祭りには帰るので、町の人口が一躍倍になるとか、いろいろな話を聞きながら・ていれぎの里で打抜き湧水を呑んで一服したり、石槌神社を右に拝んだり、カラオケを唄ったり聞いたりして、観音寺経由で昼前に琴平へ着きました。

勉強会参加の一行

琴平では昼食後、金比羅さんへお参りしました。全員ではありませんが、七百六十五段の石段を往復して踏破し、森の石松が納めた刀はどこにあるのかなあと思いながら汗をかきました。

バスは世界一の瀬戸大橋にさしかかり、与島で降り、咸臨丸を見ながらフィッシュマンフーズで休憩、この売店は一日平均三千五百

勉強会の皆さんをお迎えして

月原宵明

昭和五十四年五月中旬、「新緑の四国路へ」と栞主幹以下川柳塔の幹部四十数名が道後温泉で句会と懇親会を開いてから十年後のこの日、黒川副主幹以下、中堅幹部一同が西尾主幹の叙勲記念川柳大会終了後、海路「第四回川柳塔勉強会」に来県されたことは、不思議な因縁であると言える。

地元我々四名は、午後三時に到着する一行をホテル古湧園でお迎えし、入浴・少憩の後、「勉強句会」を開き、それぞれの選者から入選句の発表を行った。

川柳塔の披講は二度読みで、初めが作者の呼名、二回目が確認の呼名である。愛媛県では二度読みではあるが、二回目に作者呼名、さらに確認呼名と続き、句の鑑賞を誘う余裕ある披講であって、いささか違う点がある。

自己紹介合点ばっかりして終り

初対面も十年の知己の如く、懇親会は実に和やかで時間の経つのも知らないくらいだった。

二十一名の皆さんは、川柳人として尊敬できるし、人間としてお付合いできる人ばかりだと短い時間ではあったが、直感した。そしてこの人たちがいる限り「川柳塔万歳」であると太鼓判を押します。

勉強会に参加して

吉岡　きみえ

この度の勉強会に参加させていただき、ほんとうにたのしい思い出になりました。船の旅、バスの旅、道後での勉強句会、そして憩い、ご当地の方々との交流ふれあい、みんなすばらしい旅の一頁でした。

川柳はふれあいだとの太茂津先生のお言葉、ほんとうにそのひとことにつきるものと思うわたしでございます。

田舎者の私ども、とかく引っ込み思案ばかりになります。今度の勉強会に参加してつくづく思うものでした。今後は機会ある度にどしどし押しかけて行き、ふれあいをもとめ、ひとりでも多くの方とふれあいを大切にしたいものと願うものでございます。スナップ写真もたくさん撮りました。写真をながめてたのしかったことを思い出してゆくことでしょう。お世話いただきました紫香先生初め、白渓子様、正坊様、しげお様、諸先生方にはひと方ならぬお世話いただきましたことを感謝申し上げ、ペンを置きます。ありがとうございました。

万円の売上げがあるというバスガイドの話。瀬戸大橋を渡ると、岡山に入ります。鷲羽山の景色を保つためトンネルにしたらしく、道路と鉄道にそれぞれ上下線、計四つの穴が山の中に抜かれていました。岡山駅で解散式を簡単にやって(結成式は何やかやでやらず)松江の鶴丸さん、出雲の文子さん、きみえさん、多賀子さんとお別れして大阪方面へ帰りました。

皆さんほんとうに有難うございました。これにこりず、柳友をお誘いして川柳塔勉強会に参加しましょう。

〈秀句〉

題「坊ちゃん」　辻　白渓子　選

坊ちゃんに女は恐いと教えとく　よし津

題「船」　野村太茂津　選

未練断つ霧笛が長く長く鳴る　三男

題「嘱目吟」　稲葉　冬葉　選

マドンナが初夏を匂わす伊予がすり　宵明

◇

子規に逢い坊ちゃんに逢う道後の湯　佳雲

ドラの音が港おんなを又泣かす　京子

坊ちゃんが古い書架から飛び出した　文子

坊ちゃん列車から寝不足の顔を出す　杜的

玉の湯ののれん坊ちゃん出て来そう　明水

坊ちゃんの初版が書架で仮眠する　多賀子

タイプではない坊ちゃんに見染められ　白渓子

逝く時は亡夫が迎えの豪華船　菊野

出航を待つ間へ交わす国訛り　芳子

船からも手を振り島でする別れ　紫香

松山の湯で坊ちゃんになりすます　射月芳

だまし船母は知りつつ乗ってやり　正坊

家事みんな忘れて船の人となる　冬葉

赤道直下で破船どっこい生きている　太茂津

坊ちゃん列車元機関士の旅の友　和友

石手寺で大師の慈悲に触れてくる　英子

松山の街もうるさい選挙戦　鶴丸

伊予かすり高嶺に財布ままならず　きみえ

わかったかナモシナモシで眠らせず　しげお

伊予かすり財布の底がおちつかず　静歩

天守閣で昔の風と会うてくる　美智子

ロープウエーで登りリフトで降りる城　笛生

川柳塔用箋（一冊二〇〇円）
送料が変わりました。
一冊二五〇円・二～三冊　三六〇円
※数量がまとまれば、「ゆうパック」にする方が大分、お得です。

〈東京 芸風書院・刊〉

現代川柳選集（全5巻）

体装　四六判　上製本（ハードカバー）
約二〇八頁

このたび日本川柳協会のご協力を得て現代川柳選集（全5巻）を刊行いたしました。左記執筆者の代表作各90句および作者のことばを収録しております。

〝全5巻をぜひあなたの書架へ〟

申込受付中！

特価　一冊　一、五〇〇円（送料共）
何巻を何冊とはがきでお申込みください。

〈申込先〉川柳塔社

現代川柳選集　執筆者一覧

第一巻（北海道　東北　東京篇）

越郷　黙朗（北海道）
斉藤　大雄（北海道）
宮本　紗光（青森）
猿田　寒坊（秋田）
高橋　春造（岩手）
片倉　沢心（山形）
菅原　一宇（宮城）
今野　空白（福島）
佐藤　良子（福島）
佐藤　正敏（東京）
神田　仙之助（東京）
竹本　瓢太郎（東京）
多伊良　天南（東京）
成田　弧舟（東京）
野村　圭佑（東京）
野谷　竹治（東京）
尾藤　三柳（東京）
山本　宍道郎（東京）
脇屋　川柳（東京）
渡邊　蓮夫（東京）

第二巻（関東　北陸篇）

川俣　喜猿（栃木）
白井　花戦（千葉）
西村　在我（千葉）
堀口　北斗（埼玉）
山崎　涼史（埼玉）
篠崎　堅太郎（埼玉）
大木　俊秀（神奈川）
岸本　吟一（神奈川）
坂本　一胡（神奈川）
志水　剣人（神奈川）
関　水華（神奈川）
大野　風柳（新潟）
田向　秀史（富山）
脇坂　正夢（富山）
酒井　路也（石川）
中谷　道子（石川）
細川　聖夜（石川）
前田　義風（石川）
森本　清子（石川）
山田　良行（石川）

第三巻（中部　近畿　四国篇）

小林　一声（山梨）
藤原　時化緒（静岡）
石曽根　民郎（長野）
佐藤　曙光（長野）
山崎　鮮紅（長野）
野口　初枝（岐阜）
東野　大八（岐阜）
青木　晴嵐（愛知）
加藤　翠谷（愛知）
鈴木　可香（愛知）
丹羽　麦舟（愛知）
鈴木　如仙（愛知）
矢須岡　信（三重）
桶屋　鳴味（福井）
玉野　可川人（京都）
保木　寿（京都）
仲川　たけし（愛媛）
森　紫苑荘（愛媛）
福田　白影（徳島）
宮本　時彦（高知）

第四巻（関西篇）

亀山　恭太（大阪）
西田　柳宏子（大阪）
広瀬　反省（大阪）
磯野　いさむ（大阪）
橘高　薫風（大阪）
永田　帆船（大阪）
久保田　以兆（大阪）
山本　翠公（大阪）
西尾　栞（大阪）
梶川　雄次郎（大阪）
森中　恵美子（大阪）
岩井　三窓（大阪）
定金　冬二（大阪）
片岡　つとむ（奈良）
野村　太茂津（和歌山）
奥田　白虎（兵庫）
黒川　紫香（兵庫）
小松原　爽介（兵庫）
去来川　巨城（兵庫）
時実　新子（兵庫）

第五巻（中国　九州篇）

八木　千代（鳥取）
小林　由多香（鳥取）
柴田　午朗（島根）
本庄　快哉（島根）
大森　風来子（岡山）
田中　好啓（岡山）
寺尾　俊平（岡山）
石原　白峯（広島）
岡田　恵方（山口）
森本　医昌（福岡）
樋口　祐海（福岡）
藤田　きよし（福岡）
池田　可宵（長崎）
田口　麦彦（熊本）
吉岡　竜城（熊本）
尾花　白風（大分）
園田　蓬春（大分）
堤　八郎（大分）
田中　伯（宮崎）
虎頭　民雄（鹿児島）

高鷲亜鈍追悼
本社 八月句会

八月七日(月) 午後六時
メンズファッションセンター

八月は、去る四月に逝去された高鷲亜鈍氏追悼の句会で、はじめに令息の藤村亜成氏から謝辞が述べられ、亜鈍の評伝などを収録した小冊子が参会者に配られた。

おはなしは黒川紫香氏。『白黒記』の中の「春風をXに斬る白い杖」「失明のつらさにあらず詩の苦悩」などの句を紹介しながら、頭が鋭く、豪放で面倒見が良かった亡き人の面影を語った。

初出席は山田千海(大阪市)樫尾英輔(芦屋市)の両氏。月間賞は宮口笛生氏で、各題の秀句には亜鈍氏が寄贈し、毎月、ねやがわ句会でL賞に授与されるメダルが贈られた。

(進行—天笑) (受付—年代・芳子ほか)
(記録—射月芳・月子) (清記—楓楽)

出席者—悦郎・満津子・典子・美幸・悟郎・柳宏子・紫香・美智子・利武・勝美・喜風・作二郎・房子・章久・狸村・冬葉・正坊・憲太郎・凡九郎・笛生・重人・潔・芳子・諷云児・白渓子・杜的・小林英子・いわゑ・みつ子・柳影・柳伸・楓楽・射月芳・亜成・敏・智子・武庫坊・年代・八斗酥・東雲・たず子・天笑・白洋・仙吉・恭昌・すすむ・佳秋・しげお・ダン吉・千秀・文秋・小路・萬的・幸史好・英壬子・山久・英輔・柳太郎・千海・元紀・寿美・片上英一・鬼遊・金太・藤子・愛論・吸江・昭子・美代子・庸佑・三男・寿子・度・美津留・太茂津・頂留子・雀踊子・形水・月子・一二三・栞・岳人・吐来

席題「宝」 大路美幸選

隠し場所困って捨てる宝物 東雲
僕にない宝をあなたは持っている 失名
亡き父母を宝に今も胸に持ち 悦郎
子は宝だよと苦労も授けられ 文秋
絵日記の母が私の宝物 杜的
無法松宝は胸に秘めて逝き 潔
友情の宝に勝るものはない 藤子
だまし舟になるかも知れぬ宝舟 楓楽
大都会宝探しに憧れる 典子
宝からお釣が欲しい子沢山 小路
健康が宝貧しさ口にせず 柳太郎
宝などないが我が家の笑い声 美代子
僕の宝そっと日記に眠ってる ダン吉
血でかいた宝船をば持っている 仙吉
にせと知るまでは宝と思うてた 文秋
老母の宝が出世したまま寄りつかぬ 芳子
よく食べる宝只今反抗期 重人
軍事便亡父を偲んでいる宝 憲太郎
お宝はアンタの持ってる心だよ 凡九郎
最高の宝が弾む肩車 愛論
少年の日ははるかなり宝島 正坊
子に残す宝は美田と限らない 八斗酥
端布とりどり母の宝の小引出し たず子
出世はせなんだが正直という宝 射月芳
我が家には宝はないが妻がいる 吸江
形見分け親の宝へ子がもめる 利武
宝冠が古墳の栄華物語る 萬的
子宝を持て余してる共稼ぎ 八斗酥
宝石箱に宝石がある冷酷に 作二郎
宝石はないが働く指がある 柳伸
宝物抱いて王様孤独なり 佳秋
金で買う宝は屹度倦きがくる 白渓子
税務署も知らない宝持っている 諷云児
いつの世の宝も許す草枕 元紀
父の写真が宝で冬がまだ匂う 作二郎
子宝を昔言葉にせぬように 凡九郎
花嫁が宝船から降りてくる 天笑
亡父だけの宝を粗大ゴミで出す 美幸

席題「呼ぶ」 久保田元紀選

ヒロシマのドームは雲を呼びつづけ 天笑
甲子園息子よ応援聞こえたか 東雲
旧姓で呼んで呼ばれて同窓会 杜的
マドンナはまだまだ人気呼ぶだろう 藤子
呼び戻すことが出来るか三人衆 勝美

迎え火を焚いて静かに亡父を呼ぶ　智　子
亡き人を呼ぶ八月の風の音　八斗酥
助け呼ぶ声颱風に流される　柳宏子
助け呼ぶSOSも空と消え　頂留子
白樺のSOSが呼んでいる　鬼　遊
山男山の呼ぶ声しかと聞く　楓　楽
阿呆らしいポケットベルに監視され　笛　生
新婚の夫へ甘い声が呼ぶ　利　武
少年は絶えず未来を呼んでいる　美智子
妻が呼ぶ二死満塁へ生返事　典　子
呼鈴をためらっている請求書　典　子
あかね雲あなたの名前呼んでみる　いわゑ
飛行雲母を呼びたい気にさせる　いわゑ
呼ばれたから返事をしただけョ　凡九郎
坂の途中で優しい鬼が呼び止める　芳　子
何かあるトンガリ声で妻が呼ぶ　潔
走り続けて哀しくなると亡母を呼ぶ　芳　子
アイドルの名を呼ぶ頭空にして　八斗酥
悪魔が呼ぶとすぐに返事をする私　楓　楽
久方の逢瀬にポケットベルが鳴る　たず子
電話では軽く呼ばれている部長　利　武
悪友は呼ばずに揃うネオン街　柳　伸
託児所で児が呼んでいる乳が張る　満津子
不器用な声で呼ぶのは過疎の母　美　幸
鈴を鳴らして神さまを呼びつける　芳　子
雲を呼ぶ雲は花柘榴を越える　作二郎
八合目の花が呼んでるから登る　天　笑
歯が抜けた私を呼びにくるカラオケの友　冬　葉
君を呼び止める帽子屋のウインドウ　天　笑
仕掛花火の闇に呼ばれたことがある　作二郎
大声で呼ぶからみんな振り返る　庸　佑
あんな人呼ぶから酒がまずくなる　諷云児
日曜の私を妻が呼びすぎる　重　人
呼ばれないうちに謝ることにする　美代子
まだ呼んでないのに診察室覗く　白渓子
楡の木も陽炎も呼ぶ夏の午後　元　紀

兼題「報いる」　津守柳伸選

かあさんに報いる私の肩たたき　勝　晴
激辛のカレーで一矢報いとく　千　秀
当然の報いと知った失語症　敬
一票でせめて報いた消費税　射月芳
報恩の集いへ仏陀も笑み給う　繁　男
席譲る善意を笑みで報いられ　どんたく
祈りなさい報われますと神父さん　すすむ
先生に報いる一句追いつづけ　天　笑
本当の友情報い考えず　柳　影
予期しない報いへ善人うろたえる　白渓子
背信の報いはすぐにやってくる　潔
日々好日先祖に報いるよう生きる　房　子
報恩や千羽の鶴を折っている　いわゑ
報われぬは承知で尽す無法松　潔
孝行の旅に青空ついてくる　英壬子
夕顔は報いてくれる咲いている　荒　介
八月の麦藁帽は報われぬ　藤　子
飽食の報いが怖い父の背　杜　的
有難うお蔭でこないなりました　凡九郎
せめてもの報い仏の花替える　杜　的
抜擢の椅子で数字をまた伸ばし　柳太郎
鳴きやまぬ蟬に一矢を報わねば　作二郎
人生の流れの中にある報い　美智子
報恩へちょっぴり背伸びした供花　吐　来
この恩に報いるために渡る橋　幸
愛に報いる愛の言葉を磨いてる　武庫坊
最高の笑顔であなたありがとう　重　人
働けば報いてくれる地の恵み　正　坊
雑兵も明るい妻に報われる　美代子
仏様の慈悲に報いる善を積み　文　秋
炎天に被爆者名簿報われず　作二郎
幸せに報いる鍋を光らせる　楓　楽
報われぬままの女で風になる　雀踊子
礼状が来て善行の主が知れ　柳太郎
旅の恥捨てた報いが出始める　射月芳
報恩へ川の流れが早くなる　美智子
仏飯の向うへ祈るよい報い　美　幸
年金がそこそこ老後報いられ　笛　生
ささやかな真心赤い羽根を買う　柳宏子
太陽にきっと報いる花の種　楓　楽
さわやかな風に報いる曼珠沙華　柳　伸

兼題「たしか」　塩満敏選

原爆忌めぐる平和たしかにするために　楓　楽
ヒロシマの記憶たしかに引き継ごう　金　太
そうめん鉢に向かうたしかな夏である　作二郎
生きているたしかな暑中見舞状　妻　子
消費税の釣銭だから確かめる　杜　的
大ジョッキ干してたしかに生きている　智　子

ひまわりのたしかな呼吸見て夏だ　冬葉
手ごたえはたしか西瓜の音がよい　金太
たしか乗せた女がいないバックミラー　小林英子
ゆうれいはたしかに井戸に飢えている　元紀
愛確かいつも定時のラブコール　白洋
たしかな答ほしくて彼を怒らせる　藤子
目立つのはたしかだ式を急がねば　昭子
愛は確かでウェディングベルが鳴る　荒介
祭壇の誓いたしかにリングはめ　どんたく
ふたりの愛たしかに育つ岩田帯　寿美
風雪へ漕ぎ出す呱々の声たしか　吐来
愛たしか乳房がしかと張ってくる　重人
鳩相手たしかな足になって来た　美津留
今日もまだへそくり無事かたしかめる　いわゑ
たしかめてみたい怪しいマッチだな　重人
目を皿にしてジャンボくじたしかめる　英一
確かめる余裕で男眼鏡拭く　萬的
寝返りを打つのはたしか妻の顔　美幸
真夜中にふと妻が居るかとたしかめる　恭昌
盆の風たしかに亡妻の声を聞く　小林英子
点滴のリズムたしかに生きる音　柳伸
一歩ずつたしかめ歩く松葉杖　狸村
百までは生きると耳も目もたしか　一二三
それからは確かに言いにくいラリルレロ　杜的
たしかなことでいつかは長い旅に立つ　年代
灰になるときたしかな答出る　満津子
証人がふたりもいるからたしかです　雀踊子
海底でたしかに生きていたマグマ　美代子
原稿紙たしかなスリル見逃がさず　寿子
お湯の出る栓をひねるとお湯が出た　史好
最善をつくしたしかに負けました　射月芳
花道はたしかに曲りくねっていた　金太
新しい風はたしかに吹いている　美代子
丸い鼻たしかに私の血すじです　敏

兼題「詩」　里　小路選

詩ごころを満たして花火消えました　金太
砂の城暮しの詩がきこえない　楓楽
朗らかな母の笑顔に詩がある　美智子
夕焼けの渚詩人にしてくれる　荒介
若い日へもどしてくれるハイネの詩　美智子
暗誦の宮沢賢治で慰める　太茂津
徳利がころげて詩が流れ出る　武庫坊
売れぬ詩を抱いて涼しい目をしてる　ダン吉
飽食になって詩人に詩ができぬ　楓楽
車椅子の詩人を汗の坂で待つ　作二郎
地下足袋に明日を生きる父の詩　寿美
炎天の蟻は働く詩を持つ　美幸
閑古鳥ないて売り子がよむ詩集　房子
公園に無職の詩が落ちていた　白渓子
女流詩人の鼻はすこうし上を向く　武庫坊
失恋をしてから詩が売れてくる　昭子
マージャンも酒もたばこも好く詩人　いわゑ
お盆です鬼が洩らした一行詩　武庫坊
片言をつなげばいつか詩となる　みつ子
詩心いつまでひとり旅をする　冬葉
西成の詩人が昼の酒に酔う　雀踊子
自堕落に生きた男の一行詩　美代子

第3回
堺市民芸術祭川柳大会

とき　10月1日(日)午後1時開場
ところ　堺市立栂文化会館　第1講座室
堺市桃山台2丁2番1号
TEL 0722(96)0015
泉北高速鉄道「とが美木多駅」左へ3分

おはなし　「仕事場雑談」　田辺竹雲斎氏
宿題　「紅」　森中恵美子選
「牛」　小西　幹斉選
「門」　中田たつお選
「竹」　片岡つとむ選
「鼻」　河内　天笑選
「堀」　小出　智子選
「皿」　久保田元紀選
席題　なし・各題2句　締切午後2時
参加費　1000円(作品集・参加賞呈)
賞　秀句呈賞
主催　堺市文化団体連絡協議会
堺川柳協会
後援　堺市・堺市教育委員会ほか
連絡先　堺川柳協会
〒590　堺市栂屋町東1丁2—2
梶川雄次郎方
☎ 0722(21)0102

反戦の詩が流れてる平和祭　狸村
不器用な余生を友と詩に賭ける　吐来
花の詩を書いて人の輪を広げ　悦郎
森に住むカラスと詩人仲が良い　杜的
波寄せて波をかえして海の詩　笛生
ブランコにゆっくり揺れている詩人　芳子
たこ焼が好きな詩人のサングラス　杜的
生きざまの中にいくさの一行詩　千海
未完の詩溜めて長生きするつもり　年代
フライパンぱちぱちはねる母の詩　藤子
童心をゆさぶる詩が浜にある　柳影
妻のノートに視てはならない恋の詩　芳子
菜を刻む音で始まる朝の詩　八斗酥
ふる里を愛した詩歌へ雨が降る　雀踊子
詩を作る人でうすぎたない暮し　鬼遊
夏の詩を書こうと動く雲を見る　作二郎
気分転換ポルノを書いている詩人　三男
戦場で培った詩鞭となる　悟郎
独房の夜口ずさんでいた詩で　小路

兼題「立派」　**西尾栞選**

酒癖がなければ立派なお方どす　杜的
男だがそれは立派なヒステリー　年代
立派ではないが信頼おける父　楓楽
かぶと虫立派な角に悲しみが　度
勲章を辞してひたすら芸に生き　吸江
立派なこと言っても金に弱いひと　利武
しぶちんが立派なことを言いなさる　天笑
役柄に徹し立派な馬の足　射月芳
口だけは立派なギャルと旅をする　美津留
人間魚雷やさし無口な友がゆき　仙吉
弔辞では立派な人になっていた　金太
とても立派な手相でこころ飢えている　芳子
当選の際はと公約立派すぎ　一二三
立派とは他人が決めてくれるもの　藤子
肩書がつくまで立派な人だった　白渓子
窓際で立派な意見聞かされる　佳秋
女房の立派な尻を見せられる　しげお
肩書の名刺に向い風が吹く　雀踊子
好きな人の形見立派に育てます　史好
立派になったなあと過去は許される　智子
立派だと思うが好きになれぬ人　正坊
七光りする立派さが邪魔になる　文秋
立派だよときどき自分に言うてやる　満津子
母がわり立派に出来てまだ嫁かず　満津子
素人の目には立派な出来上り　文秋
立派です男を騙す顔になり　東雲
立志伝立派な嘘が埋めてある　芳子
兄嫁が立派に見えてくる次男　しげお
ひまわりを立派に画いて未だ嫁かず　杜的
辞表書く勇気立派だなと思う　諷云児
それほどに立派な妻でありません　鬼遊
宇野千代の振袖姿は立派だな　たず子
夫より立派に見える山の峰　岳人
戦争風化立派な足跡義肢が泣く　悟郎
沈黙の立派な髭に押し切られ　いわる
当選の弁は立派なことを言う　紫香
青年の主張立派な一里塚　憲太郎
さりげない素振り立派に思わせる　凡九郎
一房の葡萄に立派な夏がある　元紀
銭湯で立派なジュニアと誉められる　勝晴
ギャルソンの髭立派なり巴里祭　正坊
立派ではないがどの子も親想い　寿美
ご立派とお口上手なのも他人　笛生

西宮北口川柳会創立 15周年記念川柳大会

とき　**9月11日**（月）午後0時半開場　午後1時半締切

ところ　西宮市立中央公民館
（阪急「西宮北口」駅南出口徒歩5分）

兼題　「西」　田中正坊選
「宮」　西山幸選
「北」　和田光代選
「口」　中村東角選
「倉（蔵）」　墨作二郎選
「長い」　松川杜的選
「公園」　黒川紫香選

※各題2句　席題なし

会費　300円（記念品呈）

投句　62円切手4枚同封
4cm×20cmの句箋に記入、9月7日までに着くよう左記へ

〒661　尼崎市武庫荘5－25－17　春城年代

西宮北口川柳会

花地抄壇

1人1句、原則として30句以内、各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。
毎月25日締切厳守。　担当・玉置重人

堺川柳会　河内　月子報

冷凍にしたい男がひとり居る　諷云児
一滴のレモンへ夏を生きのびる　妻　子
真実がこわくて解凍しないまま　森　子
底辺で歴史を変えた兵の墓　射月芳
空ビンも私も波とたたわむれる　金　太
冷凍魚夜の高速突っ走る　庸　佑
充実の一日歴史に載らずとも　柳宏子
そして波船との会話終らない　凡九郎
出土器に歴史添削してもらい　頂留子
この嫉妬しばし冷凍しておこう　文
華やかな歴史はいらぬ尉と姥　小　雪
冷凍庫妻の心がパックされ　かりん
赤道の辺で冷凍されたえび　れ　い
古里の小さな歴史子に語る　紀美女
家系図に納得行かぬとこがあり　東　雲
虫干に女の歴史甦る　千万子
レモン浮かせて口説き文句が出てこない　一二三
男一匹逆巻く波が心地よい　天　笑
冷凍庫いっぱい妻はカルチャーに　月　子

城北川柳会　神夏磯典子報

雑巾をさして大正灯をひとつ　春　雄
雑巾をしぼる寒さに夜半の風　輝　子
今日も無事朝日拝んで感謝して　寿美礼
これからの生甲斐曽孫一人でき　文　子
たぎる胸押えて払う消費税　きくゑ
かた手間に雑巾さして母想う　志　保
暴走族無人の島へ連れて行け　ふ　み
強がりを言った後から気をつかい　登美子
雑巾が威張れば家が治まらず　ただし
明日背負う世代の強さ信じたい　静　子
カロリーにならずピリリと唐辛子　テルミ
憤満のやりどころない蠅叩き　温　子
雑巾をさして女の傷も縫う　純　子
逆境に強い男だ遊ばせろ　史　風
蠅も蚊も昆虫図鑑で覚えた子　倫　子
倖せの証し味噌汁温かい　白　峰
頭の蠅は親が払うと決めている　公　一
調子よい笛にだんだん踊らされ　満津子
政治家の秘書が悲しい時代劇　新一郎
刺子雑巾女の意地が去来する　達　子
横糸の強さに絆支えられ　典　子
散歩道孫のコースで摘む野花　市　郎
生かされて癌病棟の朝が明け　静　歩
雑巾が破れる程に艶を出す　きみ子
雑巾の針目に逝きし母しのぶ　みさ子
雑巾の針目正しき亡母の指　敏　子
雑巾で磨いた床のあたたかさ　よし子
強い子は薄着ハダシで育ってる　午　郎
亡父のこと金山寺味噌が語ってる　久留美
子や孫に俺に似よとは言い切れず　右　近

川柳化粧櫓　植村客遊子報

お金だけ貯めて孤独に耐える老い　岳　詩
連休の騒ぎ尻目に昼寝する　輝　月
天井のふたに尾の出たまずい海老　太　鷹
平凡に過ぎて今夜も茶が美味い　サワ子
婚礼の荷がゆく親の見栄がゆく　悲　子
片言の孫が明るくする茶の間　秋　月
記念です最後の船と写しとく　越　山
病院にまで攻めてくる消費税　葉　香
隅っこで干す杯は無為無策　礎　石
汐時を待っているのに気が付かぬ　紅　月
あご紐を外して署長茶をすする　三　青
巫子の舞い下手は承知のアルバイト　鈴　代
醒めかけに飲まされ効いたコップ酒　悟　紅
クラス会もうカラオケのどの自慢　春　華
熟年や不発の弾はそっと持ち　文
泣きに去ぬ母なし皿を二つ割り　好　花
もう一度たしかめて見る旅鞄　遊　峰
制服がはち切れそうな胸のかさ　遊　光
気がまわる鳴くなら烏奥谷で　永　楽
大安へジューンブライド二組目　客遊子

川柳塔久世　二宗　吟平報

芸なしが一つ覚えの安来節　江　山
お家芸守る息子のあぶら汗　美恵子
芸事も身につけ嫁ぐ日も近い　伊久栄
芸達者同窓会を盛り上げる　ふさえ
女形美女にも魔女にもなって見せ　甫　正
芸達者のんだ顔して笑わせる　志　重

地下足袋が渡り慣れてる丸木橋　半仙
渡らねばならぬ浮世の義理一つ　山人
渡らせてやりたい二人虹の橋　秀香
末席で芸のないのが手を叩き　保恒
約束をしてから本音きかされる　恒心
実を弾き満足そうにさやが枯れ　吟平

川柳東大阪　森下愛論報

味噌貸した鉢が今だに戻らない　孤舟
お前もかモンロー覗くずるい風　雅士
ずるさでは一枚上の風見鶏　柳宏子
要領と背中合わせにあるずるさ　勝美
奥方を頼りにしてる弱い殿　美子
殿方の鼻は低い方が良い　度
殿様にやっぱりあった泣き所　庸佑
街へ出たいと殿様の好奇心　文秋
出し切った力素敵な汗光る　信治
貧しくはあるが素敵な父がいる　湖風
母になる乳房素敵な丸味持つ　公一
スイッチを切って素敵な星の空　恒明
孫百態愛が溢れるカメラアイ　章久
還暦の祝い野良着でハイポーズ　晋吾
美しい怒り舞妓が拗ねている　美幸
中国の怒り集まる天安門　頂留子
七光り最短距離に見るずるさ　百合枝
ずるい商社豪華な餌もってくる　慶三

川柳塔からつ佐志教室　浜本義美報

シャネル五番妻思い切るお買物　三枝子
牛膝執念深く我が家まで　茂坊
夕食を窓から守宮覗きみる　万亀子
入園の孫の自慢に花が咲く　冬子
サヨナラを交してからの立話　順子
暁の漁港にセリの声響き　紫泉
お出かけに切り火きるごとブラシかけ　ちよ
ブラッシング毛並みのよさでいい女　紀一
水栽培グラスの中で芋太り　ふさ子
丹精の庭のトマトが旨い朝　治幸
旅立ちの朝の聖書は読んでおく　百万両
千人針へ無事を祈った弾丸の中　義美

西宮北口川柳会　松本一郎報

お人好しばかり乗ってる泥の舟　みつ子
結論を急ぐと泥をかけられる　諷云児
黙契やふたりで漕いだ泥の舟　(河)芳子
自動車に取られて歩く道がない　保蔵
学校も素足であったおじいさん　宣子
顔に泥塗ったと秘書はぼやかれる　圭坊
フルムーン財布は妻が放さない　柳影
涼しさの演出朝のサラダ盛る　春蘭
二重丸今も昔も褒められる　伊三郎
劣等感あって聞き耳立てたがり　年代
満願の素足がかるい百度石　武庫坊
悲喜こもごも平均寿命また延びた　香子
地の温み素足の裏で受けとめる　はつ絵
リクルート泥色のまま終結し　トミエ
気軽うに水に流せと言われても　てる
捨て犬が泥ついた尾を振っている　萬的
宿下駄に素足カラコロ露天風呂　紀雄
鶴を折る指は大人を信じない　冨久恵
水加減覚えて妻の忌がめぐる　笑女
髪染めて一生懸命生きてます　江美
浅はかな考えだったリンゴむく　静子
カタカナが街にあふれている文化　光代
京染のむらさき似合う古典舞う　千世子
座り胼胝老母の歴史がある素足　きよ子
海女宙返り素足のうらが生きている　正一
血に染まる修羅の歴史も遠くなる　園歩
老いぬれば三猿主義で家平和　〆女
言訳が面倒くさくて旅に出る　佳秋
投げ出した素足に主婦の日が暮れる　一郎

川柳ささやま　遠山可住報

フンフンと納得ばかりして出費　百合子
節くれた指に田畑がよくなじむ　金之助
寝返りへ今日の不覚をせめられる　貞子

佳句地10選（前月号から）

中西兼治部選

目で怒り心で撫でる父の顔　美代子
大陸に消しても消えぬ過去がある　公一
傷口をいたわりあっている絆　恵子
灯を消した窓を覗いた春の月　義一
草茂る継ぐ子が居ない千枚田　壮之助
心配は親切過ぎるうちの夫　〆女
危機迫る保護色という神の加護　登志代
陽を集め七色の橋夢を織る　冨美
誓約書途中で墨がかすれだす　佳秋
カード手にするとついつい無理をする　楓楽

酔いさめて納得いかぬつけが来る　千代子
節くれた指を誇りに土と和す　ゆうや
一日の重みを指の節が知る　つや子
喪に服すああ納得の出来ぬまま　冨美
いざというときの耳垢とっておく　とみ子
ジャンケンで決めて納得せよと言う　靖子
納得はしても女である涙　テル
方程式妻は納得してくれぬ　和子
いくたびの節目も亡姑に助けられ　ヒサ子
罠だった旨い話と知りながら　エキオ
納得のいくまで聞いて薬呑む　きし江
耳底にまだ居座っている愛語　文平
鬼瓦比国の嫁へ納得し　可住
頼りない男納得ばかりする　越山

岸和田川柳会　植山　武助報

高い服買った今日は冷やっこ　すみえ
高くてもやはり信用出来る店　さよ子
自由化へ尻突つかれる高い米　通彦
声高に話して通る千鳥足　こう
三男坊忘れた頃にひょいと来る　喜久子
母の背でおぼえた唄は忘れない　狸村
終着のホームに残る女傘　一弥
正直な男に高い天がある　射月芳
振り袖の客を迎える娘の挙式　希久志
梯子酒しきいの高い午前様　みのる
おばたりやんかなわぬ夢を追っている　冨志子
ど演歌が好きな男のわび住い　武助
好き嫌い二の次という婿探し　白光子
忘れたいことばかりで海にくる　初太郎
翔んでいる女足元見忘れる　浪速子
忘れたい事がだんだんふえてくる　天笑
安い方買えと財布に念おされ　月子
赤坂の客は企み抱いてくる　甘平
生き伸びてちょいちょい忘れる癖がつき　勝晴
忘れてた人思い出す祭笛　ひで

京都塔の会　松川　杜的報

宿の朝和風トイレを探してる　求芽
目が触れて身体が触れたくされ縁　京童
寅さんがむずむずしてる雨三日　英子
お産して我が子に触れた日の感動　花代子
誘われた事には触れず夕餉の膳　芳子
たくましいひげの男が和風好き　栄
参観日答出ぬ子にむずむずし　圭坊
いたずらに触れてはならぬさくらんぼ　正坊
防衛費この辺でよい飛行雲　佳秋
三車線中がスピード出しすぎる　紫香
病みあがりの心にふれるよい話　美智子
言いたくてむずむずしてる喉ぼとけ　颯云児
医師の手が触れた患部の是非を問う　福子
その傷に触れさせまいと話題かえ　〆女
お抹茶に合うのはやはり和菓子です　麗水
金婚の旅は和風の宿に決め　杜的
亡夫の忌へ供えてあげた豆ごはん　笑女
横座り思案に余るとは見えず　水客
大正のリズムが残る青畳　ただし
打水に出迎えられる京の路地　年代
法善寺折れて和風の店に寄る　白渓子
触れるものみな新しい嫁が来る　飛鳥
赤ちゃんの頬っぺ触れればよい笑顔　美穂
参観日手を上げぬ子にむずむずと　武庫坊
むずむずとすれど背中に届かぬ手　巨詩

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

茶話会の祖母の渾名はおちゃっぴい　高明
紫の煙にのせるわがタンゴ　四郎
頬杖も傍で見る程楽じゃない　虹汀
紫陽花の媚を愁うや梅雨晴間　朴竜
浮かぶ雲孫が欲しがる牛や馬　旭恒
ツボ押して夫の手を借るエレキバン　正敏

八尾市民川柳会　飯田　悦郎報

想い出は飛行機雲の中に消え　一志
飛行機は座席につくと腹すわる　隆
グラマンを落した父の赤トンボ　晋吾
タラップをのぼる父の背が丸い　朝子
エアポケットで姫さま夢がさめ　雅士
飛行機の彼方に消えた青春譜　律子
廃校を知らず記念の樹が茂る　三男
パーフェクト記念のボール客に投げ　信博
革命の重荷になっている記念　欣之
アルバムに残る記念の甘い影　喜風
でこぼこの飯盒父にある記念　重人
記念写真罪な女がわらってる　白洋
愛の灯を燃して集まるボランティア　柳伸
つばめ集まるとニュースになる都会　政好
集まると老人会は若くなる　美幸
混雑の場所で狙いをつけたすり　東雲
やさしさが慣れて忘れぬ親思い　しんじ
三輪山のやさしい姿ときびしさと　勝美
やさしさに馴れて女が茶を汲まぬ　美代子
軍服の父の遺影がやさしすぎ　章

よその女にやさしいので困る　春堂
浮雲がやさしい亡母の顔に似る　甘平
憂曇華の花に感謝のとも白髪　弘直
感謝した情けは子供と分かち合う　悦郎
稲の出来太陽に感謝して苅る　覚然坊
女房に感謝は言えず六十路越え　一雄
大げさな感謝で大きな尻座る　シマ子
全快感謝大き目の絵馬を買う　度
母一人子一人感謝の灯を点す　柳宏子
末席が以下同文の感謝状　頂留子
天地のめぐみの感謝忘れない　美津留

三幸川柳教室　桜井　千秀報

傘の列団体さんのスケジュール　好笑
子守唄何度も聞いた日和傘　由梨
強風に傘を窄めて身構える　和子
再会のチャンスをくれた忘れ傘　公子
すげ笠がまだ覚えてる茶摘み唄　美子
寄り添った温みを傘にしまい込む　育子
差しかける傘が届かぬ飢餓の国　幸子
影さえもふみ迷うてるビルの街　芙美子
自己嫌悪まだついてくる影法師　桂香
あやふやな影を胃カメラ指摘する　愛子
光ってる男に影が付きまとう　保州
能面の陰で愛憎揺れ動き　千秀
今日も無事影絵のように暮れる山　靖子
受賞式蔭の妻にも渡したい　重次
陰日向ないのに仕事はかどらぬ　結実
師の影と並んで理屈捏ねまわし　孝子
蔭ながらご無事祈ると嘘ばかり　智水庵
無軌道を川の流れに諭される　みね

意地ひとつ川の流れを逆ろうて　朱夏
笹舟がすなおになってゆく河口　純子
渓流へ妥協はしない石の意地　鉄治
一つずつ解いて川幅広くする　三千子
さらさらと春の小川の村は過疎　高夫
腹鼓きこえてきそう丸い月　茜
上M寸下LLの腹回り　当代
田植え時ゴロ寝している猫の腹　典子
膨らんで疚しくないが目立つ腹　隆行
臨月の腹で夫をこき使い　可笑

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

似顔絵と写真をならべ見くらべる　保子
とてもやさしい顔でロダンは考える　日枝子
顔なじみ菊一輪を無心する　登栄
定年の顔を鏡がなぐさめる　ゆき
顔役にリトマス当てて調べたし　より子
いい顔になって仏に近くなる　亜弥
蔭と陽ひとつとなった家づくり　朗子
稀少価値わら屋根の苔なお濃ゆい　ふみ
家々の灯が消える過疎の町　恵子
広からず狭からずいる老いの家　智加恵
嫁った娘を一生背負う家を建て　富美子
風つれて顔が集まる里の家　千春
悲しみを支える家にかくれんぼ　てい子
傾いた家に鯉のぼりを上げる　やえ
家長など存在感の薄いこと　八重子
もみの樹が家の盛衰知っている　田鶴
チリ一つない家に来て肩が凝る　瑞枝
CTに心刻まれ風に舞う　寿々子
飛びたくて鳥のブローチ付けてみる　正子

思うほど飛んではくれぬ紙つぶて　花子
野の果てに椿飛び火のごとく咲く　千代
竹とんぼ祖父の話を越して行く　荒介

大原川柳社　小林　妻子報

一碗の抹茶と朝を無にかえる　あすなろ
確信の言葉が風と火矢になる　正子
かたつむりお前も孤独の奥にいる　ひでの
浅瀬ばかり歩こうとする平和主義　寿恵子
成功の隙間から見る青い空　睦子
内職に追われて溜るいいニュース　こふゆ
詮索はすまい幸せ褪せてくる　敏子
洗っても消えぬ古傷うずく梅雨　美代子
予約してないと閻魔に断わられ　正己
紫陽花の心がわりを問うてみる　巴子
健康を過信するなと子に言われ　悦子
次の日の火種を囲う仕掛人　理瑛
かりそめの情けにきしむ車椅子　元江
愛の鞭情けが邪魔をして困る　辰江
良き柳友があり晩年を噛みしめる　朝代
覚悟した男背筋が伸びている　智泉
SLの汽笛を追うているカメラ　辰子
相手の心よんでうれしい言葉尻　玉恵
くちなしの花がふくらむ退院日　宮子
サイレンの余韻に浸る午前五時　みづえ

川柳塔鹿野みか月（七月）　土橋　螢報

私にはわたしに向いた風を待つ　八重子
私有地がデンと団地の邪魔をする　けんじ
約束を破る無情の雨となる　智恵子
お互いの傷には触れぬ雨の午後　雅女

虹が出る孫の指先からの雨　保子
どしゃ降りの雨に私をさらけよう　覚
雨降れば雨を話題にして喋り　静生
雨しとど二度と聞きたくない名前　日枝子
悲しみの心に沁みる雨の音　富恵
土砂降りの雨を聞いてる金魚鉢　盛桜
約束をするとかならず雨になる　みさ子
閑ができたら雨を掬っていいのです　颯人
妻であるやさしさ襟元にあふれ　三千代
私を愛していると言いたまえ　(新)正子
王様の寝物語りがバレちゃった　喜代志
さみしくて語る人形手放せず　かつ乃
くちなしが昔の私語を聞いて咲き　芙美
亡霊が語りつがれて謡われる　幸枝
わたくしの好きな私になれそうだ　汲香
襟足にみとれどぶ板ふみはずす　とみお
孤独とはしみじみ耐える夜の雨　くに子
いつからか母を半分しか呼ばぬ　孔美子
逆風に立って私を見失う　房子
釣銭でボランティアする瓶がある　瑞枝
紫陽花は雨にも慣れて色を変え　小鹿
日だまりに昔話を語り合う　早苗
相槌を打った私を悔いている　和子
鈴鳴らす私自信が迷い子に　美っ千
離婚されても私川柳つづけます　はるお
喜びを語ると時計鳴りだした　きみ子
歯が抜けてほとけの乳をさがしてる　隆風
風の夜は死んだ男と語り合う　完司
あじさいに雨の弔辞を滲ませる　荒介
あじさいがぽつりぽつりと語りだす　石花菜
語りかけてやらねば石になる枕　千代
そのつぎを語りつづけて笑われる　螢

川柳塔まつえ　恒松　町紅報

嫌われぬうち切り上げる三分間　幸子
ふるさとの夜店で会ったガキ大将　登志子
万歩計と仲よくデートしています　鶴丸
兎より亀の一歩という男　煩悩児
好きな人さみしくなればふと思う　静江
同じ道親が歩いて子も通る　米子
魂胆がある話には距離をおく　日出子
休日の飯場朝から酒となる　巡歩
不遇の身だから夜の海が好き　与根一
好きな想い出遠のいて行く終電車　長三
いばら道歩いて古稀の春となり　淞南
君と歩く甘い雰囲気まだ捨てぬ　瑞枝
ぶらぶらと歩く男の空財布　房子
枇杷熟れて曽孫が生まれるよい話　多賀子
休日も家族のためにごはん炊く　秀子
ロボットが働き休日ふえていく　正朗
妻も私も森を歩くと若返る　弘円
真直ぐに歩くことしか知らぬ父　三男
戻り道出来ぬ一歩を踏みしめる　操子
休みなど知らぬ故郷の水車　寿美子
正直に歩いてちびた父の靴　静恵
休日は充電せよと雨止まず　雄々
惚れた弱味長い廊下を歩き出す　竹雪
休日の日記ページをこぼれだす　文子
休日に弾まぬ疲れきった毬　馨子
手の鳴る方へ歩いて罠に気がつかぬ　早苗
走る人歩く人あり朝の町　清志
愛犬と話をしたら頷いた　きみ子
深呼吸ストレス捨てに歩こうか　友子
又同じ話を喋り出す入れ歯　町紅

川柳塔わかやま　牛尾　緑良報

盃の底に切札溜めている　三男
損のない話へ風がよく靡く　信秋
泥沼に育ち清楚な花もある　武雄
切り札を書く鉛筆を尖らせる　豊太
切札に挙式の誓いとってある　英子
切札を持って素足で行く女　千寿子
切札をかざし毒舌封じ込め　栄美子
状況が変り切札出しそびれ　恭子
万物が育つ日の恩土の恩　桂香
懸命に育てて風に奪われる　照子
飛ばれても育てた事に悔いはない　克子
太陽と水と大地で育つ愛　紀久子
添うための縄をしっかり綯う夫婦　輝子
寄り添うて盲導犬のまあるい目　萬的
影だけかわたしに添うてくれるのは　光代
亡き夫の心に添うて生きていく　静代
定年で寄り添う影も逆に映え　アサ
寄り添うてしっかり握る羅針盤　稚代
四十年添うて初心の農でいる　三千代
添削のまごころ作句の糧にする　忠雄
ライバルが皮肉を添えて来た祝辞　正博
添え乳する児の未来図が果てしなく　信子
付き添いに睡魔がおそい夜が白む　登志代
損徳は言わず一直線を行く　紀美女
損な役引き受けてきた妻が好き　愿
強欲が却って裏目損ばかり　瑞穂
賭け事の損が胃の腑を締めつける　白光子

損は承知きょうも歯車まわり出す　寿子
良いヒント時どき拾う無駄話　太茂津
カレー皿いま子育てのまっさかり　緑良

高槻川柳サークル卯の花　河瀬芳子報

ゴキブリを怖がる猫で夫に似る　スミ子
怖がった夜道に慣れた娘が恐い　栄子
知らぬまに地球が熱くなる恐怖　尚山
宣告が怖くて病院くぐれない　よ志子
枯れるのが怖くて走り続けている　(河)芳子
快気祝意外に髭がよく伸びる　春風
末っ子が意外な程の正義論　佳秋
世渡りがとっても巧い落ちこぼれ　英子
このひとの足跡意外寒い風　〆女
肩書が無いから意外に浅い傷　颯云児
シナリオのところどころにある誤算　美智子
上下を誤るような抽象画　行平
誤字もよし母の手紙があったかい　杜的
目測を誤り梯子がとどかない　とおる
月明の木馬に乗っている誤算　作二郎
ワンテンポ早うてアルトが出てしまう　房子
ワンテンポ遅れ一駅乗りすごし　紫香
ワンテンポ此処ではお茶を喫む時間　凡九郎
ワンテンポおくれがちでも生きられる　年代
眼帯外してテンポがずれたなと気付き　萬的
佳き人の佳き京ことばワンテンポ　和友
消費税お釣りもらうに手間がいり　武茂
新総理おとこ冥利がばれている　冬葉
水中花男の愚痴は聞くでない　武庫坊
昭和生れのロマンを持って抱かれよう　礫
雑音も妙音と聞く南無阿弥陀　正坊

ドーランを落とすピエロの老いの皺　百合子
絆とや冠婚葬祭だけの縁　(松)芳子
老眼鏡警備日誌に手間が要る　白渓子
消費税払うわたしは異邦人　鬼遊

川柳泉尾　吉川寿美報

ほこ先を自分に向けて荒立てぬ　はつ子
空と海溶け合う須磨に心溶かす　美子
雑踏の中で孤独なウォークマン　伴子
手のひらが苦労の数々知っており　文子
無為徒食わらじ虫さえ土つくる　満洲子
萼紫陽花悲しみ秘めたように咲き　義一
あじさいは二十年添った妻の顔　克行
変るのは君紫陽花のひとり言　淑子
あじさいの色うつろいて恋終る　トミ子
あじさいにまだ日がまぶし須磨の初夏　美南子
運び疲れ働き蜂もドック入り　和子
我が家にも運んでほしい福の神　まち子
重病の見舞いに重い足運ぶ　靖子
いい事も時には運ぶ子供達　恵美
運ばれた母の一切れ足りぬ皿　シメ子
陰口は気まぐれ風に運ばれる　洋子
一歩ずつ運んで少しずつ老いる　美代子
寛大な時はいつでも下心　功子
セールスマン独居老人の世話を焼き　みつ子
ひょうひょうと生きて無縁の下心　三千代
ときめきの余韻が残る下心　敦子
野苺は潔白だった下心　弘子
プライドが口には出せぬ下心　シマ子
真心に押し潰された下心　あさ子
目立たぬが私も持ってる下心　途子

下心へ小さな良心邪魔をする　白水
ボランティア点数あずける下心　きよ子
旅の宿座り羅漢が酔っている　敏
薄切りのレモンよ愛は生まじめに　寿美

川柳塔とっとり　岩原喬水報

味けない別れとなった見合いの日　新風
それぞれの持味生かし社がのびる　多可志
湯豆腐の味へ話が堅すぎる　拙峰
味のよい店でしばらく繁盛す　粗粒
跡継ぎができぬ誤算の嫁だった　砂山花
捜査ミス真犯人が笑ってる　秀和
巨人軍うれしい誤算勝ち進む　圭一郎
親戚の票まで逃げた負けっぷり　由多香
合鍵のひとつで女誤算抱き　山人
有望な男誤算も持ち歩く　艶子
一円の誤算銀行灯を消せず　喬水
知恵くらべ悪い知恵だけ残ってる　一枝
悪知恵はその気になればすぐ出せる　旋風
会いたさに理屈通らぬ知恵絞り　呼風
金もなし悪事するほど知恵もない　友夫
悪知恵が見抜けぬ弱い傷を持つ　帆雀

いさり火川柳会　尾崎三代治報

アルバイト少年の背に母があり　伊都子
バイトして社会のことを少し知り　三代治
アルバイト銭の尊さ肌で知る　由多香
久し振りの顔が喪服を着けて寄る　豊子
七輪が居すわっている台所　武士
台所薄刃の音で朝が明け　孝人
アルバイト先で恋まで実らせる　智恵子

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

赤トンボ悲しい人を悲しませ　薫風
音痴です読経だんだん小さくなり　とく子
騒々しいですよ古墳のうめき声　杜的
美しい声で笑っている悪女　つえ子
無名戦士の墓にこもっている喚声　武庫坊
夕焼けに子供の声のしない町　寿美子
達者かと一声父の電話口　正坊
一流はあとでもめない手切れ金　博史
一流を招き赤字の村おこし　きく子
一流になればマスコミ付きまとい　慶子
飼い犬も一流という顔してる　杜的
一流の人にもあった女癖　蕗児
一流の料亭でする裏話　白渓子
一流と言われる人の裏おもて　登志実
一流は憧れのまま呆け始め　英子
一流の自負が妥協を許さない　颯云児
わたしよりわたしを見てる母がいる　よし子
ゴキブリがよたよたしてる効いたらし　富子
列島を長距離バスが夜運ぶ　洋子
友の訃に日ぐらし急ぐ昨日今日　登代子
選挙たけなわ汗の帽子は汗臭い　作二郎
親熊が立てば仔熊も立ちあがる　英子
鉾山の巡行が過ぎ真夏の陽　圭坊
ぼけ封じとワープロたたき悦に入る　明吉
自由とは足袋投げすてる四帖半　福一
自由です日曜朝飯食べずとも　花村
コーヒーで表通りを見ています　紫香

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

似ていない長所へ期待かけている　白渓子
世渡りが下手で溜息ばかり出る　颯云児
溜息が思わず洩れる秘宝展　園歩
誇らしい溜息月下美人散る　歌子
思案したあげく友情切り捨てる　堯
一尺の縄が思案に暮れている　伊三郎
気の強い男に思案などはない　正一
思案して子の考えに合わせてる　英子
インクの切れた万年筆で思案する　作二郎
標的真直ぐ首相に女性週刊誌　萬的
散歩するコース竹藪ゴミ捨場　みち子
夏の海男まどわす風が吹く　武庫坊
猛獣がうるさいやつらと細目あけ　保蔵
本音ついもらしてしまう国訛　正坊
妻の留守仏の花がうなだれる　定人
同居して温いまなざし配ってる　久美代
夕陽落つ五島の海の水平線　〆女
海へゆく道を教える道祖神　静夢
コーヒーがとてもおいしい二人きり　美智子
溜息と涙ドラマはガン告知　敬
ため息をつくドラフトの当りくじ　文夫
正直な汗は太陽はらんでる　天樹
過疎の駅昨日のままの傘がある　紫香
溜息が舞台の袖へ這いあがる　年代

駒つなぎ川柳会　里　小路報

お求めによりとマイクをはなさない　潔
只祈るポックリ寺の鐘をつき　勝美
職を求めて流れつく西成区　千代三
帰省してゆっくり富士を見てる風呂　憲太郎
ゆっくりと話す真実かも知れず　覚然坊

すぐ誓うお人で嘘がすぐばれる　冬葉
子にあまい父の小指はすぐ誓う　素灯
暗礁に乗り振り返る誓約書　柳右子
誓い破って子供の目が恐い　文秋
蟻たちも何を誓うかお辞儀する　眉水
ほどほどに神も誓いを聞いている　翠公
病院のタライ回しにつかれ果て　東雲
不合理に困っています消費税　美津枝
親と子で困るボタンの掛け違い　章久
うち殺すわけにはいかぬ寺の鳩　度
付き合いに妻がランクを付けている　悟郎
市場籠提げて団地のお付き合い　善信
これ以上なにが欲しいと言うのです　金太
求めぬが持ってくるのはこばまない　柳宏子
自分にはない性格を子に求め　射月芳
求人と求職齢ですれ違い　律子
埴輪の目へゆっくりゆっくり陽が沈む　萬的
ゆっくりと柩を担う歩が揃い　章
忘れっぽくて人は誓いをくり返し　頂留子
セレモニー誓いは脆いものと知る　智子
雁首を寄せて結論まだ出ない　恒明
もう帰るのかと寝たきりの目に困り　信治
程々にせよと付き合いばやかれる　庸佑
神さまに誓いをたてている弱さ　雀踊子
付き合いの良いのが駅でゴロ寝する　柳伸

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

孫娘日記見せない齢となる　保蔵
雨あがりよりそう二人に虹の橋　美代
残品へおまけをつけて売りさばき　すみ
つゆの雨止むまで待とう将棋さす　向西

コンピューターにお株とられた知恵袋　美代子
黒眼鏡かけると子供寄りつかず　敏之
なぐさめる言葉が出ずに眼鏡ふく　江美
サングラスかけてうそぶく子供部屋　弘治
せせらぎのリズムを掬う峠道　澄子
リズムよくしゃべる男に落し穴　昌子
まな板のリズムに妻の歌がある　美智子
酔うほどにリズムにうまく乗る男　義嗣
また朝を孫のリズムで起される　紫香
フロン瓦斯ピンチの地球回ってる　六浦
灯を消して亡母とピンチを話し合う　佳秋
飼い犬に噛まれピンチに立たされる　歌子
下手な嘘まことになってきたピンチ　十四郎
逆風を乗り切る鍵は製作中　夢之助
ピンチにはお地蔵さんへ詣ります　武庫坊

川柳後楽　井上柳五郎報

説教をすると羅漢の目が光り　健一
説教をする気の顔に遠く座し　たけ志
からくりの恋手品師に踊らされ　青銅
手品師に飼われて鳩の日々不信　美智子
少年の瞳手品を信じ切り　浄美
手品から出た鳩あおい空知らぬ　拓治
三面鏡手品のネタを見てしまい　照路
青い鳥呼べる手品がまだできぬ　柳五郎
縄のれん今日も馴染の客が占め　金吾
水虫と馴染になってから久し　草風
どう見ても馴染を通り越した仲　哲郎
自民党女性の票の怖さ知り　美代子
自民党破れかぶれの言い放題　進
悲しい酒天国で泣く栄誉賞　桃風

教頭に兎の悲鳴が聞こえない　秋月
老いた今歩ける歓びかみしめる　紫峰
処女コースさてお楽しみ万歩計　佐加恵
チビ靴の歩いた過去は喋らない　吟平
余生まだ歩く姿が枯れてない　博友
はでを着る妻から少し後れぎみ　義親
にんげんに負けるものかと蟻の列　九坡

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

ぎりぎりの所でいつも三枚目　恵美子
不器用な医者の手ざわり信じよう　かつ子
不器用な英語で世界を股にかけ　ヒデ子
野の花よ今日も無事でと思いやる　好栄
思いやる心に打算なかったか　はるみ
ある時は見て見ぬ振りも思いやり　聖子
罪の手に背広刑事の思いやり　智重子
関白の単身赴任を思いやる　歳栄
思いやりただそれだけの事でした　民子
大仰にうなずいて観る抽象画　北斗
不器用で愛の告白など出来ず　鈴江
こんどこそあんな議員にやるまいぞ　悦良
東京はのっぺらぼうの白い顔　三和
思いやり忘れていました車事故　世似
不器用な性で貯金のないわたし　白李
思いやりもうこれまでとリクルート　清泉
ほととぎす下弦の月を置き去りに　白汀

むらくも川柳　藤井明朗報

手紙焼くわたしの過去が燃えている　秀子
ひたむきに燃えた証の古日記　文子
大荷物姑はゆっくりするつもり　一葉
はらはらと水着の線に目の置場　義良
放言続出はらはらしてる自民党　鶏生
病む友が握り返した手の温み　幸夫
夕焼けに燃えて夕べの鍬洗う　島子
心配であくびも出ない手術待つ　梅園
お隣へ欠伸うつして聞く講話　三津江
人生は絶える事なく燃えつづけ　武衛
父さんの握るこぶしは愛の鞭　仲子
転勤を重ね迎える定年期　幸子
栄転はよいが妻子と遠く住み　峰雪
ゆっくりとしていて早い後始末　百代
本当の愛があるから従いて行く　巡歩
生返事かえしゆっくり妻は立ち　芳子
ゆっくりと寿命も伸びた国に住む　正朗
まだ早い帰しませんと女の瞳　明朗

聴障川柳　稲田豊作報

神様は大きな賽銭箱で待つ　豊作
ボケだけは御免という欲ただ一つ　真女
若者よも少し持てよ仕事欲　健太郎
欲もなく菜作り楽し老いの日々　美乃留
欲のため総理の首が吹ッ飛んだ　珍妙人
欲失せた隠遁卑怯な逃避かも　進一
年取ると優しい言葉欲しくなり　みつる
欲だけで流れぬ人の義理の橋　和江
総理の椅子めぐる欲から汚職生む　文古
欲捨てて眠れば夢路の星光る　八恵子
欲望を満たせば懐さびしくなり　たみ
欲に貯めあの世へ行く時丸裸　行江
ほどほどに欲を押さえて徳を積む　一晄
欲捨てて生きれば此の世すばらしい　三香

翠洋会　中西兼治郎報

かあさんの胸になやみを埋めに行く　兼治郎
縦横のクイズ孫にも助けられ　みよ子
穴うめも上手に出来て新世帯　絹子
埋もれる力探しに地区予選　正雄
天安門溝を埋めずに戦車来る　真
活け作り横目づかいで見るヒラメ　英一
蓮池の泥に埋れて花咲かす　すすむ
電光石火横に座ったオバタリアン　恭昌
埋めたダム静かに語る村の悲話　佳秋
ベランダでよるタバコ吸うホタル族　東雲
未練ごころ捨てると螢高くとぶ　さと美
再びは会うこともなし螢の火　良江
ラブレター横書きにした丸い文字　照子
横顔はけして見せない福笑い　宏子
廃線を知るや知らずや月見草　楓楽
タイムカプセル十年後を浮かべつつ　綾子
首横に振り度くて出るひとつの輪　光子
埋もれた人材活かす名人事　登志実
蛍からともしび貰う自閉症　みつ子
電車にものらずに貯めて詐欺にあい　いつを
人間を掬う市電に網があり　鬼遊

川柳大阪　中原比呂志報

冷や飯で単身赴任という社命　亮太
記者根性見せたサンゴの記事空し　正之
缶詰にして売り出せる里の水　司
アリバイは妻の日記にあるという　柳弘
手ぶらでも差別はしない自動ドア　希久志
体調よし地球の皮はぐ草むしり　我勝
大安も思案に入れて買う馬券　しげお
限界を悟ると早い下降線　雅巣
耐えて来た人生五十親の春　哲流
鯛焼きのアンコ減らして税を抜き　喜楽
人を斬るものになる気は鉄にない　凡九郎
毛筆で非核署名の和尚さん　一歩
カタパンの客おこらした日の不運　美津留
以心伝心の夫婦箸が剝げる　重人
心技体充実見事な勝ちっぷり　天平
雑兵の鎧も槍もいらぬ日々　洛酔
鉄を切る汗は男の背を走る　与呂志
鉄筋に住んで優しさ欠けてくる　金太
土壇場の心変わりを咎めまい　本蔭棒
鉄砲を向けた裁きは誰がする　鉄心
縄のれん分けて心のうさを消し　酔舟
かるがもの移転やさしい風が吹く　笑風
別室へ移ると本音あふれ出す　比呂志

南大阪川柳会　中川滋雀報

飽食の皿がないものねだりする　寿美
飽食のしっぺ返しはきっとある　藤子
飽食の舌は忘れた芋の蔓　公一
柿熟れて落ちてからすも飽食に　度
頭打ちしてから飽食しなくなり　久子
飽食の果ての茶漬に凝っている　凡子
問題が解けず煉瓦の塀続く　作二郎
問題は両方にある嫁姑　楓楽
問題にふれると身内揃わない　雀踊子
問題の人にカメラが付き纏い　覚然坊
問題を解いているのはコンピュータ　勝美
問題にされずに雑魚の切られ損　新造
長いものに巻かれ問題にはふれず　千梢
洋菓子で釣る魂胆では泣き止まん　章久
洋菓子を抱いて探りにきた和解　滋雀
洋菓子の誘いにのった日のロマン　憲太郎
来てくれるはず洋菓子は買ってある　トミ子
健康に感謝している労働歌　文秋
労働歌下手でも誰も笑わない　冬葉
ロボットが囁きだしたストライキ　章
労働の汗向日葵と仲が良い　柳伸
一徹な父は休まず鍬を持ち　和子
ひと汗と燦と輝く陽に挑む　しんじ
おかしいと思い続ける赤いペン　智子
変化球投げて白状させた嘘　浩一郎
合わぬはずない計算がまだ合わぬ　庸佑
下手に口出しておかしい事になり　頂留子
おかしいぞどうも散髪行きすぎる　重人
おかしいなだけですました都市砂漠　柳宏子
おかしいと神様だって思てはる　凡九郎

いずも川柳会　吉岡きみえ報

位置付けが不足反旗を翻す　巡歩
約束を解かれてからの花の位置　文子
底辺の位置で貧者が灯を点す　為一郎
授乳した位置に息子の肩がある　リチエ
寡婦暮し世の雑音に耳をとじ　律子
雑音に耳傾けぬ一本気　桜水
雑音で片づけられた出張る杭　六之介
雑音が右へ左と指図する　昭二
雑音に矛先鈍る槍さばき　まこと
雑音の中一服の至福かな　智恵子
雑音がとても嫌いな右の耳　佐吉

胎動に裂けはせぬかと妊婦帯　草丘
鼻緒切れハンカチ裂いてくれた人　孝太郎
張り裂けそう嫁の乳房は孫の幸　清子
舟唄を口ずさみつつ鳥賊を裂く　久栄
伐り裂けるチェンソー父祖の慟哭か　多賀子
音たかく華麗に裂けてゆく花火　芳子
夜叉となる女の演技布を裂く　芙佐子
人間の驕りいつかは大地裂く　和子
愛を裂く橋の無い川まだ流れ　寿美
住まいだけ見れば幸せそうな人　ちかし
ひと彩を足して住まいの自己主張　重昭
豪邸もうさぎ小屋でも人一代　きみえ
母が住む部屋も線引く設計図　早苗
余韻まだコップにぎった手にのこる　正朗
城下町武士の余韻が落ちていた　満江
水中花水の余韻を聞かそうか　桂子
風鈴が旅の余韻をかきたてる　弁次郎
打ち水に昼間の余韻消えてゆく　茂美
晩鐘の余韻を耳に鍬洗う　幸一
夕やけの余韻がビルの窓に映え　篤子
海鳴りに父母があり抱く余韻　青湖
雑音が泡ともなる水面下　代仕男

サークル檸檬　藤田泰子報

降るつもりカラッと晴れて忘れ傘　登美子
妖精が移ろう影の玉三郎　智恵子
精一杯やったけれども悔いがある　美子
花の精甘いムードで虫を呼び　三四子
精出して働く間は老い知らず　千代女
新住所星がきれいという所　今日子
精一杯食う寝る遊ぶわが余生　美緒
精出した稔りに嬉しい茄子の味　雅子
降り止まぬ雨など無いと信じてる　泰子

富柳会　池森子報

追いつけぬ距離を歩いて母は行く　花子
あなたなら割って見せたい腹の中　静枝
母になる心得母に教えられ　昭水
カラコロと鼻緒の下駄を恋しがる　トシエ
手をお出し見てあげようと鼻の下　(田)勇
ママごとの母は気丈な女の子　(伊)勇
石橋を叩いていまだ渡れない　智久
ついでだと母はわざわざやってくる　荘次
眼科歯科回って午後は隆鼻術　文次
母の荷が重い長女次女三女　花梢
一生を決めた故郷の丸木橋　美房
僕は男裸婦像の鼻は見ていない　森子

川柳たけはら　森井菁居報

オリエンテーリング雨よ降らないで　小六晶美
宿題はなしにしてくれ夏休み　小六晴美
空を飛ぶゆめをにわとり見てるかも　小四史子
いい予感秋海棠の芽が一ぱい　ふさ枝
知らぬ間に我が信念が孤立する　清水
何も手につかぬピエロの日曜日　菁居
味利いてみてと酢味噌をなめさされ　静水
宍道湖を見ている朝のコーヒーよ　蘭幸
ひとつ鍋囲む味方も敵も居て　俊夫
亡父に似た五百羅漢は禿げ給う　勲
雰囲気に反省会の意味がある　ヤスエ
吉相印うすめに押した借用書　静江
あの日の事今なら話す花菖蒲　喜久恵
愚痴一つこぼさず坂を登り切る　浪子
忠告を素直に受けた夜の眠り　喜美子
嫁ヶ島言いたい事はあずけおく　麻代
どのネジも巻いてから立つ主婦となる　一枝
年月が皆を大人にした不思議　伸子
ふり向いて欲しい暗示をかけてみる　栄恵
九十の母に内緒は通じない　愛子
ぐみの実が色づき過去がよみがえる　康子
くやし涙は抜き返してから拭こう　笑子
父母達者いつまで書いてやれるかな　房子
話しかけながら墓所の草を抜く　比呂子
七変化紫陽花だから許される　節夫
ピカソにも描けない貌を海は持ち　一路
胸の内情けを止める駅がある　博子
そして又もとの二人よ牡丹寺　淑子
地上げ屋はここまで来ない坂の家　新造
ボールペン赤の非情と温情と　静風

川柳藤井寺　高田美代子報

噴水の虹を背にした待ち合わせ　てつお
道頓堀魚の住める水になり　三郎
水打って紋付を待つめでたい日　昭子
倖のうしろにあった水たまり　正枝
甘い水誘われ女蝶になる　政代
紫の滴に染まる花鋏　彩
草原は自由な風の散歩道　雅美
乗り越してやっと気のつくのん気者　宗一
鯉のぼり平成元年初端午　繁男
父の日の父へ心のふれる愛　末一
納得もせず払ってる消費税　須美
消費税だんだん馴れてゆく怖さ　修六

割勘に電卓がいる消費税　志洋
消費税千円パパを追いつめる　治子
一円に八つ当りする消費税　隆二
消費税財布の紐がもつれます　敦子
消費税老いにも辛い更衣　つや子
竹下さん三パーセントで座を追われ　風来坊
ほんとうの行くえ知りたい消費税　婦美枝
民やせて国だけ太る消費税　紅月
政変をよそにのん気なクラブ振り　隆
山けむる朝は無言で居る二人　与呂志
消費税かけぬ峠の深呼吸　和美
消費税一番儲けたのは野党　美房
平成の夜明けまどわす消費税　きよし
消費税の行方知りたい凧の糸　美代子
一言の添え書嬉し贈り物　伴子
打ち水に歩幅縮める古都の庭　信子
地球最後の日も睡眠は八時間　和子
送り出した後は昼寝の妻の城　吸江

南海川柳会　飯田悦郎報

開店へタレント仲間が賑やかに　覚然坊
追風へ賑やかな女性の応援歌　勝美
賑やかなこと大好きな夏帽子　柳宏子
山いくつ越したか見えて来る世間　憲太郎
大願成就へ何度越す辛苦　柳伸
越えられぬ垣を守って寡婦の日日　真砂
さく越えた少女戻らぬかくれんぼ　悦郎
要領よいエリート落ちた丸木橋　信博
要領のよいのが残るサバイバル　甘平
要領のよい友人に助けられ　花仔
尺八と合いの手民謡引き立てる　東雲
音楽の趣味一致して恋芽生え　志華子
蛙の子娘も目指す音楽家　庸佑
機会ある度にしごかれ太る主婦　しづ子
吊り橋を渡って次の機会待つ　凡子
折角のチャンスを空振りして帰る　重人
子が快癒機会にタバコも酒も止め　正好
チャンスには強いバットが出番待ち　とみを

川柳はびきの　塩満敏報

歩き馴れた道で油断をしてしまう　美代子
もやもやの苦労地酒で洗うとく　美津留
迷い猫いつしか我が家の顔ですみ　シマ子
勤めてた頃にビデオを巻き戻し　シメ子
人生に目くじら立てる事はない　与呂志
あすなろを信ずればこそ二浪させ　かつみ
走る雲落ち着け夜明けまだですよ　白水
消費税せめてと入れる投票日　悦子
年金の出る日を孫も知っている　重人
六十の履歴賞罰なしと記す　吐来
手術後は割れ物並に労られ　健三
天網は恢々ならず巨魚のがす　一屯
年月が他人の顔ですれちがい　ケイ子
消費税怒っています円グラフ　ダン吉
手土産を横目に本音言いそびれ　志洋
どう見ても虎と思えぬ投打とも　蛙声
どん底に生きても明日へ虹の夢　たけし
昼将棋岡目八目邪魔をする　利武
子育ての苦労は言わず舞う燕　絢子
蛇の目傘つい買わされた京の雨　トミ子
馴れてきた一円玉の三ヶ月　淑子
結構がずらりと並ぶお茶の会　一枝
あれからは一円玉は拾えない　昭子
性格がにじみ出ている墨のあと　キミ子
父の日の会話はずんで皆達者　みつこ
ひばりさん歌の青春ありがとう　葉子
消費税斬ってくれよと参院選　繁男
もう一本線を入れたいあみだくじ　伴子
節のある名人の手で壺出来る　敏

NHK学園川柳丸亀大会

日時　10月1日(日)午後1時
会場　丸亀市総合会館（ホール）
香川県丸亀市大手町1－20
（JR予讃本線丸亀駅下車徒歩10分）
宿題と選者（宿題は事前投句、各題2句）
「丸い」　堀口北斗選
「比べる」　岩谷春郎選
「内」　三木時雨郎選
席題と選者（当日出題、各題2句）
安藤富久男選・宮本時彦選
宿題事前投句の締切　9月5日（火）
投句先　〒186－01
東京都国立市富士見台2－36
NHK学園
川柳丸亀大会事務局
投句料　1600円（入選作品集代含む）

柳界展望

集録＝敏・武庫坊

★第12回阪神文芸祭・川柳部門の入選発表が7月16日三田市民会館で行われ、当社同人の次の2氏が受賞。

・兵庫県知事賞

父の手帳にためらい疵が
ひとつある　河瀬　芳子

・阪神県民局長賞

ラストシーンを心に描く
ことがある　春城　年代

★第40回柳都川柳大会は7月23日、新潟厚生年金会館で開かれ、西尾栞主幹が選を担当、高杉千歩さん（八尾市）が奨励賞を受賞。大会終了後、栞主幹夫妻、橘高薫風、舟渡杏花（富山市同人）氏は佐渡を清遊した。

★第20回川上三太郎賞の受賞者が柳都川柳社から発表された。本賞は赤城一平、準賞は山根素蛙・樋口仁の両氏。

★こまつ川柳社創立20周年合同句集『あすなろ』発刊記念川柳大会が9月24日午後1時から小松市公会堂で開かれる。宿題と選者次のとおり。

「小さい」　福岡　竜雄
「　樹　」　松岡　緑郎
「創　る」　長谷川芙美女
「明　日」　田向　秀史
「伸びる」　岩本雀踊子

会費は3000円（句集・発表誌）投句は500円を添え、9月10日までに

〒923　小松市本町1―10
吉田　秀哉宛

★はびきの市民川柳会は9月1日から13日まで羽曳野市立陵南の森公民館で「川柳展」を開催。

★西宮市民文化祭協賛・西宮市民川柳大会は11月5日正午から西宮市立勤労会館で開かれる。会費600円兼題と選者は次のとおり。

①「連想句（福島郁三3回忌追悼＝文楽のキッスカチリと音がして＝から選択」中村東角謝選②「光る」奥田みつ子選③「丸い」松本一郎選④「帆」佐野美知子選⑤「倉」水垣美代子選⑥「和紙」石井冬魚選⑦「鉛」黒川紫香選⑧「土」小松原爽介選＝各題2句。なお、欠席投句は10月10日までに62円切手5枚同封、西宮市城山12―8水無瀬富久恵へ

★岡山県芸術祭参加・第12回ますかっと川柳大会は12月3日午前10時から岡山市中央公民館で開かれる。兼題・選者次のとおり。

「山」延永忠美・「港」本田恵二朗・「川」寺尾俊平
「祈り」西山茶花・「船」藤川良子。会費1500円

▼刊　行▲

★『川柳泉尾』は創刊5周年を記念して合同句集を発刊。会員39名のほか、黒川紫香・小出智子・八木千代氏の作品を収録。薫風氏がはしがき。B6判・88頁。

★『作句の点滴』小松原爽介（B7判・88頁・頒価1000円）申込みは西宮市庭町1―28小松原爽介氏へ

★川柳たましま社の創立30周年句集『無限』第2集が6月30日発刊された。題字と序文は本田恵二朗。田辺炙六氏はじめ86名の作品10句ずつが集録されている。

▽同人消息△

■小林由多香氏（鳥取市・参事）は、『川柳春秋』14号に「人生のパズル」と題して作品50句を発表。

■土橋螢氏（鳥取県鹿野・理事）は、『川柳春秋』14号の「友の会」欄の「雑詠」および「課題＝山」の特選に入選。

おめでとう日本最初のみどりの日

海よりも山が好きだと山にいう

■久家代仕男・原独仙両氏が『川柳松江番傘』8月号に1ページ組で紹介。

■榎本吐来氏（羽曳野市・常任理事）は、はびきの市民川柳会会長に就任。

▽お便り△

■川柳塔きゃらぼくから島根半島潜戸（たけど）納涼句会の寄書きを頂きました。

▼訂　正▲

■8月号各地柳壇＝豊中もくせい川柳会（111P）「鵜飼い舟　浴衣でビール飲んでいる」の作者は博史さんでしたので、訂正いたします。

社　告

このたび橘高薫風氏が川柳塔社編集部長を辞任、代って阿萬萬的氏が十月一日から就任いたします。

前任者同様、何とぞよろしくお願い申し上げます。

川柳塔社

89年度同人総会と二賞表彰本社句会

日　時　10月1日(日)　午後1時開場

会　場　大阪市立労働会館
（JR環状線または地下鉄中央線「森ノ宮」下車すぐ）
電話〇六(九四一)六三三一

▼同人総会　午後2時から
〔議事〕①会計報告②事業経過報告③役員改選④その他

▼本社句会　午後6時から

◎役員・同人の方は、同人総会に是非、ご出席ください。

川柳塔社

第15回堺まつり協賛 堺市民川柳の会

とき　10月15日(日)　午前10時開場

ところ　堺市総合福祉会館
（5階大研修室）

席　題　小西　幹斉選

兼　題　「はじまり」　藤井一二三選
「飾　る」　池　森子選
「リゾート」　久保田元紀選
「　祭　」　後藤　正子選
「にっこり」　岩内　外吉選
「走　る」　竹山　逸郎報
「酔　う」　橘高　薫風選

出句締切　正午

秀句呈賞・会費　各題2句　投句拝辞
1000円
（昼食・作品集呈）

連絡先　河内天笑方　堺川柳会
堺市堀上緑町二丁九―二
☎　〇七二二・七八・四七〇六

岸和田市文化祭参加 第39回市民川柳大会

日　時　10月22日(日)　正午開場

場　所　岸和田市市民会館地下会議室

おはなし　西田　柳宏子

兼　題　「練　習」　深日白光子選
「凍　る」　小出　智子選
「ぶつぶつ」　中田たつお選
「割　引」　阿萬　萬的選
「　熱　」　野村太茂津選
「一　杯」　橘高　薫風選
（1題当日発表）

席　題　河内　天笑選
兼・席題とも2句
（出句は出席者に限る）
締切り　午後2時

会　費　500円（大会誌・記念品呈）

呈　賞　文化祭賞・文化祭奨励賞・文化協会賞・操子賞・きしせん賞

主催　岸和田川柳会
後援　岸和田市教育委員会
岸和田市文化協会

9月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 残る・勘違い・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
堺川柳会	3日(日)午前11時から 浪費・ロビー・廊下・ろくでなし	河内天笑宅　JR阪和線津久野からバス堀上緑町 〒593 堺市堀上緑町2－9－2　河内天笑
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時半から 表札・正論・天国	松江市和多見町　慈雲寺番神堂 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
川柳塔 わかやま	10日(日)午後1時から 知恵・近い・縮む	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町15　野村太茂津
八尾市民 川柳会	10日(日)午後6時から コスモス・高い・歴史・月	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2－141　飯田悦郎
南海 川柳会	15日(金)午後6時から 土地・意味・方法・種類	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
川柳 ねやがわ	17日(日)午後1時から 胃袋・共通・値切る・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6－9　高田博泉 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から 話・屋根・少ない・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
南大阪 川柳会	19日(火)午後6時から 意気・切札・仕向ける・知人	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
富柳会	21日(木)午後1時から 夫婦・踏む・ふもと	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353　池 森子
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(木)午後1時から 根性・担う・タラップ・自由吟	高槻市民会館305号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3－8－8　川島諷云児 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　各題2句
駒つなぎ 川柳会	25日(月)午後6時から 軽い・崩す・点る・毎日	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11　津守柳伸
川柳 東大阪	30日(土)午後6時から 無理・隠れる・けじめ・雑兵	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
※西宮北口川柳会は9月11日（月）15周年記念大会のため85頁参照		

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

本社9月句会

本社9月句会は「川村好郎氏を偲ぶ会」として開催します。詳細は表紙裏に掲載。

川柳塔社

10月の兼題　「読む」「郵便」「メルヘン」「澄む」

10月の本社句会は1日(日)

西日本文字放送作品募集

題「椅子」　橘高薫風選

3句　締切　9月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540　大阪市中央区谷町2丁目2—20

大手前ウサミビル3階

西日本文字枚送　川柳係

『夜市川柳』募集(3句)

題　選者　締切

第4回「友」西川けんじ　9月末

第5回「歩く」但見石花菜　10月末

第6回「首」山本　礫　11月末

第7回「打つ」小出　智子　12月末

投句先　〒593　堺市堀上緑町2—9—2

河内天笑方

堺川柳会

●募集●

11月号発表(9月15日締切)

川柳塔(10句)西尾　栞選

水煙抄(10句)黒川紫香選

愛染帖(3句)橘高薫風選

茴香の花(3句・女性)小出智子選

課題吟(3句)「糸」桜井千秀選

「高い」辻　文平選

「灯台」榎本吐来選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。

★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

12月号発表(10月15日締切)

川柳塔(10句)西尾　栞選

水煙抄(10句)黒川紫香選

愛染帖(3句)橘高薫風選

茴香の花(3句・女性)小出智子選

課題吟(3句)「ベル」千原理瑛選

「幹事」小砂白汀選

「終わる」金井文秋選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友に限らず、どなたでも投句できます。

定価　六百円(送料51円)

半年分三千八百円(送料共)

一年分七千五百円(送料共)

一九八九年八月二十五日印刷

一九八九年九月一日発行

編集兼発行人　西尾　巖

印刷所　藤原童心社

〒545　大阪市阿倍野区三明町二—一〇—一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所　川柳塔社

電話(六)六九一—六九一四番

振替口座大阪8—三三三六八番

＝編集後記＝

☆九月号は「特集・百人一句」をお届けする。厳密にいうと全国区・川柳塔同人区、各五十人一句というべきだろう。しなの川柳社の主宰、石曽根民郎氏は麻生路郎の高弟として、後者に加わって頂いた。

☆七月七日の路郎先生の命日に生駒へ行き、霊前でしばらく先生と話をし、九日の大会の加護などもお願いして来たのだったが、両先生の戒名は、柳粋院釈路郎と釈尼芳諦である。

☆藤沢桓夫先生の満中陰忌は七月二十九日に営まれ、言葉に尽くせぬご厚誼に心からのお礼を申し上げた。位牌には泰桓院殿文耀西華大居士とあった。

☆中島小石さんから掛け軸二点が届けられた。いずれも初代川柳の肖像画で、一点は故生々庵先生が画家に依頼されたものらしい。もう一つは、木枯の句を阪井久良伎が書き、柳翁の肖像を宮尾しげを画伯が描かれたもの。九月の本社句会場に祀り、柳祖を偲びたい。小石さんは、整理をしていて何とはなしに送ったと仰言るが、因縁を思う私だ。

☆「古枯や跡で芽をふけ川柳」柳祖の辞世だとも、そうでないとも言われる句と「雲の峯という手もありさらばさらばです」の路郎の辞世との違いをじっくり味わってみる。

☆このような句が、しみじみ心に訴えてくるような歳になって来たのを自覚するとともに、川柳という文芸に出会い、また多くの仲間との触れ合いにより川柳を続けるたのしさの深まりを身に沁みて思う今日この頃であれば、「私は私の仲間と作品を創っていく」との思いに変りはない。

☆父の戒名は、高岳院潤誉徳風居士である。それなら私は、愛染院柳誉薫風居士だねと妻に話したものだが柳誉薫風禅定門という方がふさわしいように思えてきた。柳の木のある門を懐手をして潜り抜けて行くようなさわやかさで、川柳生活を続けたいと思うのが今の心境である。（薫）

▼国鉄のような経営なら出来る（鬼遊）それは昭和六十一年と書き出して、今なら何年前かすぐに計算できるが、そのうちわかり難くなる元号の不便さを思いながら一九八六年と書き直す。その八月二十六日のことで、国鉄運賃、料金を九月一日から平均四・八％値上げしたいという国鉄の申請を、運輸審議会の答申を受けて運輸省が認可した。その時の拙句である。翌二十七日に国鉄赤字史上最悪とあり、怒り心頭に発したことを覚えている。

▼国鉄の仕組や構成を詳しく知らないが、その頂点に総裁がいて、それ相応の名誉と報酬を受けていた。中には報酬を返還した立派な方もおられたが、常に代表された者が赤字を申し送って名誉と報酬を得ていたことになる。それはそれとして国鉄分割、民営化を巡って国労内部の紛糾により殺傷沙汰があり、また、この九月末までに自殺者だけで三十六人を数えることが出来る。これは占領下の下山総裁事件以上の大事であり只事でない。戦後四十年にしてなお以上の無責任ぶりを見た思いである。

▼ＪＲになって一年有余、民営になると、こうも変わるものかと驚くばかりである。ＪＲの職員方は「えらい会社に入ってしもた」と思っているかも知れないが、サービスの良いこと最高である。商いはすべて客のためにある信条や由。（き）

★朝日新聞夕刊のコラム欄「窓―論説委員室から」にいつだったか、「同志」と「同士」という題で、いちばん混同されやすい文字の例として、この二つの言葉があげられていた。本誌への投句でも誤記が目だつから、やっぱり…と思った。言葉には、覚え違いや勘違いがつきもの―というのがこの一文の主旨だったが、およそ言葉をあつかう者はたえず辞典をひくことを習慣にしたいものである。

★漢字の字体には、新字体と旧字体があり、また、正字・略字・俗字がある。内閣告示による常用漢字というものもある。私たちがつくる句や文は公用文ではないから、すべてをこれに準拠する必要はないが、旧字体は特定の個有名詞以外は使わないようにしたいし、俗字も避けたい。旧字とは獨（独）、俗字は斗（闘）のたぐいである。さらに、接続詞（亦・尚・然し）は仮名書きがのぞましい。

★全く別の話だが、本誌の別の欄（例えば、水煙抄と茴香の花）、本誌と他柳誌に同じ句を出されるケースがあった。これは作家としてのモラルにかかわることであり、もし無意識の過ちであれば、きびしく自戒したい。小集句会での発表句を本誌に投句することの可否については議論の分かれるところだが、少なくとも各地柳壇と他の欄の掲載句をだぶらさないことは可能かつ必要だと思う。（正）

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成元年八月二十五日 印刷
平成元年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七四八号

川柳塔

九月号

定価 六百円（送料 五十円）

みんなこころで生きている。

ウイスキーの決め手は、モルトです。

4月から酒税改正によりお安くなりました
新価格3,750円
容量720mlあたり小売価格（消費税込み）
（旧価格5,000円） 飲酒は20歳を過ぎてから

SUNTORY
WHISKY
ROYAL

MATURED, BLENDED & BOTTLED BY SUNTORY LIMITED

5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時

なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
泉北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店
サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店
なんば新川店
虹のまち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店

551 HORAI

大阪・なんば
蓬莱
TEL 641—0551

雑誌 05703—9